

＜神々の真相 3＞

シュメール文明が開化してから 500 年後にエジプト文明、更にその 500 年後にインダス文明が開化した。両文明はシュメールから派生した文明である。また＜神々の真相 1＞でも見たように、太古に人類を巻き込んだ「神々」の権力闘争があり、その主原因はマルドゥクとイナンナであった。そのイナンナこそ、インダス文明発祥の女神である。そこで、インダス文明についてカッパラーとシュメールの観点から考察する。更に、インドの二大叙事詩から、古代核戦争を考察する。

1：イナンナに関連する＜神々の真相 1＞のまとめとイナンナの性質

(1)イナンナに関連する＜神々の真相 1＞のまとめ

＜神々の真相 1＞では、マルドゥクの野望、マルドゥクとイナンナの確執が「神々」の闘争を引き起こしたことが明らかとなった。そして、インダス文明発祥の「神」はイナンナであり、彼女が管轄していた。そこで、まずはイナンナとマルドゥクに関わる事項をまとめておく。

- ・イナンナは婚約者のドゥムジをマルドゥクの奸計により失い、以後、両者の確執の原因となった。
- ・ドゥムジの遺体を埋葬するために、遺体が安置され、姉エレシュキガルが管理している“下の方のアブズ”に引き取りに行った。しかし、姉はイナンナを疑い、7つの門毎に装具と武器を1つずつ取り上げ、姉の前に衣服を脱がされて引き出された。そして、イナンナは杭に吊るされたが、エンキの密使により“死んだ”はずのイナンナは蘇った。
- ・イナンナはエンキにマルドゥクの死を要求したが、聞き入れられなかったので、エンリル一族はマルドゥクを地球から追い出すことを決議した。
- ・イナンナ一族とマルドゥク一派の最初の戦いで、マルドゥクはピラミッドに生きたまま幽閉された。しかし、アヌナキ決議により何とか救出されたマルドゥクは追放された。
- ・マルドゥクは、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、“神の神性”という概念は彼の興味を大いに惹き、自分自身が偉大な「神」になると宣言した。
- ・マルドゥク追放後のエジプトに対して、イナンナは亡くなったドゥムジの継承権を主張した。しかし、エンキとエンリルは決めかねたので、アヌが来訪した。イナンナはアヌに気に入られ、アヌが地球を視察するために使う船を持参金として与えられた。それに対して、イナンナは喜び踊り歌った。彼女のアヌへの讃歌は、やがて聖歌として口ずさまれることになった。

- ・イナンナは美貌でエンキに取り入り、“メ”を手に入れた。
- ・バベルの塔を建造したマルドゥク一派は、エンリル一族によって完膚無きまでに叩きのめされた。
- ・イナンナの都市ウヌグ・キに王権が移譲されると、人々はイナンナに次のような賞賛の聖歌を贈った。“キラキラとまばゆい“メ”のレディ。正義に適い、光を纏った、天国と地球に愛されし者。アヌの愛によって聖別され、敬愛を一身に集め、彼女は 7 度“メ”を獲得し、手に備えている。それらは王権のティアラに相応しく、高位の司祭職に相応しい。偉大なる“メ”のレディ、彼女はその守護者！”
- ・イナンナは第 3 の地域アラタ＝インダス地方を与えられた。しかし、イナンナは既にエンキから幾つかの“メ”を奪い取っていたので、エンキは文明化された王国の“メ”をその地域に与えず、完全な文明は花開かなかった。
- ・イナンナはウヌグ・キにギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置し、若い英雄の結婚式の夜に誘い出し、彼女と寝ることにより、長生きと至福の未来を約束した。（“聖なる結婚”の儀式。）彼らは朝になると、彼女のベッドで死んでいた。これが、後のあらゆる宗教に於ける性的退廃の原型となるものである。つまり、イナンナはサタンの原型の一部である。
- ・“聖なる結婚”の儀式で死ななかった者がいた。英雄バンダ、ウツの曾孫である。それにより、彼女は不死の力を手にしたと思い込み、自分のことを女神イナンナ、“不死の力”と呼ぶことにした。しかし、イナンナと双子の太陽神ウツは困惑し、エンキとニンフルサグは「死者を蘇らせることなど、不可能だ！」と言った。なお、イナンナの名は、イルニンニ→アンニツム→イン・アンナ→イナンナとなっている。
- ・マルドゥクは、王や民の忠誠を維持するために、“来世で神の国に行き、そこで復活できる”という死生観を植え付けた。これは、ウツが玄孫ジウスドラを“二輪戦車の場所”へ導いたことに依る。
- ・マルドゥクはラーとして、あらゆる「神々」の上に自分を君臨させ、他のアヌンナキの属性を勝手に我が物のように語った。
- ・エンリルの命により、イナンナは自分が愛したアルバカドを連れて来て、エンリルがシャルル・キン（サルゴン）、“高潔な摂政”と命名し、王として指名した。
- ・マルドゥクがバビロンに強引に神殿を建造すると、怒ったイナンナは彼の手下を手当たり次第に殺した。

- ・シャルル・キンの孫ナラム・シンが王座に就いた頃、イナンナは全権力を手に入れることを思い描き、ナラム・シンに全土を奪い取るよう命じた。ナラム・シンは第 4 の地域を地球人の軍隊が通過するという冒流行為を働き、マガンに侵攻して、封印されたエクルに侵入しようと試みたが、エンリルの怒りを買い、全滅させられた。

- ・マルドゥクの“自らが神として君臨する時代となった”という宣言がきっかけとなり、ニヌルタとネルガルがソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイム、ベラ（ツォアル）の王たちが同盟を結んだシディムの谷＝塩の海を核攻撃した。それが原因で、シュメールは“死の灰”に覆われ、滅亡した。

(2) イナンナの“性”質

イナンナ（旧名イルニンニ）はアッカド人とシュメール人にはイナンナあるいはイニンあるいはニンニ、アッシリア人とバビロニア人とヒッタイト人にはイシュタルあるいはエシュダル、カナン人とヘブライ人にはアシュタル、ギリシャ人にはアフロディーテ、ローマ人にはヴィーナスとして、多くの愛称で知られた“愛と戦いの女神”である。このように、シュメールだけではなく様々な国に登場するイナンナは、“冒険好きな旅行者”とも言われていた。つまり、現在の多くの国に影響を及ぼしているのである。そのため、イナンナの性質については良く知らなければならないし、それが古代文明やいろいろな宗教の“闇の側面”を解く大きな鍵となる。また、イナンナは“奔放な性”で有名だった。（冒頭で“性”を強調しているのは、そのためである。）そこで、＜神々の真相 1＞では触れなかったイナンナの物語を見てみる。

(2)－1：イナンナの物語

シュメールのウルクには、大神アヌが公式に地球に降臨する際に使用する神殿があった。「神々」以外で最初にウルクの支配者となったのは、太陽神ウツと人間の間の子メシュキアガシェルである。その後、メシュキアガシェルの子エンメルカルがウルクの支配者となった。神殿では、大神アヌと正妻アンツは別々の寝室を使っていた。アヌは降臨の儀式が終わると、ギパールと呼ばれる彼だけの館に入った。そこには、選ばれた処女エンツが待っているのが習わしだった。エンツは王の娘であり、王たちは自分の娘をエンツにさせようと務めた。エンツが王のために長寿と健康を「神」に直接祈ることができたからである。エンツとは“神の貴婦人”であり、エンツを通じて王たちは自分たちの守護神に直接近づくことができた。

ところが、ある時、このギパールでアヌを待っていたのは、人間の娘ではなく、アヌの曾孫イルニンニだった。イルニンニは最も若い「神」だったので、遠い地アラタ（インダス地方）を与えられていた。しかしイルニンニは、エンメルカルの大伯母だから、割り当てられていた遠い地アラタよりもウルクに住むべきだ、と思っていた。そのために策を講じ（他の「神々」に仲介を頼み）、降臨したアヌに近づいて自分の思いを主張し、計画は見事成功した。イルニンニはその美貌でアヌに迫り、アヌの愛人となったのである。これ以後、イルニ

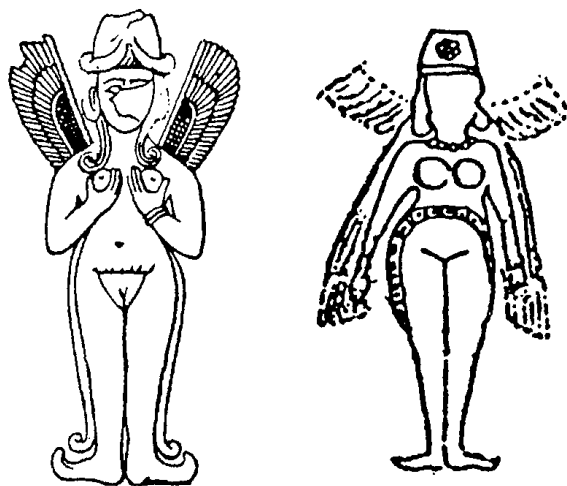
ンニはイン・アンナ＝イナンナ（アヌの愛人）と改名された。イナンナの更なる別名がアンニツムで、アヌの最愛の人、という意味である。それ故、イナンナは女性であるにもかかわらず、王位継承順位数は双子のウツの 20 に継ぐ 15 であり、叔父であるイシュクルの 10 よりも上である。

この“事件”以降、アヌはイナンナにこの神殿を使うことを許し、ギパールの役割は“ギグヌ（夜の愉しみの家）”へと変貌していった。

なお、イシュクル（アダド）はエンリルの最愛の（末）息子であり、権力と嵐の特権を授けられた神である。愛人のことを“ドド”と言うが、イシュクルはイナンナとはとりわけ仲が良く、イナンナの愛人で叔父でもあったので、“アダド”と呼ばれたのであろう。（ゼカリア・シッチン氏の説。）

このようにウルクを手に入れたイナンナは、ウルクを文明の拠点とするためには、エンキの知恵が必要だと考えた。そこで、エンキにも取り入って騙し、エンキから“神の公式”＝“知恵の秘密”＝“メ＝ME（知識のディスク）”をもらうことに成功した。これらは、崇高な王の杖、崇高な神殿、寺院とその儀式、祭司と従者、司法と法廷、音楽と美術、記録法と数学などであり、最も重要なものが“兵器と戦法”である。

以上のように、アヌとエンキに色仕掛けで迫って願望（野望）を満たし、叔父イシュクルとも良い関係だったことから、イナンナは誘惑する“裸の女神”として描かれていることが多い。



この頃、シュメールの古文書にあるような“エンメルカルとアラタの抗争”が始まった。これは BC2850 年頃、ウルクの統治者エンメルカルと、アラタの王（名前不明）との間に起きた権力闘争と、“女神との愛”にまつわる物語である。この抗争は、イナンナの権力拡大と共に起きたものだった。イナンナが遠い地アラタに住むか、あまり知られていないウルクに滞在するかを決めかねており、これがエンメルカルとアラタの女神招聘合戦へと発展したのである。その最終的な目的は、イナンナがどちらに住むかということではなく、どちらの王と“愛の契り”を結ぶか、ということだった。イナンナは最終的にウルクへ移ったが、

冒険好きな旅行者イナンナは“アラタの彼女の家”も見捨てなかった。

このような密通は、イナンナの両親のみならず、双子のウツの不興も買ってしまった。ウツに叱責されたイナンナは、こう述べた。「それなら、誰が私の性欲を満たしてくれるの？私のアソコの小さな丘を、どなたが耕してくれるの？私のアソコは濡れた畑。どなたが牛を入れて下さるの？」これに答えてウツは言った。「おやおや、淑女ともあろう者が。ドゥムジが、立派な種を持っている。お前のために、耕してくれるさ」

イナンナはドゥムジと相思相愛の仲で婚約した。しかし、2人の愛は長続きしなかった。すべての支配権を熱望するドゥムジの兄マルドゥクは、最初からこの結婚に反対だった。エジプトを管轄していたドゥムジはイナンナをエジプトの女王にする約束をしたが、それがマルドゥクの怒りを買った。マルドゥクの策によりドゥムジは妹ゲシュティナンナと交わり、事の次第を知ったドゥムジは錯乱して逃げ惑い、巨大な滝壺に落ちて死んでしまった。この悲劇的な結末が、後の様々な“愛の悲劇”の原型となる。そして、ドゥムジの命日は、1日中喪に服す習わしとなった。イナンナの悲しみは、約2000年後のイスラエルでも、女たちがタンムズ（ドゥムジのヘブライ語）のためにすすり泣いているのを、預言者エゼキエルが見て驚いたぐらいである。

イナンナが悲しみから立ち直るのに長い年月が掛かったが、イナンナはギグヌに戻り、ようやく失われた愛を忘れることができた。ドゥムジの命日の度に自分の“船”に乗って放浪し、次々と人間の男（王、英雄）を誘い、一夜を共にしたのである。そして、“神との遭遇”である“性の儀式”が“聖なる結婚”の儀式としてギグヌで行われるようになった。

夜を共にした男たちの運命は、ある者は翼を破られ、ある者は穴の中に埋められ、またある者は心を奪われて狼にされてしまった。このように“聖なる結婚”の儀式は、イナンナにとっても男たちにとっても苦痛を伴う“歓びの命日”だった。それをよく知っていたギルガメッシュは、イナンナに招待された時、イナンナの以前の恋人たちが“使い捨て”にされた事実を指摘して彼女の申し出を断り、逆鱗に触れている。

イナンナはこの命日の日々を、彼女の“船”に乗って放浪していたので、翼のある女神としても描かれている。

そんなイナンナであるが、ある時、逆に人間の男に強姦されてしまった。アッカドのサルゴンである。

“ある日、女王が空を飛び、地球を横切った後、ある日、イナンナがエラムとシュブールと…を横切った後で、神の愛人は疲れ、寝てしまった。私は、庭の外れから彼女を見た。私は彼女に接吻し、体を重ねた。”

神の愛人とは大神アヌの愛人のことで、イナンナのことである。気付いたイナンナは怒らなかった。むしろ、自分の好みのタイプだった。その頃、シュメ

ールでは遷都を繰り返し、都市間の争いが発生し、ついには都市の守護神同士の抗争にまで発展していた。そこで、サルゴンを強い男と見込んだイナンナは、シュメールとアッカド全土の王として、彼を推薦することとした。そして、サルゴンはイナンナの変わらぬ愛人となった。

ところで、前述の“聖なる結婚”の儀式とは別に、イナンナは王たちと一緒に新年の祝いの儀式も行うようになった。そして、その王たちを“聖なる結婚”の儀式の掟の中に組み込んでしまったのは、サルゴンの後継者たちの、シュメールとアッカドの王たちの時代だった。最初の頃は「神々」だけが集い、アヌンナキの地球滞在記などが生々しく語り継がれており、“ア・キ・チ（地球の生命の創成）”と言われた。王権導入の後、イナンナは王たちをギグヌに招待し、彼女の“性のパートナーの死”を再現し始めた。死ねば、王は交代させられた。これは祭事全体の流れの中に取り込まれた。そのため、王たちはイナンナと一夜を過ごしても、何とかして死なずに済む方法を見つけ出さねばならなかった。そして、これは王の運命だけではなく、来るべき年が豊作となるか、凶作となるのかを占う神事でもあったのである。

この祝典の最初の4日間は、「神々」のみが参加した。5日目に王が登場し、高位の従者を引き連れてイシュタル通り（現在はベルリンの近東アジア博物館の中に再構築されている）を行進する。王が神殿に到着すると、待っていた高僧が王の印（冠と笏）を取り上げ、至聖所の中の神の前に置く。そして、権力の印を奪われた王の顔を、高位の祭司が打ち叩く。それから王を跪かせ、王が犯した罪のリストを読み上げ、神の許しを求める“償いの儀式”に参加させる。次に祭司は、この街の外の、死を象徴する穴に王を導く。王は「神々」が彼の運命を定める相談をしている間、この穴の中に捕らえられている。9日目に王は穴から出て、王の印を返され、再び行列を率いて街に帰る。そして、夜が迫ると体を洗い清め、香水を付けられ、いよいよギパールの館に導かれる。やがて朝になり、夜を生き抜いたことをすべての民に知らせるために、王はその姿を民の前に現す。こうして“聖なる結婚”の儀式が終わり、王は次の1年間の統治を許され、その地と領民は繁栄の時を約束される。

このような儀式は、古代近東のすべての地域で、2000年以上、情熱と歓びをもって行われていたらしい。（シュメール学者サミュエル・N・クレマー著、「聖なる結婚の儀式」）聖書の雅歌にも、“宴の家、アヌギム”での“愛の歓び”として歌われているほどである。このヘブライ語の語源は、シュメール語のギグヌ（アヌのギグヌ）であることは明白である。

その昔、ギパールは「神」と公式の配偶者が、夜間、休むための離れ家だった。少なくとも、エンリルとニヌルタが滞在していた時まではそうだった。しかし、イナンナがアヌとウルクで会うようになってから、イナンナがドゥムジとウルクで会うようになってからは、“一夜を楽しむ密室”ギグヌへと変貌していった。そして、この“新しい利用法”を、他の男神たちが真似るようになったのである。特に有名なのは、ウルにあるナンナル（イナンナの父）のギパールである。ここでは、“イナンナの儀式”に於いて王が演じた役割を、“神の貴

婦人＝エンツ（シュメール語ではニンディンギル）”が演じた。このギパールは、ナンナルの神殿からは近く、ナンナルの妻ニンガルが住んでいた場所からは遠かった。正式な妻以外に、このような“神の第 2 夫人”を持つ習慣が、初期の王朝時代から新バビロニア時代に至るまで、2000 年以上にも渡って続いたのである。

だからと言って、正妻とエンツの間に敵対関係があったわけではなく、エンツが女神ニンガルに贈り物を捧げているように、良好な関係にあった。

古代近東の王たちは、自分たちの都市に次々とギパールのような館を造り、自分たちの娘だけがエンツになる方策を講じた。エンツはいわゆる“神殿娼婦”とは異なる。神殿娼婦はクアディッシュと言われ、種々の尼僧たちが神殿で行ったが、聖書でも軽蔑的な職業として取り上げられている。（実際の「神々」とではなく、祭司などと交わる。）しかし、エンツは神殿娼婦や「神々」が持つ妾とは違い、子供を産まなかったし、何らかの処置により子供ができなかった。これに対し、普通の妾は子供を産むことができたし、実際に生んだ。

このような規則や習慣は、「神」の血統を主張する王たちにとっては、その血統を特殊な方法で証明しなければならないことを意味していた。エンツから子は生まれず、「神」の妾の子は正妻の子（「神々」同士の間にも生まれた子）には敵わなかったからである。様々な王たちが、女神ニンスン（イナンナ）を母とする、と主張したのは、このような理由のためと、実際にイナンナと交わったためである。

ウル第 3 王朝時代（？）からイシン第 1 王朝時代（？）にかけ、イナンナは国家祭儀の聖婚儀式で祀られた。この儀式では、儀式参加者たちが聖婚歌を唱和するなか、イナンナに扮した高位の女祭司が、配偶神のドゥムジに扮した王と儀礼的に交わる式次第も含まれていた。

なお、後にマルドゥクがバビロニアの主神となると、イナンナはウルクを追われた。これ以後、イナンナは武装した戦う女神となり、ますますマルドゥクとの対立は深まった。バビロニアの王ナブネイドは言っている。

“金の部屋に住む身分の高い皇女、ウルクのイナンナ、引き具を付けた 7 匹の獅子の二輪戦車に乗った彼女。ウルクの住民は、王エルバマルドゥクの規則により、彼女の崇拝を止めて、彼女の部屋を取り除き、軍の馬具を解いた。イナンナは怒ってエアンナを去り、見えない場所に留まった。”

そして、新年を祝う儀式も、マルドゥク流に変えられた。新年祭はサグ・ム・ク（年の初め）と言われ、7 日間続けられた。この間、主従の身分差は無くなり、親は子供を罰せず、通常の仕事はすべて休みであった。新バビロニア時代にはアキツと呼ばれ、春のニサンの月（春分を含む月）の 12 日間であった。祭儀の内容は、次の通りである。

主神マルドゥクは人民の代わりとして一旦裏切られ、消え去らなければならない。王も、神殿の前で権威を象徴する一切のものを投げ出し、国民の代表として「神」に 1 年間の不幸な出来事を釈明し、許しを乞う。すると、ウリガル

と呼ばれる主教が王の頬を打ち、大衆の前で説教する。その間、町は灯を消し、人々はマルドゥクを求めてさ迷う。しかる後、マルドゥクの像を華やかに飾りつけ、栄光の“復活”をさせる。

クライマックスは、「神」マルドゥクとその妻サルパニトゥムの“聖なる結婚”である。次の 1 年が平和で豊饒であるように祈念し、神に代わって国王が神殿の女祭司と交わった。実際には、用意された奴隷がその期間だけ王位に就き、これが終わると王の身代わりとして殺害されたい。

また、バビロニアでは性生活は重要な意味を持っていた。性的な節制は不幸の原因になるとして避けられ、性を拒む女性は悪魔の手先とされた。このようにして、性的退廃が蔓延していったのである。

(2)－2：イナンナの物語から言えること

宗教の中には、“性的儀式”を重視しているものがある。その根源こそが、このイナンナのギパール、ギグヌなのである。元々はアヌのエンツだけであるが、それを“聖なる結婚”の儀式として祭事の中に取り込んだのは、イナンナである。後になって、他の男神たちも真似るようになり、それが後の偶像崇拜に於ける“性的儀式”に繋がっていったのである。更に、そこに人身供犠などが重なったのが悪魔崇拜、黒魔術、ディオニソス崇拜、チベット密教の無情瑜伽（ゆが）タントラなどである。（無情瑜伽タントラの詳細は＜その他の代表的宗教＞参照。）

イナンナは人類に“聖なる結婚”の儀式という性的に誤った道＝左道（さどう）を教えてしまった。そういう意味で、イナンナはサタン、ルシファーの原型の 1 つである。他にもサタン、ルシファーの原型は、神界で天使の最高位にあったルシフェルは、自らが神として振る舞おうとしたが、「神々」との戦いに負けて地界に堕ちてしまい、墮天使ルシファーとなったことである。これは、＜神々の真相 1＞で示したように、マルドゥクの地球人との結婚を機に反乱した、火星にいたイギギの象徴である。つまり、サタン、ルシファーの原型はイナンナとマルドゥクである。この両者の確執が原因で核戦争となったのだから、確かにサタン、ルシファー的である。

イナンナの奔放な“性”は彼女の元々の気質によるが、ドゥムジの死により、一層それが強調される形となった。また、それだけではなく、イナンナはエンキからもらった知恵も理解できた聡明な女神である。そして、マルドゥクによってウルクを追われてからは、戦う女神と化したのである。

インダス文明の重要な神の 1 人シヴァは破壊と創造の神であり、リンガ（男性器）が象徴であるが、まさに、このイナンナの性質そのものである。

他に、イナンナが王たちと一緒に祝った新年の儀式が興味深い。高僧が王の印を取り上げ、権力の印を奪われた王の顔を高位の祭司が打ち叩き、王が犯した罪のリストを読み上げ、死を象徴する穴に王を導く。そして、王は 9 日目に穴から出て、10 日目の朝に夜を生き抜いたことをすべての人たちに知らせるた

めに、王はその姿を人々の前に現す。

イエスはユダヤの王と主張したが、祭司たちが認めず、極刑とした。兵士はイエスの着ている物を剥ぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また右手に葦の棒を持たせて（以上、王の印）、その前に跪き「ユダヤ人の王、万歳」と言って侮辱した。唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭を叩き続けて侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架に掛けるために引いて行った。そして、イエスは十字架に掛けられて息を引き取り、横穴の墓に葬られたが、3日後に“復活”し、40日後に昇天した。

つまり、イエスの重要な物語は、この“イナンナの新年の儀式”が原型である。そして、王が9日目に穴から出て“復活”し、10日目の朝に民の前に姿を現したことは、「生命の樹」に於いて10個のセフィロトをすべて通過し、最高セフィラ“ケテル”に達して「神」から知恵を得る＝「神」から認められることの象徴である。

*アダドとヤハウエの関係について

シュメール語、ハッチ語、アッカド語、ウガリト語、ペルシャ語の概略を記した「楔形文字の初歩」（飯島紀著、国際語学社）に興味深い記述が見られたので紹介する。

メソポタミアの太陽神ウツはアッカドではシャマシュであるが、後に天候神によって主神の座を奪われた。その天候神は、アッカドではアダドと呼ばれた。ハッチではタルフ、所によってはテリピヌシュ、テシュブなどとも呼ばれており、ギリシャではゼウスである。

また、＜神々の真相2＞で述べた八角形の米印は、シュメールではDINGIRと読んで大神アヌを表し、アッカドではILUとなる。ILUは後にELH、つまり神エローハ（複数形はエロヒム）となった。ウガリト語では最高神のエルが“シュム・ベニイ・ヤウ＝わが息子の名はヤウ”である。ウガリトは現在の地中海沿岸北部のラス・シャムラ（茴香岬、ういきょうみさき）であり、キプロス島の対岸にある。ここはエジプトと地中海沿岸地域の貿易の中心国であり、聖書で言うカナン地域である。この辺りの最高神はエルであったが、後にバアルにその座を奪われた。聖書の詩篇の多くは、バアルの名をヤハウエに取り替えたものである。そして、後にバアルはヤウにその座を奪われた。

これらの話を統合すると、DINGIR＝ILU＝ELH＝シュム・ベニイ・ヤウとなる。DINGIRがアヌならば、ヤウはエルの息子だから、エンキもしくはエンリルとなる。また、アヌはほとんど登場せず、実際の最高神はエンリルだったことからすると、ヤウはエンリルの息子の中の誰か、ということになる。エンリルの息子には、ニヌルタ（50）、ナンナル（30）、イシュクル（アダド、10）がいる。（括弧内は王位継承順位。）この中で暴風雨神として喩えられるのはイシュクルであり、天候神に相当する。イシュクルはフルリ語／ヒッタイト語でテシュブ（風を吹く者）、アモリ語でラマヌ（雷鳴を発する者）、カナン語でラギム（雹の製造者）、インド・ヨーロッパ語でブリアシユ（光製作者）、セム語でメイル（光で照らす者）として尊敬された。そうすると、ヤウはイシュクル＝アダドとな

り、アッカドでアダドと呼ばれていた天候神と一致する！ヤハウエの象徴は雷、嵐などだから、エンリルの象徴であると同時に、エンリルの血を引く者の象徴でもある。

また、イシュクルは“遠くの山に住む神”という意味である。そして、ヤハウエの前名は EL SHADDAI であり、SHADDAI の語源はアッカド語で山脈を意味する SHADU である。つまり、“EL SHADDAI＝山の神”ということであり、単純に考えれば、ヤハウエ＝イシュクルとなる。

だからと言って、ヤハウエ＝イシュクル（アダド）というわけではない。＜神々の真相 1＞で見たように、ヤハウエはその場の状況に応じてエンリルだったり、エンキだったりするのである。つまり、ヤハウエは「神々」を 1 つにまとめたものであり、最高神エンリルの最愛の息子イシュクルの名を象徴として使った、ということである。

ウツ（シャマシュ）は、後に天候神（暴風雨神）アダドによって主神の座を奪われた、とあるが、これはウツとアダドが敵対したことではなく、人類が太陽神よりも天候神であるアダドの方を崇拝するようになった、ということである。これには、マルドゥクの影響があるように思われる。

マルドゥクが元々支配していたのはエジプトである。カナン最高神はエルであったが、後にバアルにその座を奪われた。バアルは偶像崇拝の代表的な神であるが、モデルは元々エンリルである。エンリルは偶像崇拝が盛んだったフェニキアでは主要三神の 1 人で、父なる神として知られている。シドンに於いてはバアルと呼ばれていた。フェニキア人の神話に於いては、強さと創造力を象徴する“牡牛”で表現される。しかし、メソポタミアがマルドゥクに支配されてからは、マルドゥクがバアルと化したのである。マルドゥクは暴風雨神でもあるから、暴風雨神という点からはアダドにも重ねることができる。つまり、カナンのマルドゥク崇拝が始まってからは、同じ暴風雨神ということで、メソポタミアでも太陽神に代わって天候神アダドが崇拝されるようになったのである。これは、「神々」の本質を理解できなかった人類の混乱である。

そして、後にバアルはヤウにその座を奪われ、聖書では完全にヤハウエに置き換えられ、バアルは典型的な偶像崇拝の神に転落したのである。

このようなバアルやヤハウエの性格は、現在でも思想的に混乱を招くが、1 つの神名に対応する「神」が、状況に応じて変化していくと考えれば、辻褄が合うように説明できる。

なお、アダドは“最愛の人”という意味で、末っ子のイシュクルはエンリルから最も可愛がられた。イシュクルは兄弟のナンナル、そして甥・姪のウツ、イナンナと親しかった。とりわけ、イナンナとは仲が良かった。

イシュクルは、エンリルからシュメールとアッカドから遠い地、メソポタミアの北と西の山（トルコのトロス山脈、タウロス山脈）の土地（アナトリア）を与えられた。何故、エンリルは最愛の息子にニップールから離れるようにしたのかというと、継承争いの危険な戦いから最愛の息子を遠ざけるためである、

とゼカリア・シッチン氏は推定している。

カナンは後にイスラム系セルジューク・トルコの領地となり、マムルーク朝を経てオスマン・トルコが 1917 年まで支配したから、イシュクルの支配地と関係が深い。そうすると、カナンの主神の変遷は、次のようになる。エンリル系バアル→マルドゥク系バアル→ヤハウエ（エンリル、イシュクル）→アッラー（マルドゥク）。ここからも、マルドゥクとエンリル系、特に同じ天候神として重ねられるイシュクルとの対立も理解できる。

(2)－3：イナンナの冥界下り

死んでしまった冥界のドゥムジをイナンナが訪ねる物語が幾つかある。必ずしもドゥムジを訪ねるとは限らないが、幾つかのヴァージョンを紹介する。原型は、イナンナがネルガル（エンキの息子で、冥界の女神でイナンナの姉エレシュキガルの夫）の協力を得て地下に潜行したことである。

(<http://cypress.s2.zmx.jp/>参照。)

・その 1

イナンナとタンムズ（ドゥムジ）は相思相愛だったが、ある時、タンムズが死んでしまった。イナンナは嘆き悲しんだ。そこで、イナンナは冥界のタンムズに会いに行き、あわよくばタンムズを連れ帰ろうと思い、冥界へ向けて出発した。ただし、神であろうと何であろうと、入ったら最後、原則として二度と出ることのできないのが冥界の掟である。

イナンナは何とかして、暗く恐ろしい冥界に辿り着くと、門番に向かってこう言った。「水の門番、門を開けなさい。もし開けないなら、門を破壊し、門を微塵にし、敷居を壊して通って行くわよ。そして、死人を起き上がらせ、生者を噛み殺させよう」門番はイナンナの脅しには屈せず、自分 1 人の判断で門を開くことはできないとイナンナに言い、冥界の女王アルラタ（エレシュキガルの別名）に伺いを立てに行った。彼女はイナンナの振る舞いを聞くと、立腹した。そして、イナンナのために死んだ者たちについて、彼女に尋ねた。イナンナは、「妻の元を去った強者のために、夫の抱擁から消え去った女のために、若くして奪い去られたひとり子のために、私を泣かせよ」と言い、女王アルラタはこう厳命を下した。「門番、行って門を開けなさい。そして、掟通りにもてなさない」これは、イナンナを神の待遇で扱うのではなく、一般の死人と同じように待遇せよ、という意味である。門番はこれに忠実に従い、イナンナは冥界の掟により、冥界の各門で身に着けていたものを奪われなければならなかった。イナンナは立腹したものの渋々従い、冥界の 7 つの門を 1 つずつくぐり抜ける度に、各門で身に付けていたものを奪われ、最終的に一糸まとわぬ姿となって姉の前に立っていた。

姉は、一足先に冥界に着いていたタンムズを気に入っていたので、2 人の姉妹間には強い敵愾心が湧き上がっていた。姉は、イナンナにも他の死者と同様に、敬意を自分に払わせようとしたが、イナンナは全裸にも関わらず、“空の女王”に相応しい尊大な態度を崩さなかった。姉はその不遜な態度に腹を立て、イナンナをあくまで 1 人の罪人として扱うことにした。（これが、本当の姉妹か？）

アルラタは宰相ナムタルを呼び、イナンナの全身を病気の杖で叩きのめさせた。イナンナは大地の生育や豊饒を象徴する。それが杖で打たれ死に向かうということは、豊饒の死をも意味する。そのため、それに連動するように、地上でも大変な騒ぎが起きた。

伝令神パップ・スカルは、イナンナが冥界に向かったことを聞くと、慌てて太陽神ウツ（シャマシュ）に伝えた。ウツは月神シン（ナンナル、イナンナの父親）や深淵神エンキに相談した。すると、イナンナを冥界の門から救い出すために、エンキは人獅子を創った。（スフィンクスか？）ナズシュ・ナミル（Nadushu-namir）と名付けられた人獅子は、冥界の7つの門を何事もなく通行する力を与えられていた。ナズシュ・ナミルは冥界へ行き、アルラタにイナンナを引き渡すよう伝えた。アルラタは怒ってナズシュ・ナミルの言葉を聞かなかった。ナズシュ・ナミルは執拗に「神々」たちの命令を繰り返した。

アルラタはナズシュ・ナミルに呪いの言葉を吐いたが、「神々」たちの命には従わなければならない。ついにはナムタルを呼び、「イナンナに生命の水をやって、私の前に連れて来なさい」と言って、イナンナが冥界を出て行くことを許した。

イナンナはナムタルに連れられて、来た時とは逆の順番で冥界の門をくぐって行った。そして、奪われたものも、すべて返還された。ナムタルは言った。「あなたは自分が解放された償いを払っていないから、あなたのタンムズのために、もう一度冥界に戻らなければならないだろう。輝かしい生命の水はタンムズに注がれ、華麗な衣服はタンムズの身を装い、水晶の指輪はタンムズを飾るだろう」イナンナはこれを聞くと胸を悩まし、大切な護符の螺蓋石を取り戻すのを忘れてしまった。そしてイナンナは、タンムズのために嘆くのであった。

*別ヴァージョン 1 では、イナンナは冥界でタンムズと再会したが、タンムズから「帰るわけには行かない」と断られ、1人暗闇に座り込んで嘆き続けた。別ヴァージョン 2 では、イナンナではなくタンムズの妹のベリト・シェリが冥界に行っている。ベリト・シェリがタンムズに地上に帰るように言うと、「お前と一緒に帰ろう。母のもとへ、一緒に帰ろう」と答えた。

なお、ナムタルとは、＜神々の真相 1＞で述べた宿命（ナム・タル：自由選択に左右される事の成り行きで変更可能）に由来するものであろう。

・その 2

イナンナは、姉のエレシュキガルが治める冥界を訪ねた。（タンムズを冥界から連れ帰すためではなく、理由は不明。）冥界の門の前に立ったイナンナは、門番に向かって言った。「私のために門を開けなさい。もし開けないなら、門を破壊し、門を破壊し、門の側柱を破壊し、扉も破壊して、死人を立ち上がらせて生者を食べさせよう。そうすると、生者より死者の方が多くなるわよ」門番が慌ててエレシュキガルにお伺いを立てに行くと、門番に指示した。「イナンナのために門を開けなさい。古き掟に従って、彼女をもてなしなさい」

イナンナは冥界の 7 つの門をくぐるが、掟に従い、身に着けていたものを 1 つずつ取られていった。第 1 の門では頭を飾る大王冠、第 2 の門では耳飾り、第 3 の門では首飾り、第 4 の門では胸飾り、第 5 の門では誕生石をあしらった腰帯、第 6 の門では腕輪と足輪、そして第 7 の門では立派な衣服を。(オスカー・ワイルド原作、オペラ「サロメ」の「7 つのベールを脱ぐ踊り」の原型だ。) エレシュキガルはナムタルを呼ぶと、イナンナに向けて 60 の病魔を差し向けるように言いつけた。

その頃地上では、生殖に関わる女神イナンナが冥界に降りたため、生殖に関わるありとあらゆる営みが途絶えていた。「神々」の宰相パップ・スカルはエンキに相談した。エンキはエレシュキガルの心を和ませるような、美しい若者を創った。エレシュキガルが彼に心を奪われ油断した時に、彼女に生命の水をねだり、それを飲む振りをしてイナンナに振りかけ、イナンナを地上に甦らせる作戦であった。

しかし、この作戦は見破られて失敗したものの、エレシュキガルはエンキの創った若者に呪いの言葉をかける一方、イナンナのことは地上に返すことにした。エレシュキガルはナムタルに命じて生命の水をイナンナに掛けてやると、冥界に降りてきたのとは全く逆の手順で 7 つの門をくぐらせた。その度に、彼女から奪われていた持ち物も、1 つずつ返還された。そうしてイナンナは、地上に帰ってきた。

* 叙事詩では、かつての愛人だったタムズを身代わりにするから自分を解放してくれ、とイナンナが頼むところで終わるそうである。何なんだ？

・その 3

何を思っか、女神イナンナは冥界に行くことにした。そして豪華な装飾品と衣装を身にまとい、従者のニンシュブルに「私の為に喪に服しなさい。それから、エンリルとナンナルとエンキに、私が冥界で殺されることがないように頼んでおきなさい」と言いつけ、イナンナは冥界へ下って行った。

しかし、豪華な衣装は冥界の 7 つの門で次々に剥ぎ取られた。更に、対面した冥界の女王エレシュキガルの死の眼差によって、イナンナはぱったりと死体になってしまった。

イナンナが冥界に行ってから 3 日目。ニンシュブルはエンリルとナンナルに助けを求めた。しかし、2 人の神の答えは芳しいものではなかった。彼らは、イナンナの冥界訪問が、天と冥界の両方を我がものにせんとする意図で行われたものだとし、助けることを断った。ニンシュブルは次にエンキに助けを求めた。エンキはニンシュブルの言葉を聞くと、爪の垢から創造されたクルガラとガラトゥラに“命の草”と“命の水”を持たせ、冥界に向かわせた。クルガラとガラトゥラはエンキの言いつけ通りにイナンナの死体をエレシュキガルから譲り受け、“命の草”と“命の水”を振りかけて生き還らせた。

しかし、イナンナが冥界を出るためには、彼女の代わりに冥界に留まる者が必要である。イナンナは、彼女の代理人を捕らえるためについて来たガラ霊たちを引き連れて、地上に戻った。すると、彼女の夫であるドゥムジが、喪に服していなかった。妻であるイナンナが死んでいたというのに。怒ったイナンナは、「私の代わりにドゥムジを冥界に連れて行きなさい」とガラ霊たちに命じた。ドゥムジは太陽神ウツに頼んで蛇の姿に変えてもらい逃げようとしたが、無駄だった。結局ドゥムジは 1 年の半分を冥界で過ごすことになり、何故か、残り半分はドゥムジの姉ゲシュティアンナが冥界暮らしをするよう、取り決められた。

＊これでは、イナンナがドゥムジを殺したに等しい。また、太陽神ウツが蛇に変身させる能力があるということは、ウツも蛇神に関係する。そして、イナンナは冥界に行ってから 3 日目で“復活”した！

いずれのヴァージョンにしろ、これらが基となって、世界中の類似した神話や伝承が創作されたのである。勿論、イナンナの姉エレシュキガルは実際に冥界にいたわけではなく、シュメールの中心から離れた場所にいたため、“冥界”として喩えられたのである。また、イナンナがネルガルの協力を得て地下に潜行したこともその原型であるが、この場合の地下＝冥界も、シュメールの中心から離れた場所、という喩えであり、本当の地下ではない。

また以下の話は、(2)－2 で述べたイエスの物語に対応していることが解る。

・イナンナの全身を病気の杖で叩きのめさせた。死に向かうということは、豊饒の死をも意味し、それに連動するように、地上でも大変な騒ぎが起きた。

・イナンナが冥界に行ってから 3 日目に、エンキが爪の垢から創ったクルガラとガラトゥラに“命の草”と“命の水”を持たせて冥界に向かわせ、それらをイナンナに振りかけて生き還らせた。

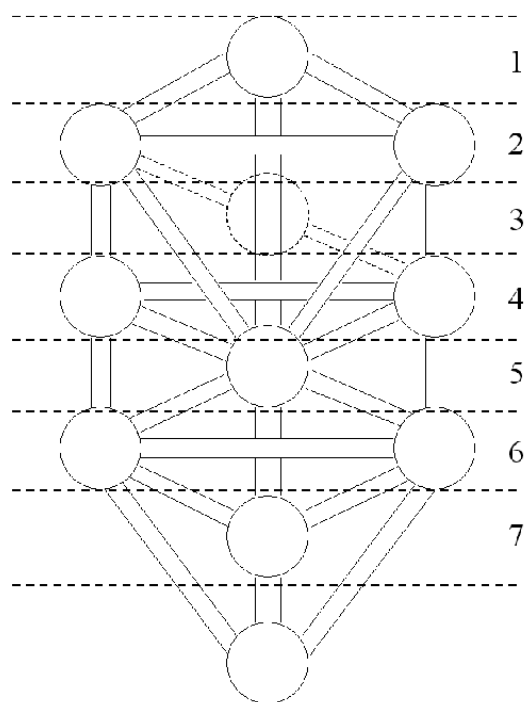
次の話は、「生命の樹」に対応している。

・イナンナは冥界の 7 つの門をくぐるが、掟に従い、身に着けていたものを 1 つずつ取られていった。第 1 の門では頭を飾る大王冠、第 2 の門では耳飾り、第 3 の門では首飾り、第 4 の門では胸飾り、第 5 の門では誕生石をあしらった腰帯、第 6 の門では腕輪と足輪、そして第 7 の門では立派な衣服を。

「生命の樹」は、図のように 7 段階に区分できる。一番下の段階は“精神の地獄”であり、至高世界、中高世界、下層世界の三界には含めないから、7 段階となる。

第 1 の門では大王冠、第 2 の門では耳飾り、第 3 の門では首飾り、第 4 の門では胸飾り、第 5 の門では腰帯、第 6 の門では腕輪と足輪、第 7 の門では立派

な衣服の順に脱いでいるから、「生命の樹」を上から降下していることになる。
(アダム・カドモンで考えると解りやすい。) 7 段階目を脱ぎ終えて冥界の女王の前に立っていることは、7 段階を経て“精神の地獄＝冥界”に達した、ということである。そして“復活”とは、「生命の樹」を上昇していくことに他ならない。



このように、イナンナ物語には、イエスと「生命の樹」に関わる奥義が散りばめられている。

2：インダス文明概略

エジプト文明と比べて馴染みが薄いため、インダス文明の概要について説明する。（本当は、インダス文明の「神々」が仏教の様々な菩薩などに変化しているため、エジプト文明よりも遥かに馴染んでいるが、馴染みすぎていて実感が無い。）

インダス文明遺跡の発見は新しく、1920 年代にモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡が発見された。両遺跡は整然とした計画に基づいて建造され、排水溝なども完備されている。しかし、それほどの大都市に相応しい強大な権力を示す宮殿や神殿は見当たらず、大きな謎である。また、＜神々の真相 1＞でも述べたように、モヘンジョダロ一帯は現地の住人が“ガラスになった町”と恐れて近づかない場所であり、テクタイトが 800 メートル四方をびっしりと覆っている。テクタイトは隕石だけではなく、火山活動によっても生成するが、モヘンジョダロ遺跡のあるインダス川流域に於いて、あるいはメソポタミア一帯に於いても、大規模な火山活動の痕跡は確認されていない。このような風景が見られる他の場所は、唯一、地表で核実験が行われた場所（砂漠）であり、インドの二大叙事詩「マハーバーラタ」と「ラーマヤナ」には、古代核戦争とも思われる極めて写実的な描写が記載されている。

ヒンドゥースタン平原を形成したインダス川に沿って南西に進むとシンド（スィンドゥ）に辿り着くが、ここから偉大なインダス文明が始まった。後にインド亜大陸に進入してきたのはアーリア人（ペルシャ系）で、インド語の s がペルシャ語では h に対応するので、“シンド”が“ヒンドゥ”となる。（ここではヒンズーとする。）更に、後にアレクサンダー大王と共に大量進입してきたギリシャ語では“インド”となる。また、スィンドゥの“スィ”は英語の th の発音に相当し、“テンドゥ＝テンジク”となり、これが漢字で天竺となった。インド人は自分たちの国をバーラト（バーラタ）と言い、これは二大叙事詩の 1 つ「マハーバーラタ」に由来している。

モヘンジョダロやハラッパーのインダス文明の担い手はドラヴィダ人だが、ルーツは不明である。しかし、＜神々の真相 1＞からシュメールであることは、疑う余地が無い。そして、ペルシャ系と同じアーリア人が侵入してきたので、ペルシャとインドの神話はほとんど同じだか、登場人物の敵と味方の関係が逆である場合が多い。これは、ペルシャ人とインド人が敵対関係にあったためである。両者が敵対関係なのは、どちらがより優れているとか、どちらが本流だとかということが原因であろう。

アーリア人が侵入して支配者として君臨してから、階級制度（ヴァルナ）が誕生した。4つのヴァルナは上位からバラモン（宗教者）、クシャトリア（王族、貴族、戦士）、ヴァイシャ（一般市民）、シュードラ（奴隷）である。15 世紀にインドに来たポルトガル人が、人種や血統を意味する“カスタ”と呼んだが、それが英語化してカーストとなった。更に、これ以外にもアウト・カーストが存在し、不可触民とされている。

アーリア人が口頭伝承してきた宗教思想がインド哲学の根源であり、後に文

書化されてヴェーダとなった。根本聖典（サンヒター）はリグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダであり、主に祭祀のしきたりや呪文、「神々」への讃歌などが記されている。最も重要で最も古いのがリグ・ヴェーダである。ヒンズー教の礎であるバラモン教はヴェーダを基礎とし、祭儀書ブラーフマナ、森林書アーラニヤカ、奥義書ウパニシャッドから成る。その特徴は、人間と宇宙の対応にある。“永遠に存在する個人の本体＝我＝アートマン”と“宇宙の根本原理＝梵＝ブラフマン”は究極的に一体であり、一体化させるのが人間の生きる目的であり、それを“梵我一如”と言い、“悟りの境地”である。そこにインダス文明と土着信仰が合流し、祭祀中心のバラモン教となった。バラモン教は更に土着神を取り込んでヒンズー化し、叙事詩の成立を経て、ヴィシュヌ派とシヴァ派へと二大宗派化していった。

梵我一如の概念は、ヘルメス思想と同じである。ヘルメス思想では、創造主と被造物は本質的に同一であり、同じ一者の異なる現れにすぎず、「全は一であり、一は全である」と考える。そして、下のものと上のもの、小宇宙と大宇宙が本質的に同一であり、互いに照応し合っていると考える。

輪廻転生を説くのはバラモン教であり、人間は必ず人間に生まれ変わるとされている。どの階級に生まれ変わるかは、前世での行いに因る。だから、低カースト者は前世の行いが悪かったのであり、そのため、彼らがどんな悲惨な目に遭っているように助けないし、助けられようとも思わない。そして、輪廻転生の循環から抜け出す方法が梵我一如であると考えた。しかし、助けないのは良くない行いだから、来世は低カーストに生まれ変わるはずである、という矛盾に彼らは気付いていない。

釈迦は、ペルシャからインドにかけての広大な地域に住んでいたトルコ（セム）系遊牧民の流れを汲む北インドのサカ族の王子で、本名はガウタマ・シッダールタである。釈迦は形骸化したバラモン教を批判した。そして、バラモンが認めていたヴァルナも輪廻転生も否定した。人間が行いによって動物界などに転生するというのは後世の喩え話で、釈迦は言っていない。実は、輪廻転生の概念は根本聖典には無く、後のウパニシャッドで初めて登場する概念で、元々は無かったのである。それもほとんどが喩え話で、真実ではない。よって、如何に現在の仏教の教えが誤っているのかが解るだろう。

3：ヒンズー教の「神々」とインダス文明に於けるカッパーラ概要

(1) ヒンズー教の特徴

ヒンズー教の「神々」の最大の特徴は、多種多様な化身（アヴァターラ）が存在すること、多くの顔や腕を持つ非現実的な姿であること、そして、男性器の象徴であるリンガと女性器の象徴であるヨニを崇拝することである。

カッパーラ的に解釈すると、化身はすべて同一であることを暗示する。これは、神道に於ける分魂＝多次元同時存在の法則と同じである。多くの顔や腕はメルカバーや「生命の樹」に於けるセフィロトなどを象徴する。そして、リンガはヨニに坐しているが、これは陰陽の合一を表すと同時に、ヨニはジググラ

トで神が降臨する場所、リングは降臨する神の柱を象徴している。

では、主要な「神々」の特徴及びインダスに於ける「神々」の意味を検討する。

(2) 創造神

主たる創造神はブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三柱である。

A：ブラフマー

仏教の梵天。ウパニシャッドの最高真理である梵我一如の梵、つまり非人格的な宇宙の根本原理ブラフマンが擬人化された創造神。ヴィシュヌやシヴァはブラフマーの命令によって魔人退治に出掛けたりする。後にこの二神がブラフマーに取って代わることとなった。これは、シュメールやエジプトで大神アヌが均衡の柱に相当するが、ほとんど登場しないことと同じである。つまり、ブラフマーが大元の創造神で、均衡の柱に相当する。



ヒンズー教徒は、ヴィシュヌ派とシヴァ派のどちらかに必ず組み込まれている。ヴィシュヌ派では、ブラフマーはヴィシュヌの臍に生えた蓮華から生じたとして、ヴィシュヌの優位性を説く。(次のヴィシュヌの項の図を参照。)シヴァ派では、真の創造神をめぐる論争から5つあるブラフマーの首をシヴァが1つ切り落としたとか、ヴィシュヌとブラフマーが創造神をめぐる論争をしていたところにシヴァの巨大なリングが現れ、圧倒されて礼拝したとして、シヴァの優位性を説く。4つの首(頭)は、メルカバーを象徴している。

しかし現在では、これら三神は本来一体であり、同一の神が宇宙の最高原理を創造する時にはブラフマー、維持する時にはヴィシュヌ、破壊する時にはシヴァとして現れる三神一体＝トリムルティが一般的である。これは、三柱の「神々」で神界を形成する基本法則と同じである。トリムルティを表す図では、向かって左からブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの順に描かれ、本来、均衡の柱として中心に描かれるべきブラフマーは、向かって左に追いやられている。

B：ヴィシュヌ



仏教の那羅延天(ならえんてん)、毘紐天(びちゅうてん)。ヴェーダ文献では重要視されておらず(ヴェーダではブラフマーが最高神である)、リグ・ヴェーダでヴィシュヌに捧げられた讃歌は5篇にすぎない。そこでは、数ある太陽神の中の1つに過ぎず、天界・空界・地界を3歩で踏み越え、人間の安全と住居を約束する神である。ヴィシュヌの勢力が大きくなるのはヴェーダに続くブラーフマナ文献の時代で、この時代はバラモンが宗教的権力を握り、政祭一致の時代であり、ヴェーダの

主要な「神々」は勢力を失っていった。そして、叙事詩とプラーナ文献の時代になると、ナーラーヤナやクリシュナといった民間信仰の「神々」と同一視されて広く浸透し、ついには最高神の地位を確立するに至った。ヴィシュヌ派は、バクティ（「神々」への絶対的な帰依）中心の熱狂的信仰が特徴である。

破壊を司るシヴァが恐怖と温和の二面性を有するのに対して、ヴィシュヌは温厚で慈悲深く、熱心な信者に対して必ず恩恵を与える。この性格は、世界が危機に瀕した時、人間や動物に姿を変えて出現し、窮状を救うという化身あるいは権化による“救世主的性質”によく表れている。シヴァやインドラにも化身は見られるが、ヴィシュヌが根源である。つまり、ヴィシュヌはイエスの予型であり、化身の考えは神道に於ける多次元同時存在の法則と同じである。むしろ、多次元同時存在の法則の基が、ヒンズーに於けるヴィシュヌの化身なのであろう。つまり、化身とは、姿形が変わろうと本質的には同一である、というカッパーラである。その各化身については後述するが、ヴィシュヌ本来の身体的特徴としては、青黒い肌と4本の腕、蓮華のような目を持つ。蓮華はく神々の真相2>で述べたように、皇室の十六弁八重表菊紋に結びつくロゼッタ紋様が原型で、イナンナに關係が深く、“復活と再生”の象徴である。また、黄色い衣服を纏い、アナンタ龍王（7つのコブラの頭を持つ龍の化身、ナーガ）に腰掛けたり、その上で眠ったり、体に巻きつけたりしている。黄色は中国で皇帝の色であり、それは黄龍に由来する。その黄龍の原型がこれである。龍に關係するアナンタ龍王の7つのコブラの頭はメノラー＝「生命の樹」である。しかし、コブラは毒蛇であるから「死の樹」でもあり、「生命の樹」と「死の樹」を同時に象徴している。これは、インダス・カッパーラの解釈を間違えると、即座に「死の樹＝左道」に堕ちることを意味する。

更に、ヴィシュヌはガルダ（金翅鳥、こんじちょう）に乗って天空を駆け巡るが、“金翅＝こんじ＝きんし”だから、天照大神＝イエスが金鷄（きんし）に導かれて降臨したことと一致することからも、ヴィシュヌはイエスの予型であり、慈悲の柱に相当する。

ヴィシュヌは4本の手に円盤、法螺貝、棍棒、蓮華を持っている。人差し指の先で回転する円盤（チャクラ）は、万物を断ち切る恐るべき兵器であり、一切の無知を破る宇宙神の偉大な力の象徴である。ならば、これは「生命の樹」に於ける栄光のティファレトあるいは隠されたダウトである。

棍棒は力と権力の象徴であるが、木なので「生命の樹」も象徴している。蓮華は水と再生と創造の象徴であり、「生命の樹」を上昇していく象徴である。水はエンキにも関わる。そして、棍棒＝「生命の樹」は柱だから男性原理、蓮華は花だから女性原理である。つまり、蓮華に坐す釈迦のように、蓮華と棍棒で陰陽を表すと同時に、「生命の樹」を表すのである。

法螺貝はヴィシュヌの化身クリシュナに退治された海の悪魔パンチャジャナであり、ヴィシュヌがこれを吹き鳴らすと、悪魔が震え上がるという。この法螺貝は左巻きである。巻き貝の巻く方向は、理由は良く解っていないが、9割以上が右巻きである。つまり、この法螺貝は通常の巻き方とは逆になっており、

これがインダス・カッパーラを解く鍵となっている。(巻き方の見分け方は、巻き貝の尖った方を上に向け、殻の入り口が見えるように持ったとき、殻の口が向かって右側に見えるのが右巻き、左側に見えるのが左巻きである。仏教では、釈迦の説法を“大法螺を吹く”と言ったが、今では“いい加減なことを言う”意味に変化してしまった。)

先ほどの三神一体の図ではヴィシュヌが中心になっているが、元々はブラフマーが均衡の柱なので、ブラフマーが中心となるはずである。そうすると、ヴィシュヌは温厚で慈悲深いから、ブラフマーの右手、すなわち向かって左となる。「生命の樹」に於いては、向かって右が重要であるが、ここでは慈悲に関係するヴィシュヌが向かって左である。そして、「神々」は正面を向いており、ヴィシュヌの持つ法螺貝は通常とは逆向きである。つまり、インダスに於ける「生命の樹＝アダム・カドモン」はシュメール、エジプト、日本とは逆であり、最初から正面を向いている。だから、中心から見て右＝向かって左に重要な神が位置することになる。法螺貝の巻き方と「神々」の並びは、それを暗示しているのである。では、何故、インダスは逆なのか。それは、インダスに直接関わる創造神が、イナンナで女神だからである。シュメールの大神はアヌ、エジプトはエンキ、日本は天照大神＝イエスでいずれも男神であるから、インダスは「生命の樹＝アダム・カドモン」を逆向きにすることにより、直接関わる創造神が女神であることを暗示しているのである。なお、ヴィシュヌが中心の神であることは、シヴァの項でも述べる。

ヴィシュヌの化身には、ラーマ、クリシュナ、マツヤ（魚）、クールマ（亀）、ヴァラーハ（猪）、ヌリシンハ（人獅子）、ヴァーマナ（矮人）、斧を持つラーマ、ブッダ、カルキがある。

①ラーマ

後述する叙事詩「ラーマーヤナ」の主人公。コーサラ国の王子。

②クリシュナ

インド人に最も親しまれ、愛されている神がクリシュナである。クリシュナが自分の子ではなく神の子だと知った父ヴァースデーヴァは戸惑った。マトゥラーのカンサ王は、ヴァースデーヴァとその妻デーヴァキーの産む 8 番目の子によって殺されるだろう、という天の声を聞き、恐怖に慄く。そこで、この夫婦を牢に閉じ込め、誕生した子供を次々に殺していったが、7 番目の子供バララーマは女神の加護によって難を逃れた。そして、8 番目の子供は卑しい牢獄の中で誕生した。これが、クリシュナである。

父ヴァースデーヴァはクリシュナが殺されないようにヤムナー川を渡り、牛飼いのナンダの妻ヤショーダーが産んだ女兒とクリシュナを取り替え、バララーマと共にナンダの下で牛飼いとして育てられた。

幼少のクリシュナはいろいろ悪戯して義母を心配させたが、ヤムナー川に住む悪龍カーリヤを退治するためにカーリヤの頭上に立ち上がり、踊って追い出すなど、数々の武勇伝を残している。

青年となったクリシュナは、牛飼いたちを説得してインドラの崇拝をやめさせた。それにインドラは激怒し、猛烈な暴風雨を降らせるが、クリシュナはゴーヴァルダナ山を持ち上げて傘代わりにし、牛飼いたちを守った。インドラは驚き、天から降りてきて己の高慢さを悔いた。

また、クリシュナは牛飼いの女（牧女）たちと奔放な恋愛を謳歌した。魅惑的なクリシュナは、牧女たちの憧れの的であり、彼が笛を吹くと、その音色に誘われて女たちが次々と集まり、クリシュナを愛し、戯れ、一緒に踊った。また、神に祈った後に全裸で水浴びする牧女たちから衣服を奪い取り、カダムバの木に1人ずつ礼拝することを命じている。

なお、カンサ王は預言通り、クリシュナによって踏み殺され、マトゥラーに平和が訪れた。

クリシュナは BC7 世紀頃に活躍した実在の人物で、ヤーダヴァ族の精神的指導者として、バクティ思想の萌芽を含む新しい教えを説き、その神をバガヴァットと称した。クリシュナは死後、そのバガヴァットと同一視され、神格化されるに至った。そして、このような逸話はほとんどイエスの予型といって良い。イエスの逸話と対比させると、次のようになる。

a：クリシュナが自分の子ではなく神の子だと知った父ヴァースデーヴァは戸惑った。

ヨセフはマリアの懐妊を知り、婚約を解消しようとするが、天使のお告げによって神の子であると知り、思いとどまった。

b：救世主クリシュナが誕生することを知ったカンサ王は恐怖に慄き、近隣の町や村の嬰兒を虐殺するよう命じた。

イエスが誕生する時、ヘロデ王は恐怖に慄き、ベツレヘムと周辺一帯の嬰兒を虐殺した。

c：クリシュナは8番目に生まれた。

イエスが誕生する前、八角形で象徴されるベツレヘムの星が輝いた。

d：クリシュナは卑しい牢獄で誕生した。

イエスは貧しい馬小屋で誕生した。

e：赤子のクリシュナは、カンサ王の虐殺から逃れるために、ヤムナー川を渡っている。

赤子のイエスは、ヘロデ王の虐殺から逃れるために、ナイル川を渡ってエジプトに行っている。

f：クリシュナは幼い時から強い霊性を発揮して人々を驚嘆させているが、悪戯もして、母親を心配させている。

イエスは幼少時代、神殿で学者たちを相手に時を忘れて議論したので、帰り

を心配した母マリアは遅くなるまで探し回っている。

g：クリシュナはヤムナー川に住む悪龍カーリヤを退治するため、頭の上に立ち上がり、踊って追い出している。

創世記には、龍とはサタンのことで、蛇の頭は足で碎かれる、とある。イエスは、サタンからの誘惑をすべて拒絶している。

h：クリシュナは成長すると、“牛飼いきりシュナ”と呼ばれるようになる。

イエスは成長すると、“良き羊飼いきり”と呼ばれるようになる。

i：クリシュナは、暴風雨に困っている牛飼いたちのために、神通力で山を持ち上げ、その下に避難させている。

使徒たちが小船に乗っていると嵐になるが、イエスは一言で嵐を鎮め、信仰が強い者は山をも動かせる、と言っている。

j：神に祈った後に全裸で水浴びする牧女たちから衣服を奪い取り、カダムバの木に1人ずつ礼拝することを命じている。

時として、イエスを唯一の花婿として全人類を花嫁としている。その典型が10人乙女の例え話であり、天国＝「生命の樹」にあずかる花嫁の選ばれ方が示してある。

また、クリシュナはヴィシュヌ以上に16000の分身を創った神とされている。つまり、古代インドの「神々」の正体はすべてクリシュナであり、そのクリシュナはヴィシュヌの具現化した姿である。

③マツヤ（魚）

ブラフマーの息子で賢者のマヌが川で水の供養をしていると、手の平に1匹の魚が入ってきた。その魚が命乞いするので、壺に入れておいたが、成長して巨大魚となり、海に逃がすことにした。その魚はヴィシュヌの化身であり、「7日後に大洪水が襲って世界は水没するが、あなたには巨船を与えるので、あらゆる生き物のつがいと7人の聖仙を乗せなさい」と告げて、姿を消した。そして、預言通り大洪水が襲ったが、マヌは指示された通りにしたので、人類、動植物は壊滅から免れた。

ノアの洪水と同じである。ノアは家族8人だったが、ここでは7人の聖仙とマヌで8人である。洪水をノアに告げたのはエンキであり、エンキの象徴は魚でもあり、半人半魚のオアンネスでもある。また、マツヤは秦氏の総本山、松尾大社の“マツオ”に通じる。

④クールマ（亀）

遠い昔、戦いの神インドラはドゥルヴァーラ仙から呪いを受け、「神々」は勢力を失った。そこで、ヴィシュヌに助けを求めると、マンダラ山を攪拌棒とし、

ヴァースキ龍を綱にして乳海をかき混ぜるよう命じた。ヴィシュヌ自身も巨大な亀に姿を変え、回転の軸受けとなった。

古代インドの宇宙観では、巨大な蛇が取り囲む巨大な亀の背中に 3 頭の象が乗っており、大地を支えている。大地の中心には、須弥山（しゅみせん）がそびえている。つまり、蛇も亀もエンキである。3 頭の象は「生命の樹」の 3 本の柱であり、須弥山（しゅみせん）は聖地カイラス山のことであり、ヴェーダが記載されているサンスクリット語では“メール”と発音するので、シュメールを暗示している。

また、亀は“亀慈（くちや）”に通じ、＜日本の真相＞に於いて“亀慈（くちや）＝弓月城（くるじゃ）＝弓月（ゆんず）王国”であった。ここは、中国ですら、神が住む国として崇めていた場所である。そして、西王母伝説に見られるような不可侵地域で、名が示す通りの天の山、天山山脈の麓の“弓月王国＝新月王国＝三日月王国”であり、“弓月城（くるじゃ）”とも言われた。

エンキは人類に慈悲を与えたので、“亀の慈悲＝亀慈”としたのであろう。あるいは、蛇の上に乗っている亀は、エンキの知恵を土台としていることの象徴なのかもしれない。また、洪水後に最初に造られた、人間の最初の国王が治めた都市の名がキシュであったことから、読みはそれに因むのであろう。

この国は、夜も明かりが消えないハイテク国であった。当時、夜に光があることは滅多に無かったことから、神の国と見なされたのである。それ故に“天山”である。この光は製鉄の火であり、司令塔や見張り塔のサーチライトでもある。また、亀慈はヘブライ語で“ヤマトゥ”と呼ばれており、“神の民”の意味であり、イスラエル十二支族の象徴でもある。そして、“やまと”の語源でもある。ここに原始キリスト教徒がやって来た。彼らが禁断の地に入れたのは、物的証拠＝本物の十字架を持ってきていたからに他ならない。そして彼らは秦氏となり、日本に到達した。

なお、西王母は＜神々の真相 2＞で見たように、すべての女仙たちを統率する鬼神で、原型はイナンナである。

⑤ ヴァラーハ（猪）

大地は水中に沈んだままであった。マヌは大地を水面より上に持ち上げてくれるよう、ブラフマーに頼んだ。頼まれたブラフマーも良い知恵が浮かばなかったので、ヴィシュヌに祈った。すると、ヴィシュヌの鼻の穴から親指大の猪が飛び出し、瞬く間に巨大な姿となった。それを見て「神々」が驚いていると、ヴァラーハは大声で吼え、水中に飛び込み、その牙で大地を水の上に持ち上げた。

大洪水後の話である。＜神々の真相 1＞では、エンキと洪水後の関係を示した。

“エンキは自分たちの領地だったアフリカ大陸に目を向けた。ニナガルと共に、強力な水の合流地点で、山にダムを建設した。そして、激しい滝から湖に水路を引き、湖に水が溜まるようにした。それから、アブズと“上の方の海（地中

海)”の間の土地を、マルドゥクと共に調査した。流れの中ほどの、川の水が滝となって落ちる場所に、水中から島を引き上げ、その奥底に対を成す洞窟を掘り出し、石で水門を作った。それから、岩に2本の水路を切り出し、2本の峡谷を形成した。こうして、高地から流れてくる水量を、調整できるようにした。その“洞窟の島”アブの島から、その川の曲がりくねった谷を、水中から引き上げた。エンキはドゥムジと牧夫のために、“2つの峡谷の土地（ナイル川に沿った地域）”に居住地を造った。”

⑥ヌリシンハ（ナラシンハ、人獅子）

兄弟を殺したヴィシュヌに対する復讐に燃える魔神ヒラニヤカシプは、ブラフマーの恩寵により、人間にも獣にも「神々」にも魔物にも殺されない体となった。しかし、ヒラニヤカシプは熱心なヴィシュヌ信者であった息子のプラフラーダを殺そうとしたが、プラフラーダはヒラニヤカシプにヴィシュヌの偉大さを説き、広間の柱の中にもヴィシュヌが存在していることを説いた。ヒラニヤカシプは怒って柱を蹴ると、突然、頭が獅子、体が人である人獅子の姿のヴィシュヌが現れ、ヒラニヤカシプを爪で八つ裂きにした。ヴィシュヌは人間にも獣にも「神々」にも魔物にも殺されないヒラニヤカシプを退治するため、この人獅子の姿をとったのである。

ヌリシンハは太陽円盤のチャクラを持っているが、その中には六芒星が描かれているものがある。つまり、太陽神を示しているのと同時に、ダビデの家系を暗示している。そして、メルカバーを構成する獅子と人がある。

柱は「生命の樹」の象徴であり、獅子はユダ族の象徴であるから、後に「生命の樹」の奥義を授けるイエスがユダ族から誕生することの予型になっている。

⑦ヴァーマナ（矮人）

プラフラーダの孫である魔神バリは、苦行で得た力で「神々」を負かし、戦いの神インドラを都から追放した。悲しんだ「神々」の母アディティに、自分の息子として生まれ変わってきて欲しいと頼まれたヴィシュヌは、神々しい矮人として生まれた。彼がバリの宮殿に出掛けると、バリはその魅惑的な姿を見て歓待し、望むものは何でも与えると約束した。矮人は3歩で歩けるだけの土地を求め、バリはそれを認めた。すると、矮人は突如、三界を覆うほど巨大化し、三界を2歩で歩き、3歩目でバリの頭を踏んで地界に押し込んだ。

「生命の樹」の三界であり、それはヴァーマナの手中にある。

⑧斧を持つラーマ

ラーマヤナのラーマ王子とは別人。クシャトリヤ族が世界を制圧したので、ヴィシュヌは「神々」、バラモン、人類を守るため、ブリグ族のジャマド・アグニの末っ子ラーマとして誕生した。ある日、アルジュナ王が狩に出て、ジャマド・アグニの接待を受けたが、その時、王はアグニの持つ、何でも望みのものを出す如意牛を望んだ。しかし、断られたので、王の息子たちはアグニを殺し

てしまった。ラーマは森から帰ると、父が殺されているのを発見し、斧でクシャトリヤを全滅させることを決意した。ラーマは王の息子たちを殺し、更に 21 回にわたってクシャトリヤ族を世界から一掃した。

クシャトリヤ階級に対するバラモン階級の優位性を示すための創作話。

⑨ブッダ

カリ・ユガという最悪の時代の初期に、ヴィシュヌは「神々」の敵である魔神を迷わせて「神々」を救済するため、シュッドーダナの息子として誕生した。彼は成長してブッダとなり、ヴェーダの教義に反する教えを説いた。それは、伝統的な知恵を軽蔑し、カーストを無視し、祭祀の持つ価値を倫理思想と取り替えて、魔神たちに個人重視の思想を植えつけるものであった。ブッダの教えに従う者たちは、ヴェーダの教義を捨てて異端となり、最下層の人々からも布施を受け、地獄に落ちるに相応しい行為を行った。こうして、魔神たちはブッダと化したヴィシュヌによって退治された。

ヒンズー教では、ブッダは誤った道を説く指導者なのである。しかし、ブッダがヴィシュヌの化身であることから、ブッダはイエスと同様に、「生命の樹」の奥義を悟ったということである。

⑩カルキ

カリ・ユガの終わりには、人々は思慮が無くなり、徳は無くなり、悪徳と蛮行がはびこり、野蛮な人々が世の中を治めて不正を行い、民衆を苦しめる。(現代社会そのものだ。) その時、ヴィシュヌはダルマ(正法、しょうほう)を救うため、カルキの姿で降臨する。彼はシャンバラのヴィシュヌヤシャスというバラモンの家に生まれ、「神々」から授かった駿馬に乗り、剣を持って悪を退治し、ダルマを再興した後、天界へ帰る。この時、人々の心は清らかとなり、真の正義と平和の時代が到来する。

バラモンの正当性を主張してはいるが、イエスの再臨とまったく同じである。ヨハネ黙示録では、イエスは白馬に乗り、口からは鋭い剣が出ている。

このように、化身は全部で 10 あるが、これは「生命の樹」のセフィロトの数である。そして、ヴィシュヌ自身も合わせれば 11 となり、ヴィシュヌは隠されたセフィラ“ダアト”である。他に化身ではないが、極めて重要な役割を果たすのがガルダとハヌマーンである。

⑪ガルダ

ヴィシュヌが乗って天空を駆け巡る鳥。日本では金翅鳥、迦楼羅(かるら)の名で知られており、仏教を守護する天龍八部衆の 1 つ。頭と嘴、翼、爪、足は鷲、他は人間の姿である。

ガルダの一族は蛇族の配下にあったが、ガルダはその境遇に耐えられなくなり、蛇たちに、どうすれば解放されるのか尋ねた。すると、天界にある不死の

甘露（アムリタ）を取ってくれば願いを叶えよう、と蛇たちが言ったので、天界へ向かった。途中、戦いの神インドラなどに行く手を阻まれたが、インドラをも打ち負かし、甘露を手に入れた。ところが、帰路、ヴィシュヌが立ちちはだかった。両者の間で激しい戦いが繰り広げられたが、決着がつかなかった。そこで、ヴィシュヌが「不死を与え、自分よりも高い地位を約束しよう。その代わりに、私を運ぶ乗り物になって欲しい」と提案し、ガルダはこれを受けた。

なお、ガルダに一蹴されたインドラは、その強さに感服して友好を結び、不死の甘露を渡してくれれば、どんな望みでも叶えようと申し出た。そこで、ガルダは宿敵の蛇族を食用にしたいと望み、その願いが叶えられた。以後、ガルダは蛇の天敵となり、蛇からの守護者として崇拜されるようになった。

蛇を食用とするということは、象徴的に蛇と重ねられる。“悪い蛇＝サタン”を飲み込む“善の蛇”である。前述の、天照大神＝イエスが金鵄に導かれて降臨したことと、天照大神＝蛇神であることから、天照大神＝イエスにも重ねられる。

天界にある不死の甘露（アムリタ）とは、「生命の樹」の至高世界に達することである。そして、地上と天界を往き来するのは鳥であり、ガルダも鳥である。

また、ヴィシュヌが乗って天空を駆け巡るから、ヴィシュヌとガルダは一体と見なせる。そして、このガルダの鳥、ラーマ王子、クリシュナ、矮人などの人、ヌリシンハの獅子、更にシヴァの象徴の 1 つである牛を加えれば、メルカバとなる。

②ハヌマーン

猿の神で、金色の肌とルビーのような赤い目を持ち、尾は途方もなく長い。神通力を備え、体の大きさを自由に変えたり、空を飛んだりすることができる。ラーマヤナでは、ヴィシュヌの化身ラーマ王子を助けて活躍する猿の戦士である。ハヌマーンが孫悟空のモデルである。

C：シヴァ



仏教の自在天、大黒天。“シヴァ”という言葉は“吉祥”を意味し、ヴェーダの中では暴風雨神ルドラの尊称として用いられていることから、ルドラがシヴァの前身だと言われている。ルドラに捧げられた讃歌は 3 篇にすぎず、ヴィシュヌ同様、重要な神とは見なされていなかった。

ルドラがシヴァという神名を得るのは、ブラーフマナ文献に於いてであるが、土着神などを取り入れながら、より身近な存在へと台頭してきた。そして、ウパニシャッド文献では、暴風雨の神として万物を破壊し、生類を死に至らしめる一方で、人々に医療を施し、長寿と繁栄を約束するルドラの性質が、世界の創造・維持・破壊を司る最高神シヴァにまでのし上がったのである。

シヴァにはヴィシュヌのような化身はほとんど無いが、性格を描写する多くの異名を持っている。その暗黒面としては、恐るべき者ということでバイラヴ

ァ（畏怖者）、運命と死を支配することからカーラ（時間）、世界の破壊を司るハラ（破壊者）と呼ばれ、他にもブーテーシャ（悪鬼たちの主）、ムンダマーラー（髑髏を首に掛ける者）などといった呼び方もある。光の側面としては、恩恵を授けるのでシャンカラ（吉祥者）、支配者なのでマヘーシュヴァラ（大自在天）、全知全能であることからマハーデーヴァ（大天）、牧童に従う家畜のように人々がシヴァに従うからパシュパティ（家畜の主）などと呼ばれる。この光の側面は、まさにイエスの性質そのものである。光の側面と同時に暗黒の側面も併せ持つということは、イエスとルシファーの関係でもある。そして、後で述べる戦いと殺戮の女神ドゥルガーやカーリーはシヴァの側面でもあるから、シヴァは暗黒の側面を有する女神イナンナの反映とも言える。

また、ブラフマーが均衡の柱、ヴィシュヌが慈悲の柱で、シヴァは破壊などの厳しさを併せ持つから峻厳の柱となる。

シヴァの一般的な姿は一面四臂で、全身に灰を塗り、首には蛇を巻きつけている。腰には虎の皮を巻き、頭髮は荒々しく束ねて高く巻き上げ、その髪の中には聖なるガンジス川の女神ガンガーがいて、そこからガンジス川が流れ出している。四臂はメルカバーであり、全身の灰は破壊という“罪”を行うが故の、主に祈る姿勢である。蛇を巻きつけている体は「生命の樹」であるが、コブラ故、「死の樹」でもある。聖なるガンジス川（*）は沐浴を行う聖なる場所であり、沐浴は洗礼の一種であるから、シヴァ自身が洗礼を受けていることの象徴でもある。

2本の手には三叉戟（さんさげき）と斧を持ち、残りの手は恩恵を与える印（いん）と恐怖を取り除く印を結んでいる。シヴァのシンボルは三叉戟であるが、これは「生命の樹」を表すことは言うまでもない。

額の真ん中にある“第3の目”は、瞑想ばかりしているシヴァに退屈した妻のパールヴァティーがふざけて後ろから両手で目隠ししたところ、世界は闇に覆われ、生類が恐れおののいたため、それを救おうとしてシヴァの額の中央が裂けて生じた新しい目である。世界が闇に覆われ、額が裂けて光が復活したことは、イエスの“死と復活”の象徴である。

なお、密教に於いては、シヴァは仏法に従わない悪神として、烏摩妃（うまひ）と共に降三世（ごうざんぜ）明王に踏みつけられている。

*聖なるガンガー

ガンジス川は聖なるガンガーとも呼ばれ、ヒンズー教徒は誕生後にガンジスの水で洗礼され、死に面して灰（遺体）はガンジスに流される。ヒンズー教徒の一生は、聖なるガンガーと共にある、と言っても過言ではない。これほどガンジス川が聖視される理由は、次の神話に因る。

“アヨーディヤーのサガラ王の第2妃には、6万人の息子が居た。ある馬祀祭の時、途中で馬が居なくなり、地界のカピラ仙の住居で馬を発見した。彼らはカピラが馬を盗んだものと思い、カピラに襲い掛かったが、一瞬にして全員、灰にされてしまった。

息子たちが帰って来ないので、サガラ王は孫のアンシュマットに捜索に行かせた。アンシュマットはカピラに会い、天上のガンジス川の水で灰が清められるならば、彼らは天国に行けるということを聞いた。時は流れ、アンシュマットの孫バギーラタが王位に就き、ガンジス川を地上に降下させるため、苦行を行った。ガンジスの女神ガンガーはこれに満足し、地上に落下することを決めた。しかし、受け手がいないと大地を打ち抜くであろう、とバギーラタに告げた。その適任者はシヴァしかいない、とバギーラタは考え、シヴァに祈願して苦行を重ねた。シヴァは満足し、その願いを聞き入れた。

こうしてガンジスの女神ガンガーが落下することとなったが、シヴァは自分を支えきれないだろう、と彼女は思い、巨大な流れとなってシヴァの頭の上に落下した。それを知ったシヴァは、女神の高慢さに腹を立て、頭髪の中に閉じ込めてしまった。女神はシヴァの頭髪の中をさ迷い、ガンジス川は地上に落下してこなかった。しかし、バギーラタが懇願したので、シヴァはガンガーを地上に放った。こうして、サガラ王の息子たちの灰はガンジス川の水で清められ、天国へ行くことができた。”

ガンジス川には、あらゆるものを清める力があるのである。この話もそうだが、願いを実現するために苦行して神に祈る原型は、インダスの神話にあると言える。そして、シヴァの頭から流れ出ているから、シヴァを洗礼している象徴でもある。

なお、シヴァの息子にガネーシャという象の顔をした太った神がいる。ガネーシャが、象の頭を持つようになったエピソードを紹介する。



“パールヴァティーは、シヴァの留守中の召使いを創りだそうと考え、体の垢を集めて人形を造り、それに命を吹き込んだ。彼女は早速、用事を言いつけた。それは、彼女の入浴中、家に誰も入れないように見張りをする事だった。その後、シヴァが帰って来た。互いに相手をまったく知らない両者は押し問答となり、ついに激しい戦いになってしまった。シヴァはヴィシュヌの援護を得て、何とか首を刎ねることができた。

それを見て、パールヴァティーは嘆き悲しんだ。事情を知ったシヴァは哀れんで、生き返らせることとした。シヴァは部下を北に向かわせ、最初に出会った生き物の頭を持ってくるように命じた。部下たちが象の頭を持ってきたので、それを取り付けて生き返らせ、以後、シヴァの家族の長男として、眷属の地位を与えた。”

垢で造った人形がこれほど強いとは。垢で造った人形は“ひとがた”であり、分身であり、そこに命を吹き込んだからアダム・カドモンである。その原型の話は、イナンナを冥界から救うために、エンキが爪の垢からクルガラとガラトゥラを創ったことである。

ガネーシャは障害を除去し、成功と幸運をもたらす現世利益の神として、また富と繁栄の神として人気が高い。更に、マハーバーラタを口述筆記したとい

う逸話から、知恵と学問の神としても人気がある。原型が、エンキが創造したクルガラとガラトゥラならば、「知恵の神」ということも納得できる。仏教では歓喜天であり、象頭の男女神が抱き合う双身像は、夫婦和合や子宝の秘仏として知られている。



また、シヴァといえばリング（男性器）崇拝である。リングは普通石で造られ、頭の丸い円筒形をしている。多くの場合、女性器を象ったヨニという台座に直立しており、陰陽の合一を表す。＜神々の真相 2＞でも述べたが、カルナックにあるアモン神殿には、パピルス柱とロータス（蓮）柱が建っており、パピルスは下エジプト、蓮は上エジプトを象徴すると同時に、蓮は花で女性原理、下エジプトのピラミッドはそそり立つ山で男性原理を象徴するから、女性原理と男性原理の統合＝陰陽の合一を表す。これを更に象徴化すると、ヨニに座すリング、蓮華に座す釈迦となる。また、リングはシヴァ、ヨニは妃パールヴァティーで陰陽の合一である。このような性器崇拝の起源はインダス文明にまで遡るが、これがヴェーダ由来のシヴァ信仰と結びつき、大いに発展した。更に、リングは柱である神を、ヨニは器である神殿を表し、神殿に神が降臨することも暗示する。シュメールの「神々」はジググラトに降臨し、リングはそそり立つジググラトであるから、リングの根源はシュメールのジググラトに降臨する「神々」の象徴である。そして、蓮の花は皇室の十六弁八重表菊紋に結びつくロゼッタ紋様が原型で、イナンナに関係が深く、“復活と再生”の象徴である。

ヴィシュヌ派がバクティ中心の熱狂的信仰が特徴であるのに対して、シヴァ派はタントリズムとヨーガが特徴である。タントラでは、すべてのものは特定の周波数を有する振動音と見なす。それを視覚的に表したものがヤントラ＝曼陀羅であり、宇宙あるいは神を象徴する。曼陀羅は三神三界を表した「生命の樹」の象徴である。そして、聴覚的なものがマントラ＝真言である。ヤントラ、マントラは永遠なるもの＝宇宙創造の意識と一体となる秘術である。しかし、本来タントラの説く梵我一如は難解であるため、タントラではシヴァ神（男性原理）と神妃シャクティ（パールヴァティー、女性原理）の性的合一による宇宙創成が説かれた。そのため、解脱への実践として、女神及び女性器崇拝、性行為、飲酒、肉食などが織り込まれた。これは、正統バラモン教からは断じて認められるものではなかったが、タントラのこのような呪術性に、一般大衆は惹きつけられたのである。リングとシヴァの関係について、神話では次のように説明されている。

“カルパ（劫）が終滅する時、ヴィシュヌは水底で眠っていた。すると光明が出現し、その中からブラフマーが現れた。ブラフマーはヴィシュヌを見つけて、どちらが真の創造者かということで口論となった。その時、火炎を発する途方もなく巨大なリングが姿を現した。驚いた 2 人は口論を止め、このリングの果てを見届けてきた方がより偉大だと認めよう、と合意し、ブラフマーは白鳥に、ヴィシュヌは猪に姿を変えて果てを確認しに行った。しかし、両者とも果てを確認することはできず、自分たちよりも偉大な存在に気付く、そのリングに向

かつて讃歌を唱えた。その時、リングの中から千手千足、三眼を有し、弓と三叉戟を手に持ち、象の皮を纏い、蛇でできた聖紐を身に着けたシヴァが現れ、雷鳴のような声で告げ、姿を消した。「かつて我々三神は一体であったが、今はこのように分かれている。未来に於いてブラフマーはヴィシュヌとなり、私はカルパ発生時にヴィシュヌの怒った額から生まれるであろう」これ以来、リングはシヴァの象徴となった。”

もともと完全に一体だったのである。「生命の樹」に於いては、必ずしも三柱の神が一体化する必要はないが、インダスでは一体だったのである。千手千足の千は $10 \times 10 \times 10 = 1000$ であり、10 は完全数で（1 人の）神を表すから、ここから三柱の神が一体であることを暗示している。三叉戟は「生命の樹」であり、三眼は至高世界から覗く絶対神の目である。雷鳴はヤハウエである。もう 1 つ、興味深い神話がある。

“ある時、七聖仙が集まって、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの中で誰が最高神なのか激論していた。しかし、いつまでたっても結論が出なかったので、ブリグ仙が直接三神に会って判断することとなった。まずブラフマーを訪ねたが、ヴェーダと知恵の保管者であることに自惚れ、ブリグに挨拶すらしなかった。ブリグはその様子に腹を立て、やがてブラフマーを崇拝する者は誰も居なくなるだろう、と預言して立ち去った。

次にシヴァを訪ねたが、シヴァはパールヴァティーと性行為の真っ最中で、終わるのを待っていたが、何百年経っても終わらなかった。（タフすぎると言うか、何を考えているのだろう…。）シヴァは暗闇の中で性器の形で崇拝されるようになるだろう、と預言してブリグは立ち去った。

最後にヴィシュヌを訪ねたが、ヴィシュヌはアナンタ龍王の上で横になって眠っており、何百年経っても起きなかった。自棄になったブリグは、ヴィシュヌの胸を蹴飛ばした。すると、ヴィシュヌは目を覚まし、足を怪我しなかったかどうか、ブリグに尋ねた。ブリグはその態度に感激し、ヴィシュヌが最高神であると結論を下した。”

いずれの話も、ヴィシュヌが中心であることを示唆しているように、実はリングもヴィシュヌこそ中心の神であることを示唆している。それは、リングには三神を表す 3 本の横線が描かれているが、唯一絶対神の目を表す円は、ヴィシュヌを表す中心の線に描かれていることで象徴されている。3 本の横線は、「生命の樹」に於ける至高世界、中高世界、下層世界も表す。また、トリムルティを表す図では、わざわざ本来の位置をずらしてヴィシュヌを中心に描いているのも、ヴィシュヌが最も重要であることを解りやすく示すためである。

通常、リングは石龕（せきがん）の内部に祀られている。龕は子宮を表し、生命の創造を表現している。ヒンズー教徒は、ここでマントラを唱えて祈る。リングの先端にミルクやギー（水牛や山羊の乳から作られた脂）、胡麻油などが掛けられる。これらはシヴァの精子を表しており、下のヨニに流れ落ちる。これにより、シヴァの精液はパールヴァティーの子宮へ入り、新たな生命を創造

すると考える。

シヴァは、仏教では6つの天界を支配する魔王マヘーシュヴァラ（摩醯首羅）となり、意識して大自在天である。6つの天界とは四天王衆（してんのうしゅ）天、三十三天、夜摩（やま）天、兜率（とそつ）天、衆變化（らくへんげ）天、他化（たけ）自在天であり、大自在天は他化自在天を支配する。それ故、他化自在天魔王とか第六天魔王とも呼ばれ、これが仏教最大の大魔王であり、大魔王とは暗黒の側面である。鬼門は鬼の住む方角で、この方角を守護する天部が伊舎那天であり、その別名が摩醯首羅でシヴァのことである。よって、鬼の原型はシヴァでもある。

また、シヴァにはコブラが巻き付いているので、三叉戟で「生命の樹」を象徴すると同時に、「死の樹」をも象徴する。そして、髑髏で着飾ったり、墓場をうろついたりしている暗黒面がまさしく「死の樹」であり、そのため、バイラヴァ（恐怖を与える者）とかムンダマーラー（髑髏の首飾り者）などとも呼ばれている。

ヒンズー教で牛を食べないのは、牛は神の化身だからである。その原型はシヴァの乗り物“聖なる牛ナンディン”で、天界の聖なる牝牛スラビと聖仙カシユヤパの間に生まれた牝牛で、“幸福なる者”の意味である。シヴァとナンディンを重ねて描いた絵も多く、そのため、ナンディンはシヴァの化身と見なされることもある。また、シヴァの暗黒の化身バイラヴァは、顔は水牛で体は人間であるため、牛頭天王（ごずてんのう）とも言われる。

このように、インドでは牛は神であるが、ヘブライでは偶像崇拜の対象だったのは金の仔牛（アモン）であり、偶像崇拜の神とされていたバアルも牝牛の姿をしている。そのため、シヴァに光の側面と暗黒の側面があるように、牛にも両方の意味が隠されている。

日本で牛に喩えられる神は、スサノオである。スサノオは牛頭天王（ごずてんのう）とも言われるので、シヴァが原型である。スサノオは英雄神として祀られているが、高天原で暴れたことが原因で、天照大神が岩戸に籠もったことから、シヴァのような暗黒の側面がある。

一説によると、中国で有名な神農の発音は“スサ”と言うらしく、神農も牛頭人身だから牛頭天王である。仏教では、牛頭天王は祇園精舎の守護神であり、疫病をもたらす武塔（ぶとう）神とも呼ばれており、これも光の側面と暗黒の側面を併せ持つ。つまり、流れ的にはシヴァ→牛頭天王→武塔神→神農→スサノオとなるのである。あるいは、イラン高原南西部に建国したエラム人の国には、スサという都市があった。エラム人はシュメールの地に浸入し、都市間の勢力争いに加わった。そのスサの守護神はインシュウシナクと言い、後に冥界神となった。スサノオは根の国＝冥界に下ったので、冥界神と見なすことができるから、スサは“エラムのスサ”由来であるとも考えられる。

中国に於ける創造神もまた3人で、伏羲、女媧、神農であり、神農も三神の1人である。この三神を三皇と言う。伏羲、女媧の原型はヒンズーの蛇神ナーガ

とナーギであり、天地創造に関わるから、御父（均衡の柱、伏羲）と御子（慈悲の柱、女媧）に相当する。ならば、神農は峻巖の柱に相当し、シヴァやスサノオの対応と一致する。神農は農業などを人類に教えたから、エンリルにも相当し、峻巖の柱で一致する。他に、神農は野草を片っ端から口にして薬草を発見し、漢方薬を見出したから、光の側面を持つ。

また、神農には炎帝という別名がある。女媧が死ぬと、代わって伝説の黄帝が三皇に加わったが、炎帝と黄帝は仲が悪かった。やがて戦いにまで発展し、炎帝が炎で地上を焼き尽くすと、黄帝は雷雨で応戦した。その雨量は凄まじく、炎は下火となって炎帝は敗北し、南方へと追放された。このように、神農には暗黒の側面もあり、シヴァの性質と一致する。

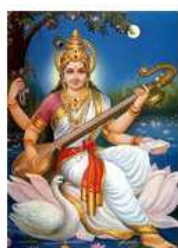
そして、中国では北は天帝の座で陽、南は陰である。これは、天界（陽）から地上（陰）ヘルシファーが落とされたことにも対応している。神農＝炎帝は、後に西遊記に取り込まれ、火炎山に住む牛魔王とされてしまった。

なお、釈迦の正式名ガウタマ・シッダールタのガウタマは“最上なる牛”を、シッダールタは“目的(実利)を成就せる者”の意味であるから、釈迦も牛に関係している。

(3) 女神

日本の“表向き女神”である天照大神には、太陽のような慈悲の光と恩恵をもたらす和魂（にぎみたま）と、スサノオと勇ましく戦ったような荒魂（あらみたま）という両極に位置する御魂（みたま）がある。この原型はヒンズーの女神であり、ヒンズーの女神観には、大地母神としての母（慈悲、再生）とヴェーダ期よりあった血の流出によって凶事を防ぐ血の儀礼（死、破壊）の価値観が投影されている。そのため、母としての女神（和魂）と、新たな再生へと導く破壊の女神（荒魂）という対極の神概念が生まれた。ヒンズー後期になると、女神たちはシャクティ（性力）として表現され、男性性を活性化させ、特にハタ・ヨーガではその存在無しでは神人合一が不可能なほど、強大なパワーを体現するようになった。

原型がイナンナであることを考えれば、よく理解できるだろう。



サラスヴァティー



ラクシュミー



パールヴァティー

A：サラスヴァティー

ブラフマーの妃。仏教では弁財天。リグ・ヴェーダの中では最高の母、女神

の中の女神と賞される川の女神であった。また、ブラーフマナ文献によれば、“ヴァーチュ＝言葉”と同一視され、サンスクリット語とその文字デーヴァナーガリーの創造者と考えられている。今日では、それらの発想が転じ、学問と知恵、財産と幸福、言語と芸術を司る女神となっている。

シュメールで文字を発明したのはエンキとその娘ニダバであり、ニダバはシュメールでの文字の女神である。ならば、エンキから知恵をもらった（奪った）イナンナが創造したインダス文明でも、エジプトのように創造神としてエンキの影響は多大であり、サラスヴァティーにはニダバ、ニダバにはエンキが重なっていることになる。

ラクシュミーと共にヴィシュヌの妃とされることもあるが、本来はブラフマーの妃であると同時に、ブラフマーが自ら創り出した娘でもある。マツヤ・プラーナによれば、ブラフマーは自らが創造したこの美しい娘に夢中になった。父の熱い視線を感じた女神が右方に遠ざかると、ブラフマーの体からもう1つの顔が現れ、彼女が背後に回ると更に2つの顔が現れ、空中に飛び上がると5番目の顔が現れた。父の熱い視線から逃れられないと悟った女神は、ついにブラフマーと結ばれ、人類の祖となるマヌを産んだという。

シュメールのエンキは、女科学者で異母妹のニンフルサグと共に遺伝子操作を行い、人類を創成したが、実際にニンフルサグと交わったりもしたことが、原型である。

最も一般的な姿は、腕は2本か数本あり、ヴェーダ経典、数珠、ヴィーナ（ギターのような楽器）などを持ち、蓮の花の上に立つ姿である。

なお、ブラフマーは通常、4つの頭である。ある時、シヴァは自分が創造神の中では最高であることを認めるよう、ブラフマーに迫った。しかし、いくら言ってもブラフマーは承知しなかった。そこで、シヴァは興奮して大火炎となるが、ブラフマーは一步も譲らない。シヴァは怒り心頭に発し、憤怒を全身で表し、周囲の者を畏怖させた。これがバイラヴァである。そして、バイラヴァが5つあった頭の1つを切り落としてしまった。そのため、ブラフマーの頭は4つになってしまったのである。（シヴァって、一体…。）

ブラフマーはようやくシヴァの主張を認めたが、シヴァは創造神の首を斬るという大罪を犯してしまった。ブラフマーは贖罪の方法として、「切り落とした頭蓋骨を持ち、ヴィシュヌに会うまで苦行を続けるがいい」とシヴァに言った。シヴァはそれに従い、頭蓋骨の器で托鉢しながら旅を続け、やっとヴィシュヌの住まいに辿り着いた。しかし、門番に阻まれて入れない。またもや激怒したシヴァは門番を殺して罪を重ねてしまったが、何とかヴィシュヌと会うことは出来た。食事を乞うと、ヴィシュヌはシヴァの額を斬りつけ、「そこから流れ出した血潮こそ、お前の食事に相応しい」と答えた。シヴァは今までに重ねてきた罪はどうやって償えばいいのかを、礼を尽くしてヴィシュヌに尋ねた。ヴィシュヌは「聖都ベナレス（ヴァラナシー）に行けば、お前の犯した大罪は消えるだろう」と答えた。喜んだシヴァはブラフマーと門番の頭蓋骨を抱えて、踊りながらベナレスに向かった。聖都に着くや、シヴァの罪は清められた。（何で？）

イナンナが冥界に行き、“復活”したと似ている。また、シヴァは髑髏を持って托鉢しているが、これが後の無情瑜伽（ゆが）タントラなどに利用され、髑髏が重要なものとなった。髑髏を持ったシヴァは、鬼神を引き連れて墓場をうろついたりしている。そのような場所にシヴァが関係するのは、シヴァが踊りの王としても崇拜されていることに因る。シヴァは 108 種の舞踊を演じる踊りの名手でもある。108 は、後に仏教に於ける煩悩の数になった。仏教では、シヴァは悪神のため、煩悩として象徴される。そして、畏怖相のシヴァが墓場や火葬場でターンダヴァと呼ばれる舞踊を演じた。10 本の腕を持ったシヴァが、鬼神や妃と共に熱狂的に踊ることにより、宇宙の運動の源泉としての神の活動力を示しており、シヴァは踊りながら宇宙を破壊しては創造する。墓場や火葬場は死に関係する場所であり、生命の破壊であると同時に、新たな生命の始まりでもある。人間は誕生してから「生命の樹」を上昇していき、死に際して、その上昇を終える。つまり、「生命の樹」のセフィロトをすべて通過することになるから、セフィロトの数に因んで“10 本の腕”となる。ただし、生存中に“知恵”を得たかどうかは、その人自身に因る。“知恵”を得ていたならば、“10 本の腕”にシヴァ自身をプラスして 11 となる。

B：ラクシュミー

ヴィシュヌの妃。仏教の吉祥天女。ラーマヤナによれば、「神々」とアスラたちが不死の霊滴であるアムリタ（甘露）を求めて乳海をかき回すと、泡立つ海の中から、手に蓮を持った美しい女神ラクシュミーが生まれたという。また、この女神は天地創造の時、蓮の花の上に乗って浮かんでいたともいう。

ヴィシュヌ・プラーナによれば、ラクシュミーが現れるとヴィシュヌは即座に妻にしたといい、ヴィシュヌがブリグ族のパラシュラーマ（斧を持つラーマ）として生まれると、女神はダーラニーとなって従い、ヴィシュヌがクリシュナとして生まれると、その妃ルクミニーになったとされる。このように、ラクシュミーは常にヴィシュヌに従い、ヴィシュヌの化身に応じてラクシュミーもそれに対応する化身となっている。

このようなラクシュミーの立場は、マハーバーラタが成立した頃に成立したものであり、それ以前は、単に幸・不幸を司る女神とされていた。

最も一般的な姿は、4 本の腕に蓮華、アムリタの瓶、ヴィルヴァの実、法螺貝を持ち、赤い睡蓮の上に立つ姿で、女神の左右上から象が水を注いでいる姿である。

C：パールヴァティー

シヴァの数百の妃の中で、最もシヴァに愛されている妃。仏教では烏摩（うま）。詳細は、シヴァの項で述べた通り。手には何も持たず、しばしばシヴァの膝の上に坐す。中には、両方の乳房をあらわにし、それをシヴァの両手が包み込んでいるものもある。

また、ラクシュミーの項で述べた乳海攪拌の際、ヴィシュヌの化身である巨大亀クールマに大マンダラ山を乗せ、大蛇ヴァースキ（ナーガ）を絡ませて、「神々」とアスラがヴァースキの尾と頭を引っ張りあうことで山を回転させる

と、海がかき混ぜられた。海に棲む生物が細かく裁断されて、やがて乳の海になったのである。巻き付けられたナーガは苦しさのあまり、毒を吐いた。それをシヴァが残らず飲み込んで世界を救ったが、猛毒がシヴァの喉を焼いたため、首から上が青黒くなった。この時、毒を全部飲み込まないように、パールヴァティーはシヴァの首を締め付けた。特に首には青いアザが残り、シヴァはニールアカンタ（青い喉を持つ者）とも呼ばれている。

D：ドゥルガー



元々の意味は“近づきがたい女神”であり、ヴィンディヤー山の住民に崇拝されていた土着神で、魔を殺し、酒や肉を好み、獣の生贄を求める処女神。イナンナが原型である。その後、マハーバーラタによって困難から救う神として崇拝されるようになり、特に航海の神として知られている。イナンナは冒険好きの旅行者だったが、ここでは航海の神となっている。（どちらも“船”が関係する。）

デーヴィー・マハートミヤには、ドゥルガー誕生の伝承が記されている。インドラをはじめとする古い「神々」が、マヒシャというアスラ（魔神）が率いるアスラ軍団と戦い、天界を追われた。その後の戦いでも苦戦したインドラは、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァなどに応援を求めると、それに応じた「神々」が一体となって怒りの光を放ち、その中から 1 人の女神が誕生した。（ヴィシュヌの口とシヴァの第3の目から発せられた光から生まれた、という話もある。）「神々」は喜び、シヴァは三叉戟を、クリシュナは円盤を、ヴァルナは法螺貝を、アグニは槍を、インドラは雷と鈴を、ブラフマーは水瓶を、ヒマヴァットは乗り物として獅子を、その他多くの「神々」がそれぞれの武器を彼女に与えた。ドゥルガーはそれに応え、全世界を覆うような光を放って、アスラの王マヒシャを倒した。

ドゥルガーは、獅子を従えた美しい女神として描かれることが多い。イナンナも、しばしば獅子あるいは豹を従えて描かれている。

このような話から、アスラ（魔神）はマルドゥクー派、ドゥルガーはイナンナであり、ドゥルガーを援護した「神々」はエンリル一族と言える。

E：カーリー



カーリーとは、“時間”と“黒色”の2つの意味を持つカラという言葉の女性形である。故に、別名を“時の女神”とも“黒色の女神”とも呼ぶシヴァの暗黒面を司る妃であり、シャクティとしてのシヴァのエネルギーの源泉ともなっている、非常に重要な位置を占める女神である。

この女神が登場するのは叙事詩の時代になってからである。デーヴィー・マハートミヤによると、「神々」の世界を支配しようとした魔神シュムバとその兄弟、手下のチャンダやムンダらと戦うことになったドゥルガーは、その怒りによって顔色を黒色に転じると、そこからカーリーが現れたというのである。この場合も、魔

神一族はマルドゥク一派、カーリーはイナンナである。

カーリーは黒色の肌であり、首には仕留めた魔神たちの生首や髑髏の首輪を掛け、4本の手には血糊の付いた剣や縄、三叉戟などの武器、髑髏の付いた棒、血の滴る生首を持っている。腰には虎の皮を巻き付け、大きく開いた口からは長い舌を出している。横たわるシヴァにまたがり、目は血走り好戦的で、血を好み、破壊と殺戮を楽しむ強大なパワーを持った女神である。

このように、カーリーはシヴァの暗黒面に位置する荒魂、パールヴァティーは和魂、ドゥルガーはその両方を併せ持つ性格である。元々はドゥルガーの怒りから生まれたわけであるが、カーリーの聖地カルカッタを中心に、ドゥルガーよりも強い信仰を勝ち取っている。

戦いの女神であり、シャクティとしてのシヴァのエネルギーの源泉ともなっている性エネルギーの象徴であるのは、まさにイナンナそのものである。そして、イナンナがギグヌで演じた“聖なる結婚”の儀式に於いて、夜を共にした男たちが翼を破られたり、穴の中に埋められたりしたことが、破壊と殺戮を楽しむ暗黒面の象徴となったのである。

なお、一部のキリスト教異端派では“黒いマリア”が崇拝されていたが、原型はカーリーである。

(4) ヴェーダの「神々」

ヴェーダの記述に用いられた古代サンスクリット語は、ゾロアスター教の聖典アヴェスターやアケメネス朝ペルシャの楔形文字碑文に残る古代イラン語に極めて近く、「神々」の名称や祭式の用語に於いても、多くの類似点が見られる。また、古代オリエントに於ける他地域の文献にも、ヴェーダの「神々」の名が見られるので、ヴェーダの「神々」はインド系アーリア人固有のものばかりではなく、インド・ヨーロッパ語族の中で東方に移動したアーリア人に共通のものが多い。

ヴェーダの「神々」の多くは、自然界の事象を基に神格化されたもので、天神ディヤウス、太陽神スーリヤ、暁の女神ウシャスは天界に、雷神インドラ、風神ヴァーユ、暴風神ルドラ、雨神バルジャニヤは空界に、火神アグニ、酒神ソーマは地界に住む。

A：インドラ

ヴェーダに於ける英雄神で軍神。仏教の帝釈天。全身が茶褐色で、暴風神マルト神群を従え、2頭立ての戦車に乗って天空を駆け巡る。最も有名な話は、水を堰き止める悪魔の龍ヴリトラ（本来は“障害物”の意）を退治する武勲で、人間界が待ち望んだ水をもたらした。この時、インドラは神酒ソーマで奮い立ち、工芸神トヴァシュトリの造った武器ヴァジュラ（金剛杵）を投げつけて勝利を得た。このヴァジュラは、煩惱を打ち砕く密教の法具として日本に伝えられている。武器を造れる工芸神はエンキであり、エンキから武器を授かってアンズと戦ったニヌルタに重ねられる。更に、“邪悪な蛇＝邪悪な龍”と呼ばれたマルドゥク一派を完膚無きまでに叩きのめした軍神ニヌルタとイシュクルでもある。

また、バビロニア神話に於いて、マルドゥクがカオスの海龍ティアマトを殺害する天地創造神話に類似している。マルドゥクは暴風雨神でインドラは雷神であるが、暴風神はルドラがいる。そして、別に風神ヴァーユもおり、エンリルが風神だから雷神インドラはイシュクルに相当し、暴風神ルドラがマルドゥクに相当する。つまり、マルドゥクがバビロニアを力づくで支配したことが、本来のインドラ神話に重ねられ、このような混乱が生じたのである。

一方、インドラは非常に奔放的で、人間的な側面も見せる。太陽神スーリヤやマルト神群とトラブルを起こしたり、猿を妻にして妻インドラニーの怒りを招くなどのエピソードもある。

インドラは、イランのゾロアスター教では悪魔の地位に落ちている。

B：アグニ

火を意味する言葉で、ラテン語（ignis）やイラン語の火とも語源を同じくする。アグニは天にあっては太陽として輝き、空に於いては稲妻として煌めき、地上では祭壇の聖火として燃え、人の中にも怒りの火、思想の火などとして存在する。家庭の神として家内安全と繁栄をもたらす一方、敵や悪魔を焼き尽くす天の業火である。アグニ転じて、日本では火之迦具土神（ホノカグツチノカミ）を祀る愛宕神社となる。

C：スーリヤ

スーリヤは幸福をもたらす 7 頭の黄金の馬に引かれ、暗黒を包み込んで天を駆ける。7 頭の黄金の馬は、前述の「生命の樹」の 7 段階を上昇することを表す。他に太陽に関する神として、サヴィトリとプーシャンがいる。サヴィトリは万物を刺激して励ます黄金の神であり、プーシャンはそもそも太陽を育んだ神であったが、その後は牧畜の神や道祖神に変化した。

オリッサ州コナーラクにあるスーリヤ寺院には、前殿に 12 対の大車輪が彫られている。これは、十二支族と 12 人の使徒の予型である。

D：ヴァルナ

インドラと並ぶ重要な神で、司法神である。自然界の秩序や人間界の規律や正義を指すリタ（天則）の守護者。天体の運行や人間界の秩序はヴァルナによって守られており、神も人もこれに背くことはできない。ヴァルナはまた、ヴラタ（契約）も守護しており、同じ契約の神にミトラがいる。ミトラ＝ミトラス＝マイトレーヤ＝イエスである。

ヴァルナは水との関係が深く、後に水神となり、仏教では水天である。秩序、司法、契約はエンリル、ウツ、エンキに関係するが、水まで関係するのはエンキである。

E：ウシャス

ヴェーダの中では珍しい女神で、ラテン語のアウローラ（オーロラ）と語源が同じである。ウシャスは太陽に先んじて東の空に現れ、暗黒の闇を追い払う。その関係からウシャスはスーリヤの恋人であり、夜の女神ラートリーはウシャ

スの姉妹とされている。

F：ソーマ

ソーマは神酒であり、酒神でもある。しかし、ソーマは実際には酒ではなく、植物から搾り取った興奮作用のある液体麻薬であり、それが神格化された。古代イランのゾロアスター教に於けるハオマと同一のものである。ヴェーダではマドゥ（蜜）とかアムリタ（甘露）とも呼ばれ、「神々」の中でも特にインドラが好み、英気を養った。イナンナが統治していた第3の地域は、十分な文明が花開かなかったので、麻薬が神酒とされたのである。

ソーマは天界にあったが、霊鳥が地上にもたらしたとされる。ヴィシュヌが乗って天空を駆け巡る鳥ガルダの項で述べたように、天界にある不死のアムリタとは、「生命の樹」の至高世界に達することである。霊鳥とは、ガルダのことである。

G：ルドラ／マルト

マルト神群の父で、モンスーンが神格化された。恐ろしい弓矢で人々に危害を加える一方で、恵みをもたらす神である。ルドラは霊験あらたかな医療によって疫病を追い払う神として崇拝された。後に、ヒンズー教ではシヴァの前身とされた。

インドラの項で述べたように、暴風神ルドラがマルドゥクに相当する。しかし、マルドゥクは医療とは関係無いから、医療はマルドゥクの父エンキと弟ニンギシュジッダの象徴である。また、シヴァにはイナンナが重なるが、イナンナと戦っていたのはマルドゥクであり、後にメソポタミアはイナンナに代わってマルドゥクが支配したから、シヴァの前身とされたのである。

(5) ヴェーダ以外の「神々」

ヴェーダの「神々」などは、ドラヴィダ族を支配下に置いたアーリア人によって形成されたものである。ここでは、それ以前の土着神を紹介する。

A：ナーガ

人間の顔とコブラの首（普通は7つ）を持つ蛇神。ナーガ（男神）とナーギ（女神）が交わって天地が創造された。原型は二重螺旋の遺伝子を操作して人類を創成した蛇神ニンギシュジッダとエンキで、7つの首はメノラー＝「生命の樹」である。

ナーガとは“永遠”の意味である。＜神々の真相2＞で記したように、絡み合う蛇はニンギシュジッダの象徴であり、「生命の樹」そのものであり、二重螺旋の遺伝子を象徴したものであった。また、救世主の象徴である“8”の字を形成し、これを横向きにすると“∞”となり、“永遠”を象徴すると同時に、これが3次元的な立体で表現される“メビウスの輪”は開始点と終点が同じとなる。つまり、最初＝アルファであり最後＝オメガであるから、無限＝“永遠”を象徴すると同時に、イエスを象徴する。

B：ヤクシャ

富の神クベーラ（毘沙門天）の従者とされる精霊で、善良な性格の持ち主。人前に現れる時は、豊満な肉体の美しい女性として現れる。人間には友好的であるが、「神々」の財宝を奪い取ろうとする者には、断固として敵対する神である。

仏教に於いては、当初は仏法を守る八部衆の 1 人であったが、時を経るに従い、人間の精気を吸い、血肉を食らう夜叉とされてしまった。このクベーラ（毘沙門天）こそ、現在鞍馬寺で祀られているサナート・クマラの正体である。

C：ヤマ

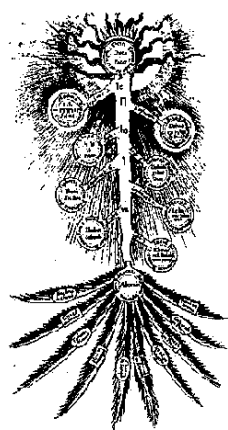
この世に最初に生まれた人間で、リグ・ヴェーダでは太陽神の子とされている。最初に生まれた人間なので最初に死んだ人間となり、“死の道案内人”という性格が生まれた。最初のうちは、無情の樂園の統治者であったが、後に“生前の行為から、死者に賞罰を与える神”と変化していった。王冠を被り、血のように染まった真っ赤な服を着て、手には棒と縄を持った恐ろしい冥界の神となったのである。更に中国風にアレンジされ、日本では閻魔大王となった。

D：ムルガン

神聖な子供、という意味である。別名はクマーラ（少年、の意）であり、それ以外にも 64 の別名を持つという。特に知られているのはシヴァの息子スカンダである。生まれて 6 日目にアスラを打ち破った勇猛な戦士である。

ここにもクマーラが登場する。つまり、サナート・クマラなどという存在は、クベーラやクマーラなどが混在した神智学由来の空想的産物にすぎない。それを崇拝することなど、カッバーラを理解できない偶像崇拝の典型例である。

(6) インドに於ける「生命の樹」



インドでは古代から木が神聖視されている。これは、木が「生命の樹」を象徴するからである。例えば、釈迦が悟りを開いた菩提樹アシュヴァッタも「生命の樹」を象徴している。また、古代インド神話には、天へと上昇する宇宙樹アシュヴァッタが登場する。バラモンの修行僧は、アシュヴァッタに梯子を掛けて最上部に昇る者として表現される。これはヤコブの梯子と同じであるから、アシュヴァッタは「生命の樹」である。興味深いことに、アシュヴァッタは根を上方に広げ、枝葉を下に伸ばした上下逆さまの状態であり、バンヤンという蔓が巻き付き、長い根を空中に向けて這わせている。バンヤンは生命力の根源を意味し、そこから宇宙原理ブラフマンの種子が出てくるといふ。上下逆さまの状態は「生命の樹」の鏡像反転を暗示しており、生命力の根源であるバンヤンは「生命の樹」に絡まる蛇を象徴している。

そして、アシュヴァッタの葉の形状はハート形であることから、イチジクの木であるとも考えられている。イチジクと言えばアダムとイブであり、2 人は腰

にイチジクの葉を着け、主の怒りを買った。イチジクの葉を着けることになった原因は、2人を唆した「知恵の樹」の蛇である。「生命の樹」と「知恵の樹」は「合わせ鏡」になっているが、宇宙樹アシュヴァッタがイチジクであるということは、「生命の樹」であると同時に「知恵の樹」であることも象徴している。

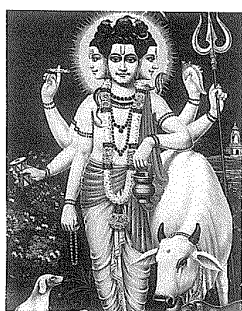
4：インダス・カッパーラの詳細

(1) インダス・カッパーラとイナンナ

これまで見てきたように、インダスのカッパーラは特異的で、「生命の樹＝アダム・カドモン」が最初から正面を向いており、他の文明のものとは逆である。これは、他の文明の主神（創造神）が男神であるのに対して、インダスは女神イナンナだからである。決して、インダスにサタンの要素が多いからではない。つまり、アダム・カドモンを正面向きとすることにより、主神が女神であることを暗示しているのである。インダスの“まんじマーク”は、日本の卍（左回り）と逆（右回り）なのも同様である。ヒトラーは逆卍を45度回転させ、黒魔術として悪用したが、チベットが関係する神智学＝東洋黒魔術に深く関わっていたためである。ナチスの傭兵に、チベット兵が多くいたことを知る人は少ない。ナチスは、チベットの山深くに存在すると言われるシャンバラを求めたが、失敗に終わった。

インド亜大陸は下（南）向きの三角形で陰、ヒマラヤは上（北）向きの三角形で陽であり、偶然にも陰陽を成す。女神イナンナがインド亜大陸（アラタ）を与えられたのは、インド亜大陸が陰を象徴する下向きの三角形だから、という理由なのかもしれない

インダスの神話は、エジプトほどは混乱していないが、多くの化身が登場する。これも、無数の「神々」は無数の女神と結合し、最後は唯一絶対神となり、女神イナンナに行き着くことを象徴している。



ダッタトリーヤ

トリムルティについては述べたが、実際にヴィシュヌと一体となったシヴァもあり、ハリ・ハラと言う。ハリがヴィシュヌ、ハラがシヴァを表す。左半身がヴィシュヌで、右半身がシヴァである。更に、化身の神ヴィシュヌには、ハリ・ハラにブラフマーまで一体となったダッタトリーヤもあり、生きた人間の聖仙として誕生した。

また、シヴァはパールヴァティーとも合体している。この両性具有のシヴァはアルダナーリーシュヴァラと呼ばれ、描かれる時は右半身がシヴァ、左半身がパールヴァティーである。つまり、右が陽、左が陰であり、アダム・カドモンと同じ構造である。ならば、ハリ・ハラもシヴァが陽で、ヴィシュヌが陰となる。アダム・カドモンの右半身は陽、左半身は陰を示す。ただし、インドの場合のアダム・カドモンは正面を向いていることに注意しなければならない。インドでは右手は清浄で左手は不浄とされるのも、これに由来している。



シヴァと
パールヴァティー

ている。

ヴィシュヌは中心の宇宙神でもあるから、コスミック・ヴィシュヌとも言われる。通常のヴィシュヌの頭は1個であるが、コスミック・ヴィシュヌは7個や11個の顔を持つ。7はメノラーであり、11は隠されたダアトも含めたセフィロトの数である。仏教で11と言えば十一面観音があるが、そのルーツはコスミック・ヴィシュヌである。ただし、11個の顔のうち1個は真後ろにあり、笑顔である。これは、隠されたダアトを表している。コスミック・ヴィシュヌは様々な形態をとる。中でも、無数の手が描かれたものは千手観音のルーツである。1000=10×10×10であり、完全数10(=神)の3で、「生命の樹」の三柱の神と三神一体を表す。このように、コスミック・ヴィシュヌには、カッパラーの奥義が満載されている。

では、最終的にイナンナに行き着くというのは、どういうことか。女神は絶対三神と結合して陰陽を成すから、絶対三神の関係だけを見れば良い。妃と合体している図としては、ヴィシュヌはほとんど無く、パールヴァティーと合体したアルダナーリーシュヴァラが一般的であることからすると、この結合の奥義はシヴァが示していることとなる。先ほどのダッタトレヤの図では、向かって右が三叉戟を持っているからシヴァ、向かって左が円盤(チャクラ)を持っているからヴィシュヌ、中心はブラフマーとなり、インダス本来の「生命の樹」の並びを描いている稀な図である。

・慈悲：ヴィシュヌ、均衡：ブラフマー、峻厳：シヴァ。

これまで見てきたように、神話の中心はヴィシュヌとシヴァであるから、ブラフマーは考えなくとも良い。そして、イエスの予型となっているのはヴィシュヌであり、化身の根源もヴィシュヌであるから、ヴィシュヌが主神のように思える。しかし、インダスの象徴と言えば、ヨーガ、リング、聖なるガンガーによる洗礼などであり、いずれもヴィシュヌではなくシヴァに関係する。そして、三神が合体したダッタトレヤでは「生命の樹」の対応に適合しているが、ブラフマーを除いたシヴァとヴィシュヌが合体したハリ・ハラでは、右側=陽がヴィシュヌではなく、シヴァとなっている。これは、シヴァこそがインダスの本当の主神であり、謎を解く鍵であることを暗示しているのである。

つまり、イエスの予型としては、多くの化身を有し、慈悲の柱に相当するヴィシュヌが主神となるのであるが、インダスの象徴としての主神はヴィシュヌではなくシヴァとなる。そして、これまで見てきたように、シヴァはイナンナの象徴であるから、最終的に行き着く先はイナンナとなる。

そこで、シュメールの「神々」とインダスに於ける「生命の樹」の対応を考える。シュメールでは、アヌではなくエンリルが実質の主神として振る舞っていたように、インダスではイナンナが主神となる。

ここで、三神の争いを見直す。ブラフマーこそ本来の創造神であるが、シヴァに首を切り落とされている。これは、シヴァがブラフマーに反逆したことであるが、イナンナが全権力を手に入れることを思い描き、ナラム・シンに命じて神聖な第4の地域を通過させたことの象徴である。(この場合、インダス文明にはマルドゥクは関与しないから、マルドゥク一派であるイギギの反乱、ということではない。)つまり、ブラフマーとしてエンリルが相当する。確かに、主神としてのエンリルの性質は、インダス文明に於いてほとんど登場することは無い。しかし、地上に於けるエンリルはニビルのアヌの代理でもあるので、アヌとも見なせる。また、ブラフマーとシヴァ（とヴィシュヌ）が一体であるダッタトレーヤを、アヌとイナンナが直接交わった＝一体化した象徴と見れば、エンリルよりもアヌの方がしっくりする。よって、シュメールでは、エンリルが実質の主神として振る舞っていたが、アヌが均衡の柱であるのと同様に、インダスでもアヌが均衡の柱であると見なすのが妥当である。つまり、シュメール、エジプト、日本、インダスいずれに於いても、アヌは最高神たる均衡の柱として少し顔を出すだけであるが、最高神なので外せない。

そして、シヴァとヴィシュヌが合体したハリ・ハラは、イナンナと象徴的に同一と見なせる「神」が相当する。その候補となるのは、次の「神」である。

- ・イナンナの婚約者ドゥムジ

婚約者なので、実質的に一体化している。

- ・アヌ

イナンナはアヌに気に入られ、愛人となった。

- ・イナンナが“メ”を奪ったエンキ

イナンナが美貌で迫り、“メ”を奪った。その際、“関係した”＝肉体的に一体となった可能性がある。また、“メ”を奪ったとしても、後にエンキは酔った勢いで自ら与えたことを渋々認めているから、エンキから直接知恵を授かったと見なせる。

- ・双子のウツ

象徴的に同一と見なせる。

更に、これだけではなく、イエスの予型としてのヴィシュヌ、クリシュナという性質をも併せ持つ必要がある。ヴィシュヌの化身にはラーマ、クリシュナ、マツヤ、クールマ、ヴァラーハ、ヌリシンハ、ヴァーマナ、斧を持つラーマ、ブッダ、カルキがあるが、イエス自身の性質であるクリシュナとカルキを除き、特に象徴的に関係しそうなのはマツヤ、クールマ、ヴァラーハ、ヌリシンハである。

- ・マツヤは魚であり、大洪水を預言し、マヌに巨船を与えた。洪水をノアに告げたのはエンキであり、エンキの象徴は魚でもあり、半人半魚のオアンネス

でもある。

- ・クールマは亀であり、蛇として喩えられるエンキのもう1つの象徴である。
- ・ヴァラーハは猪であり、大洪水後に大地を水の上に持ち上げた。洪水後にアフリカを持ち上げた＝大干拓したのはエンキである。
- ・ヌリシンハは人獅子であり、スフィンクスに関連する。スフィンクスを建造したのはニンギシュジツダであるが、建造を提案したのはエンキである。

このような特徴を併せ持つのは、唯一、エンキである。よって、慈悲の柱はエンキと言える。確かに、エンキはイナンナに“メ”を与え、文明の根源となる言語、サンスクリット語を考案した。

- ・慈悲：エンキ、均衡：アヌ、峻厳：イナンナ。

(2) 聖仙

聖仙“リシ”とは、ヒンズー教の仙人のことであり、漢訳では仙人とも言われる。元は、ヴェーダに描かれた「神」の天啓に携わった詩人であり、言わば預言者である。それが、世間から隔絶され、外見は宗教浮浪者と区別できないことから、後に宗教的悟りに達した修行者のように変化してしまったのである。つまり、聖仙リシとは「生命の樹」の奥義を知り尽くした者であり、マスコミなどに登場する自称聖仙は、真っ赤な偽物である。また、一般的な仙人のイメージも誤りである。有名な聖仙としては七聖仙がいる。「シャタパタ・ブラーフマナ」の七聖仙はゴータマ、バラドヴァージャ、ヴィシュヴァミトラ、ジャマド・アグニ、ヴァシシュタ、カシュヤパ、アトリである。「マハーバーラタ」では、マリーチ、アトリ、アングラス、プラハ、クラトゥ、プラスティア、ヴァシシュタである。「ヴァーユ・プラーナ」では、更にブリグを加えて八聖仙とする。

現在も聖仙は実在し、不浄の地とされ、浮浪者がたむろするガンジス川東岸に住んでいる。何故、東岸なのか。平安京ではアダム・カドモンは後ろ向きであるため、太陽が照らす南側から見て向かって右＝東が重要であった。しかし、インダスでは正面を向いているから、太陽が照らす南側から見て向かって右＝東が穢れた側となる。そのため、聖なるガンジスの東岸に浮浪者がたむろしており、世間から隔絶されている。世間から隔絶されていれば、奥義を守るのに最適である。

また、聖仙は基本的に12人で構成され、全員で1人の聖仙を構成する。これは、3人の八咫鳥で大鳥を構成するのと同じである。つまり、聖仙とは、日本に於ける八咫鳥に相当する。

(3) タントラとインド哲学

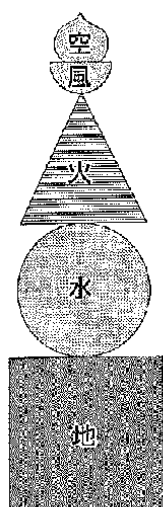
タントラとは、宇宙の真理を人体の神秘から知ろうとする、インドに於ける密教思想のことである。一般大衆に開かれた教えは顕教であり、一部の者を対象とした秘密の教えが密教である。タントラの実践者をタントリーカと言う。

聖仙が保持してきたタントラは、チベット密教やヒンズー教のタントラよりも古く、インダス文明からの口頭伝承による本来のタントラ＝原始タントラである。このタントラは人体に喩えられるため、誤って解釈すると、ダルマを踏み外して無意味な肉体修行を行ったり、カーマに堕ちる。ダルマとはタントラの奥義を求めて「神」に近づくことであり、カーマとは男女の性愛である。

アダム・カドモンに右と左があるように、タントラにも右道（うどう）と左道（さどう）がある。右道タントラはダクシナカラと言い、徹底的に禁欲を説く。深い瞑想を主体に梵我一如を目指すハタ・ヨーガは、ダクシナカラが基である。しかし、本来の解釈が成されていないため、肉体改造を基本とした神秘思想となっている。梵我一如、神人合一を達成することにより不死の体が得られ、思い通りに肉体を消したり現れたりすることができ、透視や予知も可能になると信じる。つまり、仙人である。ハタ・ヨーガは強制的な肉体改造により、これを達成しようとする（悟りを開こうとする）が、非常に危険な行為である。このような肉体改造は神経を麻痺させ、幻覚を生む。やっている本人は、現実との区別がつかないため、恐怖のカーリーに会った後、シヴァに会うことができた、などという幻覚を信じてしまう。それは単に、本人の記憶がそのような光景を見させているに過ぎない。（臨死体験者の経験談で、仏教徒は三途の川を見て、キリスト教徒は天使の集まりを見るのと同じことである。）ある者は、手っ取り早く幻覚を生じさせるために、幻覚剤を使用する。神の酒ソーマは、毒キノコであるベニテングダケから抽出したものである。幻覚剤を使ってお告げをしたりする口寄せやシャーマンなどは、如何に愚かな連中か解るだろう。

左道タントラはヴァーマカラと言い、性愛を徹底的に迫及する快楽主義である。カーマは性愛指南書「カーマ・スートラ」として有名であり、多くの者たちが左道に堕ちた。カーマ最大のものがカジュラホ寺院の一面に彫られているエロティックな男女交歓像であり、神殿売春が主体であった寺院である。日本に伝わったヴァーマカラとして有名なのが、真言立川流である。（興味のある人は、各自で調べるように。）インダスのカッパーラでは、何故、このような左道に堕ちるのか。それは、主神イナンナの物語を見れば、一目瞭然だろう。イナンナが性愛に溺れたからである。だから、この資料では、冒頭にイナンナの物語を詳細に紹介したのである。

聖仙は、ハタ・ヨーガを容認こそすれ、自らがヨーガを行うことはない。タントラの原理は、下から地・水・火・風・空の五大元素から積み上げられた世界観に基づき、人間の11器官がそれに対応する。11器官とは、5行為器官としての発声器官、手、足、排泄器官、生殖器と、5知覚器官としての耳、皮膚、目、舌、鼻プラス隠された思考器官マナスである。つまり、五大元素とはアダム・カドモンに於ける五体満足を暗示し、隠されたダアトを含めた11個のセフィロトを象徴しているのである。日本に於いても、蘇我入鹿の首塚などがタントラ原理を示しており、インダス・カッパーラの影響を堂々と示している。この写真から、墓石の原型がタントラ原理にあることが、良く解る。



タントラの原理



蘇我入鹿の首塚

タントラは哲学として大きく 6 つに分類され、インド六派哲学となった。サーンキヤ、ヨーガ、ミーマーンサー、ヴェーダーンタ、ヴァイシェーシカ、ニヤーヤ哲学である。

・サーンキヤ

この世を精神と物質の二元論で捉える。この2つの相克により人間は苦悩する。それ故、解脱のためには、精神と物質がまったく別のものであることを自覚する必要があると説く。

・ヨーガ

サーンキヤ哲学の中心に神を据えた。自我の欲望を滅し、宇宙と一体となる実践的システムを作り上げた。

- ・ミーマーンサー：祭祀儀礼の解釈。
- ・ヴェーダーンタ：ヴェーダを重視し、ウパニシャッド哲学の解釈を推進。
- ・ヴァイシェーシカ：自然哲学。
- ・ニヤーヤ：論理学。

原始タントラの直系とも言えるのが、サーンキヤ哲学とヨーガ哲学である。サーンキヤ哲学に於ける精神と物質は世界を生み出す原理であるが故に、精神原理（プルシャ）、物質原理（プラクリティ）と言う。プルシャは絶対神のことではなく、霊我とも言われるように、あくまでも個人的な自我の上にある存在のことである。陰陽で表すならば、プルシャが陽、プラクリティが陰であり、プルシャは上向きの三角形、プラクリティは下向きの三角形で象徴される。

なお、チャクラもタントラに関係するが、「ヨーガ」の項で検討する。

(4) マントラ

サーンキヤ哲学によると、世界の創造はプラクリティの動揺（振動）から始まる。プラクリティが振動して均衡を崩すと、その波紋は宇宙へ浸透し、能動的な現象世界が始まる。プラクリティの振動を音によって表現したものをマントラと言う。

マントラは聖なる音声で、宇宙の根源的な力であるシャクティが宿っている。シャクティは女性原理に基づいているため、神妃を崇拝する呪文として説明されることもある。マントラの中のマントラ、聖なる音“オウム”は宇宙の根源的な音であり、この音から、絶対神をはじめとする森羅万象が生じたという。これをアルファベットで記すと“AUM”であり、阿吽（あ・ん、アーメン、アルファとオメガ、大神アヌ）に相当するが、実在の本質“サット・チット・アナンド”が隠されている。これは、それぞれ“真の実在・純粹意識・無情の歓喜”という意味で、瞑想に於ける究極の目的とされる。それ故、AUMはトリムルティ

を表しているとも考えられている。

A：ブラフマー、U：ヴィシュヌ、M：シヴァ。

つまり、AUM とは音で表現された「生命の樹」であり、宇宙の創造・維持・破壊を表す究極のマントラ（真言）である。「神々」にはそれぞれマントラがあり、シヴァのマントラはフリーム、カーリーはクリームなどと言う。特に、チベット密教に於ける「神々」は“オウム・〇〇”となっているものが多い。例えば、阿弥陀如来はオウム・アミタプラバ・スヴァーハー、観自在菩薩はオウム・サマンタブッダーナーム・サハである。ちなみに釈迦は、サルヴァクレーション・ダナ・サルヴァダルマヴァシタープラターパガガナサマーサマ・スヴァーハーで、“オウム”は含まれない。チベット密教はサンスクリット語であるが、サンスクリット語の呪文そのものがマントラである。その音（おん）を漢字で音写したのがお経であり、代表的なのが般若心経である。仏教に於ける最も重要なマントラは“オウム・マニ・パドメ・フウム”であり、“全知全能の神、宝石が蓮華の中にあり＝「生命の樹」の中に真理あり”という意味である。

マントラで重要なのは意味ではなく音声と見なされているため、お経などは意味を知られずに唱えられている。解らなくても唱えることに意義がある、というのは、そういうことである。

(5) ヤントラ



プラクリティの振動を視覚的に表現したものをヤントラと言う。基本図形は正方形であり、その中に幾つかの同心円があり、蓮華の花弁が 16 枚、8 枚描かれている。更に、その内部に上向きの三角形と下向きの三角形が重なり合うように描かれている。この中で最も重要なのは、三角形である。上向きの三角形はプルシャ、下向きの三角形はプラクリティであり、重なり合っていることにより陰陽の無限の合一を象徴する。その基本形は、六芒星（ダビデの星）である。つまり、ダビデの星は、陰陽の合一で太極を表す。この三角形が変形されて巴となり、2 つの巴が向き合って重なって 1 つの円形となっているのが、韓国国旗などでお馴染みの太極マークである。

ヤントラは後に曼荼羅となった。曼荼羅とは“円”を意味し、タントラの宇宙観を表現している。＜神々の真相 2＞で述べたように、円は終わり無き“永遠”を象徴するシンボルである。そして、曼陀羅は三神三界を表した「生命の樹」の象徴である。マントラ、ヤントラは永遠なるもの＝宇宙創造の意識と一体となる＝梵我一如を達成する秘術と見なされている。

(6) 3 つの要素グナ

プラクリティは、原子が陽子、中性子、電子から構成されているように、3 つの要素グナによって構成されている。静止状態では均衡を保っているが、プラクリティが振動すると、グナは物質を創成し、宇宙を創造し始める。つまり、

宇宙を構成する根本的な要素がグナである。3つのグナとは“サットヴァ（純質）”“ラジャス（激質）”“タマス（鈍質）”である。

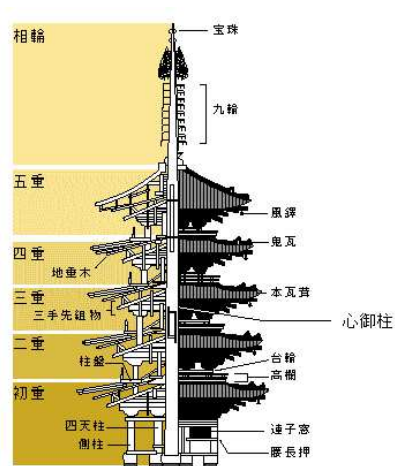
- ・サットヴァ：光や知性の要素。
- ・ラジャス：動力や経験の要素。
- ・タマス：完成と暗黒の要素。

均衡を保っている時、グナは小さな核として表現されるが、プラクリティが振動し始めると、のたうつ3匹の大蛇として表される。3匹の大蛇が次々と物質を創成し、宇宙を創成する。

蛇は「生命の樹」の象徴でもある。また、蛇には手足が無く、棒のようでもあるから、柱にも喩えられる。つまり、3つのグナとは、「生命の樹」に於ける三柱の象徴である。それぞれのグナの性質から、「生命の樹」への対応は次のようになり、特にタマスの性質は、シヴァの性質（峻厳）と見事に一致している。

- ・慈悲：ラジャス、均衡：サットヴァ、峻厳：タマス。

ラジャスとタマスは“大（マハット）”という力の塊となり、自己感覚（アハンカーラ）としての5つの微細元素を生み出す。それらは五唯（ごゆい）と言われ、色・声・香・味・触である。この五唯が更に五大元素を生み出し、それが(3)で説明した地・水・火・風・空の五大元素である。地は四角形（直方体）、水は円形（球）、火は三角形（四角錐）、風は半円形（半球）、空は宝珠形（宝珠球）で描く決まりがある。これらを下から積み上げると塔になり、立体で表すと五輪塔となり、更に変形すると五重塔となる。



五重塔の原型は、ストゥーパである。ストゥーパとは、仏舎利（釈迦の遺骨）を納めるために BC3 世紀頃から造られ始めた仏塔のことである。ストゥーパを音写したのが、墓に立てる卒塔婆である。古代インドのストゥーパは饅頭形（半球形）のものであったが、この形式が中国に伝えられると、楼阁建築の形式を取り入れて高層化するようになった。

塔の上にあるアンテナのような部分は相輪と言ひ、9輪あり、その上に宝珠が乗っている。相輪は上から宝珠、竜車、水煙、九輪（宝輪）、請花、伏鉢、露盤の7つの部分から成る。塔の中では相輪が最も重要なものであり、ここに仏舎利が納められる。相輪の中央を貫く心棒は、刹管（さつかん）または擦（さつ）と言う。

- ・宝珠（ほうじゅ）：仏舎利を納める。
- ・竜車（りゅうしゃ）：高貴な人を乗せる乗り物。
- ・水煙（すいえん）：火炎の透し彫り。火を嫌うことから水煙と呼ばれる。
- ・宝輪（ほうりん）：9つの輪。五大如来と四大菩薩を表す。
- ・請花（うけばな）：前記までのものを受ける飾りの台。
- ・伏鉢（ふせばち）：墓の原型。
- ・露盤（ろばん）：伏鉢の土台。

7つの部分は、“イナンナの冥界下り”で述べた「生命の樹」の7段階を表す。宝輪と宝珠を合わせると10個であり、「生命の樹」に於けるセフィロトの数である。そして、両者の間には竜車と水煙がある。竜と水は切っても切れない関係のため、これで一まとまりと見なすと、隠されたダウトに相当する。竜は蛇であり、蛇は知恵の象徴であるから、この見方は妥当である。

また、(3)で述べたように、五大元素とはアダム・カドモンに於ける五体満足を暗示し、隠されたダウトを含めた11個のセフィロトを象徴している。アダム・カドモンとの対応は、足から膝が“地”、膝から肛門までが“水”、肛門から心臓までが“火”、心臓から眉間までが“風”、眉間から頭頂までが“空”である。つまり、五重塔自体が「生命の樹」でもある。

なお、塔は必ずしも五重とは限らず、三重や七重などもあるが、いずれも奇数である。これは、七五三のゲマトリアに於ける陽数であり、十字架を形成する。

また、ラジャスとタマスは“大”という力の塊となり、自己感覚としての5つの微細元素を生み出すと同時に、その器官として11根（こん）を生む。これは、(3)で述べた人間の11器官に対応し、隠されたダウトを含めた11個のセフィロトを象徴している。

(7) シーク教

我々が描くインド人男性のイメージは、ターバンを巻いた髭面の男である。しかし、そのような男性はインドではあまり見かけない。彼らは大部分を占めるヒンズー教徒ではなく、シーク教徒である。シーク教徒の多くは、シン（獅子）やコウル（王女）という名前がある。

シーク教は、ヒンズー教とイスラム教を融合させた宗教で、ナーナクという人物が創設した。彼は1469年にインド北部のクシャトリヤの家に誕生し、31歳の時に遊行生活に入り解脱。“神の弟子”を意味する“シーク”の名を掲げ、楽器を奏でながら歌で教えを説き始めた。その教えはカーストを否定し、神の下の平等を説く。そして、イスラムの教えに従い、一切の偶像崇拝を排除し、抽象的な真理“サト”を唯一絶対神として崇拝する。

シーク教の指導者は導師（グル）と呼ばれ、第5代目グル、アルジュンの時、聖典グラント・サーヒフが編纂された。しかし、ムガル帝国によってアルジュンが殺されると、自己防衛のために軍備を強化し、1699年に軍事組織カールサー党が結成された。この時、次の5つの決まりを作った。長い髪（ケーシュ）、短いズボン（カッチャ）、腕輪（カンカン）、櫛（カンガー）、短剣（クリパーン）

の“5つのK”である。このようにシーク教徒の規律は厳しく、教育レベルが高く、その軍事力はイギリス軍が注目し、治安維持のために多くのシーク教徒を警察と軍隊に雇い入れたほどである。

インド独立後、シーク教徒はパンジャブ地方で自治権を得た。大地主マハラジャには、シーク教徒が多い。また、社会的地位も高く、大企業のオーナー、資産家、政府の役人や高官も少なくない。そのため、インド人のイメージとして、彼らの容貌が一役買っているわけである。

さて、シーク教であるが、多神教崇拝で性器偶像崇拝するヒンズー教と、唯一絶対神崇拝で偶像崇拝を徹底的に禁じるイスラム教が、どうして1つになったのか。その理由はカッパールである。ナーナクはインダス・カッパールを理解し、幾多の「神々」はすべて唯一絶対神に集約されることを知ったのである。そして、リングとヨニも実は性器崇拝ではないことを。その証拠に、シーク教の神には名が無い。唯一絶対神の抽象的な概念である“イク・オンカール・サト・ナム”と言う。意味は“唯一の神が存在し、真理こそがその名”である。これは、ヤハウエ＝在りて在る者と同義である。



また、ナーナクは唯一神を形成しているのが三神一体(トリムルティ)であることを知っており、イク・オンカール・サト・ナムを象徴して1つのシンボルに表した。そのシンボルは3本の剣と1つの円から構成される。中央の剣が“調合の剣”で均衡の柱、向かって左が“真理の剣”で慈悲の柱、右が“正義の剣”で峻厳の柱に相当する。1つの円は宇宙真理を具現化しており、3本の剣で唯一絶対神が形成されることを表している。そして、本来、このシンボルは“燃える鳥居”のように燃えており、炎の剣＝アダムとイブがエデンの園を追放された時、「生命の樹」に至る道を守るために置かれた“剣の炎”である。

5：ヨーガの本質

(1) ヨーガと人体の関係

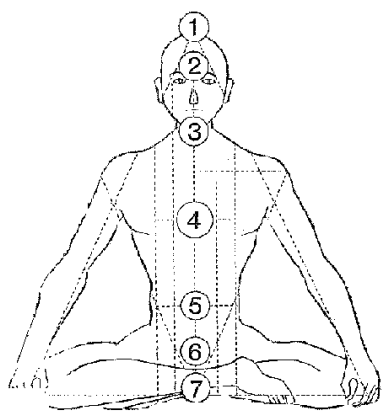
インドと言えばヨーガである。4：(3)ではサーンキヤ哲学について詳細に述べたが、この項では原始タントラの直系とも言えるもう1つの哲学、ヨーガ哲学について検討する。

ヨーガ哲学とは、サーンキヤ哲学の中心に神を据え、自我の欲望を滅し、宇宙と一体となる実践的システムである。

ヨーガの基本は、神話にもしばしば登場してきた“修行、苦行”である。この実践方法については大きく2つの流れがあり、1つは顕教としてのラージャ・ヨーガ(王者のヨーガ)であり、もう1つは密教としてのハタ・ヨーガである。前者は、ひたすら欲望を無くすことを主眼とし、欲望から解脱することで悟りを開く。このヨーガの実践者をヨギンと言い、マントラを唱えながら実践する。釈迦が行っていたのは、このヨーガである。ラージャ・ヨーガの経典とも言う

べきヨーガ・スートラ（スートラとは教典のこと）には八支ヨーガと言われる修行の 8 つの階梯（禁戒、歓戒、坐法、調息、制感、凝念、静慮、三昧）が記されている。消極的な修道の概念であるニローダ（“積極的に鎮め封じること”の意から、心の動きを抑止すること）を標榜し、哲学的追求に重きを置いた形而上学的修道論である。

これに対して、ハタ・ヨーガはサーンキヤ哲学に基づき、俗的な属性であるプラクリティの否定によって聖なるプルシャとの合一を目指す。そのため、ラージャ・ヨーガのような階梯を踏まえず、一気に三昧（ごんまい）に至る方法である。ラージャ・ヨーガによって顕現したパワーを使い、俗的な世界を積極的に聖化させ、「神々」との合一を図る。このようなハタ・ヨーガは神秘思想とも言うべきものであり、仙人の概念へと発展し、道教、密教、禅の根源となった。ヨーガでも師のことを導師（グル）と言う。

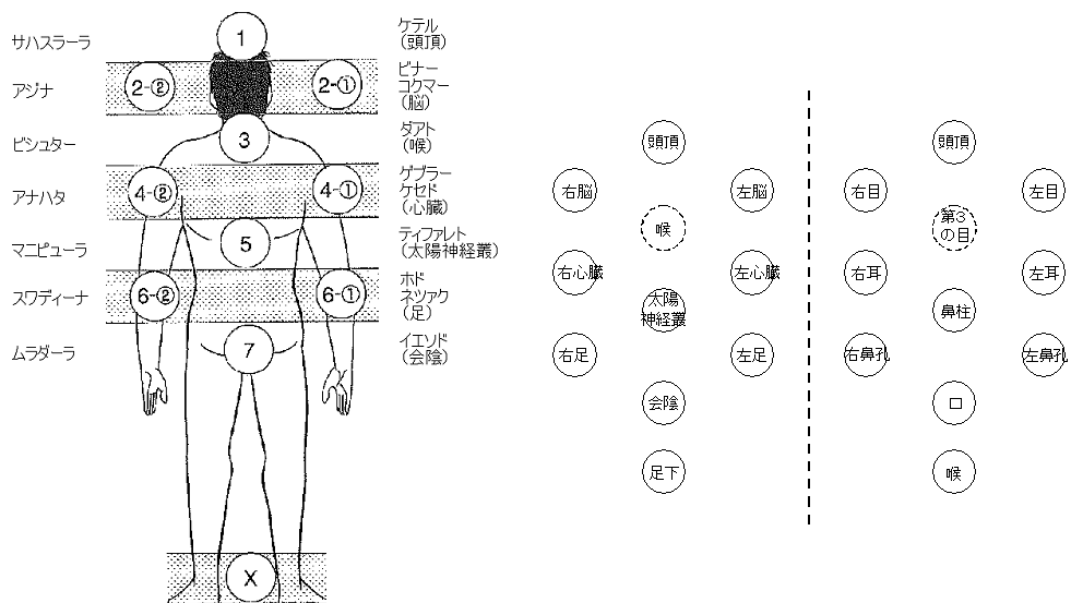


タントラでは、実際の身体に対して“微細身体”と呼ばれる存在を想定する。これは、肉眼では見えず、触れることもできない。しかし、肉体と同じ形、大きさであるとされる。微細身体には、脊椎に沿って 7 つの霊的中枢があると考える。この霊的中枢をチャクラと言う。チャクラとは“輪”という意味で、ヨーガを極めし者には、霊的中枢が円形に見えるらしいことから、このように言われる。（ヴィシュヌが持っている円盤もチャクラである。）また、微細身体は大宇宙に対する小宇宙を象徴する。チャクラとは、人体を小宇宙に見立てた場合、人体の中心を貫く 7 つの中枢のことでもある。

①サハスラーラ（頭頂）、②アジナ（眉間）、③ビシュター（喉）、④アナハタ（心臓）、⑤マニピューラ（臍）、⑥スワディーナ（丹田）、⑦ムラダーラ（会陰）。

チャクラはアダム・カドモンと対応し、背骨に沿うセフィロトだけでなく、左右のセフィロトを中心に合わせた 7 段階を示す。「生命の樹」に於ける慈悲の柱は陽、峻厳の柱は陰であり、均衡の柱は両者が一体となった太極を表す。それ故、慈悲の柱、峻厳の柱にある同じ高さのセフィロトは、均衡の柱に於いて 1 つに統一することができる。これは、“イナンナの冥界下り”で述べた「生命の樹」の 7 段階である。

①ケテル：頭頂、②ビナー・コクマー：左右脳、③ダアト：喉、④ゲブラー・ケセド：心臓、右心房・右心室、左心房・左心室、⑤ティファレト：太陽神経叢、⑥ホド・ネツァク：両足、⑦イエソド：会陰。



マルクトは足の裏のツボ“湧泉”として隠されており、脊椎には関与していない。また、アダム・カドモンの頭部も示しており、顔のカッパーラも構成する。マルクトは喉として、顔の外にある。

①ケテル：頭頂部、②ビナー・コクマー：両目、③ダアト：第3の目、④ゲブラー・ケセド：両耳、⑤ティファレト：鼻柱、⑥ホド・ネツァク：両鼻孔、⑦イエソド：口。

頭頂サハスラーラ以外のチャクラはマハットと五大にも対応している。サハスラーラは頭頂部から少々浮いた箇所が存在するので、微細身体に於ける実質的な最上部のチャクラはアジナである。

・ムラダーラ：地・四角形、スワディーナ：水・三日月、マニピューラ：火・逆三角形、アナハタ：風・六芒星、ビシュター：空・円形、アジナ：マハット、サハスラーラ：無し。

さて、7つのチャクラに大宇宙から絶対的エネルギーであるプラーナが降りると、チャクラの門が次々と開いて覚醒する。すると、ムラダーラ・チャクラで眠っていた生命の根源エネルギーが覚醒し、大宇宙の真理と一体化するために脊椎を上昇する。そのエネルギーをクンダリーニと言い、3回転半のとぐろを巻く神蛇で象徴される。

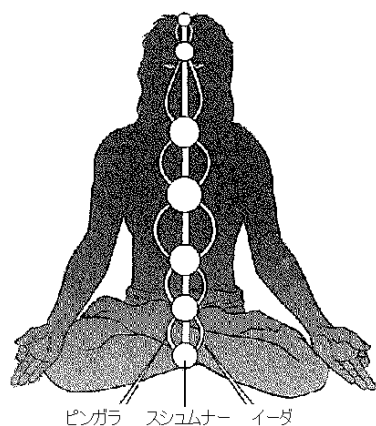
現在流布しているヨーガでは、次のように解釈されている。まず、呼吸を整えることにより、空間に充満している特殊な宇宙エネルギー“プラーナ”を取り入れる。これは“気”“オーラ”などとも言われる。そして、ヨーガの独特な

ポーズにより会陰部を刺激し、ムラダーラのクन्दリーニを活性化させる。クन्दリーニにはとぐろを巻いた蛇がいることをイメージし、そのとぐろを解きほぐすように、意識によってクन्दリーニを脊椎に沿って上昇させる。上昇は熱さや振動として感じられる。上昇できるまでは、精を漏らしてはならない。最終的には、頭頂のサハスラーラまで上昇させる。クन्दリーニは神妃シャクティ、サハスラーラはシヴァであり、両者の神秘的な結婚により梵我一如を達成する。サハスラーラまで上昇したクन्दリーニは、体の正中を通してムラダーラまで戻し、クन्दリーニを体内で循環させる。これを大周天と言い、これを達成できれば超人（聖仙、仙人）となる。

つまり、ヨガにより体を柔軟にし、体内の霊的エネルギーの流れを良くすることにより、締め付けられているチャクラが開くようになる。そして、クन्दリーニとプラナが体中に行き渡ることにより、超人になれると考える。

カーマでは、クन्दリーニの活性化のために、性愛を利用する。男女が共に行うことにより、シャクティとシヴァの完全なる合一を達成できると考える。

しかし、これは誤った解釈であり、本来の解釈は次のようになる。プラナとはカッパラーに於ける“雷の閃光”の象徴であり、頭頂部から順にセフィロトであるチャクラを降下し、ムラダーラに達する。そこから、今度は上昇する。上昇する神蛇は3回転半のとぐろを巻いているので、「生命の樹」に絡まる蛇である。つまり、チャクラはあくまでも大宇宙の真理を人体に喩えたものであり、大宇宙の真理と一体化するためには、「生命の樹」の奥義を知る必要がある、ということである。決して、肉体の修行や性愛に溺れることを言うのではない。



また、プラナの通り道を気道（ナーディー）と言う。ナーディーは血管や神経のように張り巡らされ、72000にも達すると言う。その中で最も重要なのは3本ある。脊椎を貫くスシュムナーを中心に、体の右半身から脊椎に絡みつ়ピンガラ（太陽のナーディー）と左半身から絡みつ়イーダ（月のナーディー）であり、太陽と月に象徴されるように、右が陽、左が陰である。左右のナーディーは、アジナ・チャクラから伸びている。これは、人体としては脊椎を中心とした中枢神経と自律神経を示しているが、アダム・カドモンを正面に向けた時の、三柱の位置に相当する。そして、3本の

ナーディーの交差点にチャクラが存在し、「生命の樹」に於ける三柱が1本に統合された時のセフィロトの状態を示している。

つまりチャクラとは、人体のすべてが「生命の樹」で成り立っていることを象徴している。あるいは逆に、人体の構造が大宇宙に通じる構造であることから、神界に通じる奥義を「生命の樹」として象徴したとも考えられる。

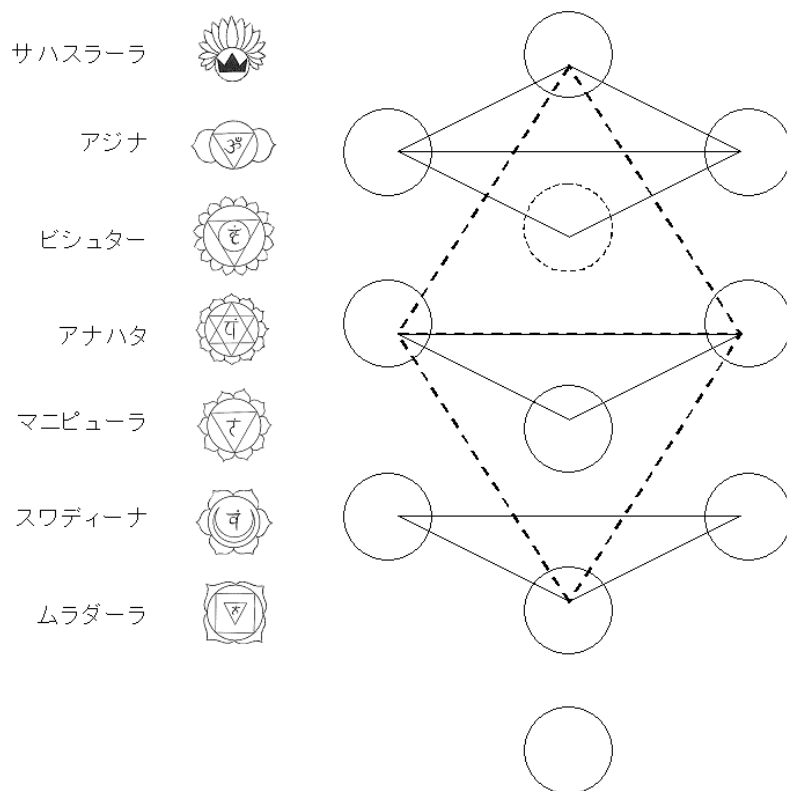
(2) チャクラの本質

このように、チャクラは「生命の樹」に於けるセフィロトを統合したものであるから、これまでに見てきたような各セフィラの性質と少々異なる。

チャクラは 3 本のナーディーの交差点にあるため、締め付けられた状態になっている。ヨーガによってチャクラが覚醒すると、開花した蓮華として象徴される。各チャクラの蓮華の花弁の数と色は、次のようになっている。

- ・サハスラーラ：1000 枚・光、アジナ：2 枚・白、ビシュター：16 枚・薄紫、アナハタ：12 枚・金、マニピューラ：10 枚・青、スワディーナ：6 枚・朱、ムラダーラ：4 枚・赤。

花弁の数や図形には、様々な意味が込められており、いろいろな解釈がある。ここでは、飛鳥氏が紹介している“アレクサンドリアのフィロン”が使ったゲマトリアを主に紹介する。



・ムラダーラ

花弁は 4 枚。4 はメルカバの象徴であり、完全数 10 の潜在的な状態である。それは、 $1+2+3+4=10$ となるからである。すなわち、「生命の樹」に於ける 10 個のセフィロトを上昇していく最初のセフィラということを暗示していると同時に、眠れるクンダリーニである。

インダスでのメルカバーは、具体的には次のようになる。ブラフマーはヴィシュヌの臍から誕生したので、ブラフマーの玉座はヴィシュヌであり、ヴィシュヌは多くの人間の化身を持つから、ブラフマーの玉座は人間と見なせる。ヴィシュヌはガルダに乗って天空を駆け巡るが、ガルダの頭と嘴、翼、爪、足は鷲であるから、ヴィシュヌの玉座は鷲である。シヴァの乗り物はナンディンという雄の聖牛だから、シヴァの玉座は牡牛である。更に、ドゥルガーがヴィシュヌの口とシヴァの第 3 の目から発せられた光から生まれた、という説をとれば、ドゥルガーの乗り物は獅子であるから、ヴィシュヌとシヴァの共通の玉座は獅子である。つまり、三神一体により人間、鷲、牡牛、獅子が玉座として登場し、メルカバーが完成する。

四角形はメルカバーでマハットと五大に対応し、逆三角形はイエソドを頂点とする下層世界の存在を象徴している。

・スワディーナ

花卉は 6 枚。 $6=3+3$ で、3 は三角形である。三角形は上向きで男性原理(陽)、下向きで女性原理(陰)を表すから、6 はこれらの結合で陰陽の合一を象徴する。また、マルクトから上昇した場合、ここから慈悲の柱と峻厳の柱に分岐する。それぞれの柱には 3 個ずつのセフィロトがあるから、それも象徴している。三日月はマハットと五大に対応する。

・マニピューラ

花卉は 10 枚。10 は「生命の樹」に於ける 10 個のセフィロトの数である。これと対応するセフィラはティファレトであるから、逆三角形はティファレトを頂点とする中高世界を象徴し、マハットと五大にも対応している。

・アナハタ

花卉は 12 枚。12 は天球の星座、月数、アダム・カドモンの臓器数(心臓、2 個の肺、2 個の腎臓、肝臓、胆のう、脾臓、腸、食道、胃、膀胱)などを象徴しているが、大元は王位継承順位のあるシュメールの「神々」の数であると同時に、ニビルを含めた太陽系の天体の数である。勿論、十二支族、12 人の使徒の予型でもある。

合体三角形は、慈悲の柱と峻厳の柱の合一＝陰陽の合一を示す六芒星であり、両柱のセフィロトの合計数でもある。六芒星の見方はいろいろ可能であるが、アナハタはティファレトよりも至高世界側にある。そのため、ケセドとゲブラーを底辺とし、ケテルを頂点とする至高世界への三角形と、イエソドを頂点とする中高から下層世界へ至る逆三角形の合一と見なすと、マルクトを除いた微細身体に対応する。

・ビシュター

花卉は 16 枚。微細身体にマルクト(足下)を加えると、立ち上がった時の完全な人体となり、中心には全部で 8 個のチャクラ(セフィロト)がある。男女それぞれ 8 個で、陰陽の合一で 16 となる。また、十六弁八重表菊紋のように、

“復活、再生”を象徴する。他に、 $16=8+8$ で、人体の立体的表現である正八面体が 2 個＝男女の合一＝陰陽の合一を象徴する、という説もある。これは、おそらく人体をプラトン立体に喩えた場合の考えに由来するものであろう。プラトン立体とは、その表面を囲む全ての面が同じ形の正多角形で、各頂点への辺と面の繋がり方も全く同じになっている三次元図形のことであり、正三角形 4 枚の正四面体、8 枚の正八面体、20 枚の正二十面体、そして正四角形 6 枚の正六面体、正五角形 12 枚の正十二面体である。8 個のチャクラを頂点とした場合に対応するのは、正八面体である。

また、 $16=4\times 4$ である。4 はメルカバーの象徴であるが、エゼキエル書によると、メルカバーを構成する 4 つの獣には、それぞれ 4 つの顔があったという。そうすると、顔の数は全部で 16 個となる。ビシュターは隠されたダウトに相当し、ここから先（上）が神界であるから、ビシュターは神界への門であり、絶対神の玉座メルカバーが位置する。

ビシュターは隠された知識であるから、逆三角形は神の降下（陰）と人間の知識を試すことを意味する。小円は、至高世界への限られた通路を示す。

他に、正八面体の元ネタには、次のようなものも考えられる。

“人体をプラトン図形で表すと、正四面体が上下に合わされた形となり、星型二重四面体と言う。そして、チャクラを活性化し、この星型二重正四面体のフィールドが回転した状態を Markaba(マカバ)と言う。これは、現在のリアリティーに於いて、他とは比べるものが無いほど役に立つ物となる。マカバは高次元の意識と結び付けてくれ、無限の可能性を秘めた記憶を回復させてくれる。そして、次元移動も可能とする乗り物の役目までも果たしてくれる。このマカバを回転させることにより、バランスの取れた個人の内外的な世界を形成することが出来るわけである。マカバを回転させるには、その本人の意識レベルがとても重要である。”

星型二重四面体は正八面体ではないが、“神聖なるプラトン立体”にこじつけている。フィールド、リアリティー、高次元、次元移動、意識レベル、などという単語から、チャネリング由来であることは明白である。ドランヴァロ・メルキゼデクやプレアデスとのチャネリングである。

マカバ=Markaba=メルカバーのことであり、メルカバーとチャクラの解釈を完全に誤っている。

・アジナ

花卉は 2 枚。 $2=1+1$ であり、陰と陽の合一そのものである。また、ケテルから降下すると、ケテルからコクマーとビナーの 2 つのセフィロトが分離していることである。逆三角形は、ダウトを頂点としてコクマーとビナーを底辺とするから、ビシュターと同様に至高世界からの神の降下を示す。

また、このチャクラこそが、“第 3 の目”であり、開くと千里眼になると言われている。

・サハスラーラ

花卉は 1000 枚。1000=10×10×10 で完全数 10 の 3 乗で三神が「生命の樹」に於いて一体となることを示す。

三峰は 3 つの山=三神を表すと同時に、ケテル、コクマー、ビナーで形成される上向き三角形を示し、アジナの逆三角形と合わせた陰陽の合一を示す。また、サハスラーラに相当するケテルは言語的に“王冠”を意味するので、三峰の形は王冠の形となっている。

ここまで見てくると、究極的なタントラのシンボルは、陰陽の合一を象徴した六芒星=ダビデの星であることは、自明であろう。

チャクラが本来意味するものとは、このようなことなのである。よって、真の解脱者は肉体的修行を行わず、性愛に溺れず、薬物も使用しない賢者のことである。なお、体の負担にならない程度にヨーガを行うことにより、体を柔軟にして呼吸を整えておくことは、肉体的にも精神的にも悪くないことなので、ハタ・ヨーガは容認されているのである。しかし、肉体のヨーガでは、決して“真の悟りを開く”ことはできない。

なお、太陽神スーリヤが祀られているスーリヤ寺院などの基壇に彫られている車輪には、8 本のスポークが伸びているが、これは 8 本のパスが集まっているティファレットを象徴しており、至高世界を示す日輪へと通じる。よって、このような車輪を“天の雲の車輪=ケルビム”と言う。この原型は、八角形で象徴されるニビルであり、救世主の象徴でもある。

スーリヤは 7 頭の馬が引く 16 個の車輪が付いた戦車に乗って飛翔するという。7 はメノラーとチャクラの数で「生命の樹」の象徴である。16 はエゼキエル書に登場するメルカバーの顔の数であると同時に、4 つの方向に移動できる車輪を内包した車輪が 4 つあるという、メルカバーの車輪の数でもある。よって、スーリヤの戦車とは、エゼキエル書に登場するメルカバーそのものでもある。

チベット密教の無情瑜伽タントラは暗黒の性愛に溺れているし、山伏や禅は無意味な修行である。いずれも、タントラの解釈を誤り、道を踏み外した産物である。すべての人が修行に走ったら、世の中はどうなるのか。坊主どもは、人にはそれぞれの役割があると説くが、そこには自分たちこそ選ばれた人間であるという自負心が隠されている。自分たちだけが修行し、救われれば良いのである。日本に於いても、坊主どもが行っていた無情瑜伽タントラの 1 つに少年愛=同性愛がある。それは稚児である。稚児のイメージは、儀式のために可愛く着飾った子供たちである。しかし、元はそうではない。稚児にはいろいろな種類があるが、頭を剃髪しない稚児がそれに相当する。坊主どもは、目を付けた稚児に、ある時期になると稚児灌頂（かんじょう）を授けた。そして、稚児を観世音菩薩の化身と見なして交わり、自分たちの性的なけ口の道具としたのである。灌頂を受けた稚児は“～丸”という名が付けられた。稚児の上限は 17～19 歳ぐらいまでであり、稚児としての生活は 4～5 年ほどのものであった。

このように見てくると、仏教の教えや菩薩、観音などの概念が、如何にいい

加減で誤ったものであるのか、よく解るだろう。信仰したところで、救いなど、あり得ないのである。そもそも現在の仏教など、仏像や位牌、お題目などを有り難がる偶像崇拜に他ならない。このような宗教により葬式をされたところで、浮かばれることはない。

また、神道系では真光（まひかり）などという“神の光を人体に入れる”行為が成されているものがかなりある。これも、プラーナを誤解したものに他ならない。日本には天台系・真言系など様々な密教思想が入り込んでいるが、神道のカッパーラにより真相は秘守されている。しかし、神界の奥義に近づこうとしたものの、理解できずに墜ちていった者が数知れずいる。そのような者たちによって、このような誤解が広められていったのである。この系統の新興神道は、明治の出口なお・王仁三郎を起源とし（大本教）、岡本天明（ひかり教会）から派生したものである。岡本は日本神界からの声を自動書記により記録し、日月（ひつく、ひふみ）神示として残した。日本神界などというのも、ここまでのことを理解していれば、あり得ないということは明白である。霊能などというものには、くれぐれも騙されないようにすることである。

6：ラーマヤナ、マハーバーラタと古代核戦争

インドの二大叙事詩「ラーマヤナ」「マハーバーラタ」は世界的に有名である。ラーマヤナの方が古く、シュローカと呼ばれる 16 音節 2 行（あるいは 8 音節 4 行）から成り、その数は 2400 にも及ぶ。BC2 世紀頃、詩人アーディ・カヴィによって編纂されたものが元である。ラーマヤナとは“ラーマ王伝”という意味である。ラーマヤナは、英雄ラーマが妻シータを悪玉ラーヴァナから取り返す物語である。舞台は南インドで、現在のセイロン島と見なされている。主人公ラーマはコーサラ国の王子である。

マハーバーラタの内容は戦争である。BC10 世紀頃の北インドを舞台とした壮絶な戦いである。主人公は、クル族の王子アルジュナである。彼が同族の戦いに躊躇するが、英雄神クリシュナが現れ、進むべき道を示すバガヴァッド・ギーターの場面がよく知られている。また、英雄アスワタマンが空飛ぶ戦車ヴィマナで敵と戦う場面が有名であり、BC10 世紀頃の北インドでの出来事を記したものとされている。マハーバーラタは聖仙ヴィヤーサによって編纂されたと言い、AD4 世紀初頭に成立した。ラーマヤナの内容を知っていることを前提とするが、その量はラーマヤナの 4 倍以上にもなる。バーラタとは、インド人が自らの民族を指す呼称である。マハーバーラタとは“偉大なるバーラタ族”という意味である。

しかし、そこには現在の核兵器を思わせるような、極めて写実的かつ具体的な兵器が数多く登場し、あたかも実際に目にしたような描写である。つまり、“主エンキの御言葉”に記されていたように、第 3 の地域も傷ついたのでから、メソポタミアだけではなく、インダス一帯でも核兵器が炸裂したことを裏付けることとなる。そこで、物語の概略を紹介し、これらの物語をシュメールとカッパーラの観点から見直す。

(1) ラーマーヤナ

ある時、コーサラ国の都アヨーディヤーの名君ダシャラタは世継ぎを願い、祈りを捧げた。その頃、地上は流血を好む魔神ラーヴァナがのさばっていた。このような状況を「神々」は憂い、魔神を退治して欲しいとヴィシュヌに懇願した。その願いを聞き入れたヴィシュヌは、第 1 王妃スミトラからラーマとして誕生した。やがて、成長したラーマの前に、聖仙ヴィシュヴァーミトラが現れた。ラーマの優れた武術を見込んで、魔神退治をお願いしに来たのである。ラーマは承諾し、見事に魔神を退治した。

その後、ラーマは旅を続け、ヴィデーハ国のジャナカ王の宮廷に到着した。そこで、王の美しい娘シータと出会い、彼女を娶った。しかし、シータには秘密があった。彼女はジャナカ王の娘ではなく、大地母神ブーデーヴィーの娘だったのである。畑に鋤を入れた時、大地から誕生した女神の化身である。

ラーマがシータと共に祖国へ戻ると、第 1 王子として迎え入れられた。年長いた王はラーマに王位を譲ろうとしたが、継母カイケーイーの策略によって阻まれ、国外追放されてしまった。再び旅に出たラーマだが、こともあろうか、魔神ラーヴァナの妹シュールパナカーに気に入られてしまった。ラーマはシータのことを想い、当然拒絶した。怒ったシュールパナカーはシータを殺そうとしたが、ラーマの従兄弟で幼馴染のラクシュマナにより、耳と鼻を切り落とされてしまった。彼女は悲鳴を上げて退散し、兄である魔神に事の次第を話し、仇を打ってくれるよう頼んだ。魔神は空飛ぶ戦車プシュパカに乗り、ラーマたちを襲撃し、シータを略奪した。

ラーマはシータを奪回すべく、立ち上がった。盟友ラクシュマナと猿王ハヌマーンを従え、シータの行く先を突き止め、攻撃した。しかし、魔神の息子で魔術師のインドラジッドにより、ラクシュマナは瀕死の重症を負ってしまった。それでも、聖仙ヴィシュヴァーミトラがラーマ王子に与えた武器ブラマダッタにより、何とか魔神を倒すことができた。

シータを無事に救い出したものの、ラーマはシータの貞節を疑ってしまった。身の潔白を証明するために、シータは燃える火の中に身を投げた。あわや、というところで、火の神アグニによってシータは助けられた。これにより、ラーマはシータの潔白を信じ、永遠の愛を誓い合った。こうして、2 人はコーサラ国の王と王妃として、末永く統治していった。

最終章では、シータは大地母神によって大地へ帰り、ラーマも 2 人の息子に王国を委ねると、天界へと帰っていった。この時、ラーマはヴィシュヌ、シータはラクシュミーへと回帰した。

(2) マハーバーラタ

バーラタ王の子孫で、クル族のシャーンタヌという王は、ガンジス川の女神ガンガーに恋をし、求婚した。ガンガーは、自分がどんなことをしてもそれを止めたり、訳を聞いたりしなければ、という条件で承諾した。ガンガーはシャーンタヌとの間に次々に 7 人の子を生んだが、生み落とすや否や皆、殺してし

まった。シャーンタヌは約束に縛られて、ガンガーのなすがままだったが、8番目の子が生まれた時には耐え切れず、殺害を食い止めた。王の約束違反により、ガンガーはシャーンタヌの下を去った。この8番目の子がデーヴァヴラタ、後のビーシュマである。（クリシュナの話そのものである。ビーシュマはヴィシュヌと同じである。）

ガンガーが去って数年後、シャーンタヌ王は漁師の娘サティヤヴァティーに一目惚れして求婚したが、サティヤヴァティーの父親に、私の娘の子が王位を継承できるなら、と条件をつけられ、苦悩した。成長したデーヴァヴラタは文武両道に秀で、理想的な王位継承者と期待していたからである。父の悩みを知ったデーヴァヴラタは、自らの王位継承権を放棄し、王国の将来に禍根を残さぬため、生涯の不婚を誓う。この困難な誓いの後、彼はビーシュマ（恐るべき者）という名で呼ばれるようになる。こうして、シャーンタヌはサティヤヴァティーを妻とし、2人の間には2人の王子が生まれた。

間もなく、シャーンタヌ王は死去した。ビーシュマの、父と王国への献身も空しく、シャーンタヌのこの2人の王子も、共に後継ぎを残すことなく夭折した。サティヤヴァティーはビーシュマに誓いを放棄し、王となり、王国に後継ぎを与えるよう懇願するが、ビーシュマはこれを受け入れなかった。そこで、サティヤヴァティーがシャーンタヌと結婚する前に、聖仙パーラーパーヤナとの間にできた子ヴァイパーヤナを宮廷に招き、夭折した王子の未亡人と結婚させた。これにより、ドリタラーシュトラ、パーンドゥの2人の王子が誕生した。

兄のドリタラーシュトラは盲目だったため、王位は継承しなかったが、100人の王子と1人の王女に恵まれた。王位を継承したパーンドゥは5人の王子（ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァ）を得たが、夭折した。その子たちはいずれも若すぎたので、ドリタラーシュトラが王として即位し、パーンドゥの5人の息子たちを引き取った。5人の王子たちは、いずれも100人王子よりも優れており、誰もが認める場所であった。そのため、100人王子は5人と反目し、対立し合うようになった。ついに、100人王子の陰謀により、5人の王子は追放されてしまった。

追放された5人の王子はバラモン僧に姿を変え、流浪の旅に出た。やがてパンチャーラ国に着いたところ、王女ドラウパディーの婿選びが行われていた。そこで、彼らも候補として挑戦し、三男アルジュナが結婚することとなった。と同時に、パンチャーラ国の習慣で、他の4人もまた、ドラウパディーの夫となった。こうして栄誉を勝ち取った5人王子は、故郷へ戻った。ドリタラーシュトラ王は国を二分して、一方を彼らに与えた。

しかし、100人王子たちは面白くない。またしても彼らは陰謀をめぐらし、5人王子を失脚させ、国外へ追放した。13年間、誰にも正体を知らなければ帰国しても良い、という約束をして。5王子とドラウパディーはマツヤ国のヴィラータ王の宮廷で家来や召使いとして働き、追放の13年をどうにか乗り切った。ヴィラータ王には彼らの正体を明かし、帰国した。そして、100人王子の長男ド

ウルヨーダナに領土の返還を要求したが、彼はこれを拒否したので、両陣営の対決は避けられないものとなった。

5王子には十分な物資や兵士が無かったので、アルジュナがドヴァーラカー国のクリシュナ王の下へ、戦争の援助をしてくれるよう頼みに行った。しかし、そこには100人王子の長男ドゥルヨーダナの姿もあった。彼もまた、援軍を要請しに来ていたのである。そこで、クリシュナは提案した。クリシュナ本人とその配下の軍、どちらかを援軍として差し出すから、好きな方を選ぶが良い、と。ドゥルヨーダナは軍、アルジュナはクリシュナを選んだ。

そして決戦の日、ハースティナプラ近郊クルクシェートラの地（クル平原）に、両陣営の大群が集結した。（ハルマゲドンの原型。）まさに大戦が始まろうとする時、5王子最高の戦士アルジュナは、突如戦意を喪失した。敵方に、恩ある人々の姿を見かけたからである。5王子と100人王子共通の大伯父ビーシュマ、同じく両者共通の武術の師ドローナなどである。この2人は、心はむしろ5王子側にありながら、誓いに縛られて100人王子側に立って戦わなければならなくなっていた。アルジュナの御者を務めていたクリシュナは、アルジュナに戦士の義務などを説き、戦意を回復させた。

いよいよ戦いは始まり、死闘が続いた。轟音が鳴り響き、大地が震え、血みどろの戦いが18日間続いた。あまりにももの壮絶さに、クル族が全滅してしまうと危惧したビーシュマは、自らの死を持って戦いを止めさせようとした。彼は、両陣営の大叔父である。しかし、100人王子の長男ドゥルヨーダナは聞き入れず、戦いは激しさを増していった。そして、ついに最終兵器を持ち出してきた。英雄アスワタマンは空飛ぶ戦車ヴィマナに乗って、空から敵に攻撃した。兵士は散り散りになり、最終兵器アグネアを打ち込んだ。その威力は凄まじく、炸裂した瞬間、灼熱の炎によって、一瞬にして全軍が消滅してしまった。これにより、100人王子は全滅し、5王子とクリシュナが勝利して、戦いは終わった。

ドリタラーシュトラと妻は森で隠居生活を始め、5王子の母も2人に従ったが、山火事に巻き込まれてこの世を去った。5王子は「神々」が住まうヒマラヤへ旅立ち、この世の役目を終えて、天界へ回帰した。

(3) 武器に関する記述

マハーバーラタで使用された武器はアグネアと言い、「神々」ですら抵抗できない究極兵器とされている。その部分の記述はこうである。

“すべての敵に狙いを付けた恐怖の火の矢は、ついに天空に放たれた。煙を伴わない火を噴く矢である。敵は恐怖に駆られ、四方に逃げようとしたが間に合わず、ついにアグネアは敵を捉えて落下し始めた。そして、炸裂した瞬間、太陽を1万個集めたほどの未曾有の光が敵軍を呑み込み、煙と火が絡み合った、光り輝く柱がそそり立った。そして、凄まじい風が巻き起こってすべての敵を襲った。太陽が揺れ動く中を鳥が逃げまどいが、生き残ることはできない。戦場は巨大な炎に包まれ、象たちは焼け焦げ、必死に逃げ道を探すが見つからない。異常な熱は大地を舐め尽くし、業火は血の雨となって降り注ぎ、すべての

敵を木々のように焼き滅ぼした。そして、濃い闇が太陽を覆い、恐ろしい血のような暗雲が立ち上り、天を覆った。…”

“地に残されたのは、焼け焦げた死体と残骸だけである。鳥は白くなって転がっている。木々は灰になり、器は変形し、溶けてしまっている。食料は毒で食べられず、死体の髪と爪は抜け落ち、遺体は損傷が激しく、男女の見分けはつかない。運良く炉心から逃げ延びた兵士は、水で装備を洗った。…”

あたかも見てきたような、極めて写実的な描写である。この記述を現代的に解釈すると、まさに原爆や水爆の爆発そのものである。

次にラーマヤナでは、ラーマ王子がシータを魔神から取り返す部分である。戦いに使用された天界の武器ブラマダッタは 1 つではなく、兵器群である。これらは現代兵器に匹敵するものであり、() 内は対応すると思われる現代兵器である。

- ・アラクシャ (高速ロケット)、ヴァルシャナ (気象兵器)、ショーシャナ (気象兵器)、ソウマンヴァ (神経ガス)、シャブダヴェディトヴァ (音波探知ロケット)、カマルチ (巡航ミサイル)、ムルチナダーナ (感覚遮断兵器)、パイシャ・アストラ (地対地ミサイル)、トヴァシュトラ・アストラ (創造神の兵器、核兵器)、サムヴァルタ (時を左右する兵器)。

中でも、創造神の兵器であるトヴァシュトラ・アストラは金属を溶かすほどの超高熱と凄まじい光で、30 万もの兵士を焼き殺すとある。そのような兵器は、現代に於いても、核兵器以外にあり得ない。アストラには 2 種類あり、1 つはナラ・アストラで、もう 1 つはナリカ・アストラである。

ナラ・アストラは巨大な金属の筒に覆われ、封印された最終兵器であり、軍人が毎日点検しなければならないとされている。ナリカ・アストラは、兵士が携帯する先の割れた小型の円筒型タイプと、車輪で移動する大型タイプがある。さしずめ、ナラ・アストラは核弾頭であり、ナリカ・アストラは移動式小型核である。

ラーマ王子はこれらの兵器により、勝利を収めた。その様子をラーマヤナでは、“河川を変え、星を天から落とし、大地を海中から持ち上げ、あらゆる生物を殺した”とある。

アストラはマハーバーラタにも登場しており、人類最終兵器とでも言うべきものがブラフマー・アストラである。創造神の名を冠しているように、これは天界の兵器であり、ラーマヤナのトヴァシュトラ・アストラに相当するものだろう。また、アグネアと同じものであると思われる。雷神インドラがアルジュナに与える時、人間に対しては決して使用してはならないとされた、禁断の兵器である。この場面は、エンリルがニヌルタに注意を促した場面そのものである。しかし、卑劣な攻撃に怒ったアルジュナは、敵が放ったブラシマシルを迎撃するため、ついにブラフマー・アストラを放った。両方の兵器が炸裂した瞬間、天空に巨大な火の玉が出現し、全世界が閃光に巻き込まれ、轟音が響き渡り、無数の流星が地上に降り注いだ。と同時に爆風が吹き荒れ、世界は破滅

寸前となった。しかし、英雄神クリシュナが立ち上がり、灼熱の爆風を消滅させ、人類は救われたのである。そうすると、クリシュナは核戦争後に主神となったマルドゥクのようにも思える。

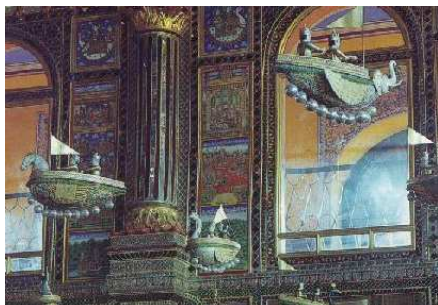
この話はいずれも骨子に於いて、主人公が策略により追放されて放浪した後、戦いに勝利して話は終わる。＜神々の真相 1＞に似たような話があるので、内容を照らし合わせる。

- ・セトの策略によりオシリスを殺されたイシスは、子ホルスを連れて逃げた。しかし、ホルスまで毒殺されたが、トート神の魔術によって復活した。成長したホルスはセトと戦い、ホルスはオシリスの玉座に返り咲いた。（エジプト神話。）
- ・サツとシャムガズの策略によりアサルを殺されたアスタは、子ホロンを連れて逃げた。ホロンは大叔父ギビルに引き取られ、復讐のために必要なことを指導された。時が満ちると、サツがホロンに挑戦状を叩きつけた。2人の戦いは、ホロンが負けそうになったが、ニンギシュジッタの援護により“猛火の柱”を打ち込み、ホロンは勝利した。（エジプト神話の真相。）
- ・ドゥムジをマルドゥクの策略によって失ったイナンナは、マルドゥクに戦いを挑んだ。ニヌルタが援護し、“嵐の鳥（空中戦闘機）”から敵の要塞に破滅的なビームを照射した。イシュクルは、空から灼熱の稲妻と粉碎する嵐で攻撃した。ニヌルタは居住地に毒入りミサイルを雨嵐のように降らせた。彼の“引き裂く武器”は、人々の感覚を奪い、川の水を運ぶ運河は血に染まった。イシュクルの光輝が、夜の闇を燃え立つ昼に変えた。そして、マルドゥクはとうとう、エクルの中に逃げ込んだ。ギビルは目に見えないシールドを張り巡らし、ネルガルはすべてお見通しの目を空の方へ上げた。向きをつけた角によって、“光輝の武器”でイナンナは隠れ家を攻撃した。祖父を守ろうとしたホロンは、その光輝で右目を負傷した。最終的に、マルドゥクはピラミッドの中に生きたまま葬られ、ニンギシュジッタによって救い出された後、追放された。（エジプト神話の真相。）
- ・エンリルー族との戦いに敗れたマルドゥクが追放されて放浪した後、全アヌンナキに君臨する神であると宣言したことが原因となり、両者の間に核戦争が勃発した。ニヌルタとネルガルが、マルドゥクに煽動された5人の王が支配する5つの都市を核攻撃した。その“死の灰”はマルドゥクが支配権を主張した土地バビリを除くシュメール全土を覆い、最終的にマルドゥクが主神として君臨した。

どうやら、ラーマーヤナとマハーバーラタはこれらの話が基となって創られたようである。ラーマーヤナはエジプト神話と真相に、マハーバーラタは核戦争に似ているが、必ずしも完全一致しているわけではなく、部分的に混合して

いる。そうすると、大筋に於いてアヌンナキの戦いについて描写されているものの、改竄されていることが解る。

(4) ヴィマナ



マハーバーラタには、英雄アスワタマンが空飛ぶ戦車ヴィマナで敵と戦う物語が記されている。ラジャスタン州のジャイナ教寺院には、その模型が展示されている。

ヴィマナとは、ヴィ＝“飛翔、飛行”、マナ＝“乗り物、住居”という意味で、飛行機である。ヴィマナについても、空想の産物と言うには極めて写実的な描写であり、実際に見てきたかの

ように描かれている。ヴィマナには、英雄アスワタマンが乗っていただけではなく、ほとんどの「神々」がこれに乗って戦っている。例えば、ラーマヤナに登場するプシュパカ・ヴィマナ（ヒマラヤに住むクベーラ神のものは、黄金の柱にエメラルドの扉を持ち、どこへでも飛ぶことができた。マハーバーラタのサウバブラ・ヴィマナは、魔神シャルバが乗って雷や槍を地上に叩きつけ、クリシュナの都を攻撃している。

飛行機という意味では、最古の古典「リグ・ヴェーダ」に登場する特殊な“ラタ”がある。これは、今で言う山車のようなもので、移動式神殿とも言うべきものである。形状は三角形で三重構造をしており、パイロットは3人で、他に8人まで収容でき、インドラが最も操縦が得意であるという。機体は金属製、燃料は特殊な液体で、車輪は飛行時に収容され、風よりも速く飛ぶという。

このようなヴィマナの実在性を裏づける有力な証拠がある。BC10 世紀頃、古代技術に関する資料を聖仙バラドヴァージャが編纂し、「ヤントラ・サルヴァスバ」にまとめた。この中のヴィマナに関する部分だけを、BC8 世紀頃までに、聖師ボダーナンド・ヤティが抽出して解説を加えたものが「ヴィマニカ・シャストラ」である。この写本は、ボンベイのブローダ王室サンスクリット図書館で、1918 年に発見された。

この文献には、詳細な機体解説と操縦方法が詳しく載っており、ヴィマナの種類は大きく分けて4種類で、更に細かく分類すると25種類にも達するという。どれほど具体的なのか、例を挙げる。（「ヴィマニカ・シャストラ」英訳引用。）

・ヴィマナの定義

飛行術の専門家によれば、空中を国から国へ、島から島へ、世界から世界へ飛行して移動できる機械をヴィマナと言う。

パイロットが精通していなければならない、ヴィマナの機能に関する32の秘密がある。これらは、機体の構造、離着陸と飛行の性能、操縦の方法の3種類に大別され、具体的には、どの装置をどう使い、どの開閉器を回せば、今日で言うところの写真撮影、レーダー探知、高熱放射、有毒ガス、気象センサー、ジグザグ飛行、翼の展開と収縮、敵機内盗聴、敵機内透視、幻影投射、煙幕、

カムフラージュ、太陽光線利用などの能力を発揮できるかが説明されている。

・ヴィマナの能力

- ①空気のダンダバウトラほか 7 つの力を引き寄せ、太陽光線を加えてヴィマナのジグザグ中心部に通し、ダイヤルを回すと、ヴィマナは蛇のようにジグザグ航行する。(機体運動能力)
- ②5 種類の力を操作して、ヴィマナの周囲に光輪を発生させ、さらに太陽光線を引き寄せてそれと接触させると、その光線がヴィマナを安全な航路に沿って高速移動させることができる。(高速自動航法)
- ③「ソウダーミニー・カラー (電子工学書)」の説明にもあるように、ヴィマナ搭載の音響捕捉装置によって、飛行中の敵機内の会話や物音を聴くことができる。(敵機内盗聴)
- ④ヴィマナ前方のダイヤルを回せば、ディシャーンパティ装置が敵機の接近してくる方角を示してくれる。(レーダー)
- ⑤敵機が大挙して迫ってきて撃墜されそうになった時、ヴィシュワナーラナーラ、すなわち機内中央に位置する管中のジュワリニーの力に点火し、2 個の車輪のダイヤルを回して温度を 87℃にまで高めれば、燃えるジュワリニーの力が敵機を包みこんで焼き尽くす。(高熱放射)

・ヴィマナの材質

ヴィマナは金属構造であることが強調されており、ヴィマナには熱吸収力の強い特別の金属しか適さないと述べられている。

“ソマカ、スーンダーリカ、ムールトヴィカの 3 種類の金属がある。これらを混合すると、16 種類の熱吸収性金属が製造される。これらの金属の採鉱と溶解については、407 種のるつぽが必要である。”

・ヴィマナの特殊装備

ヴィマナに設置しなければならない“7 種の鏡またはレンズ”の項へと続く。これらの鏡やレンズは、純粹に遠方や周囲を観察するためのものから、攻撃・防御兵器にまで多岐に渡る。例えば“ピンジュラーの鏡”は、一種の視覚保護シールドを作り出す。

“太陽光線のマイナス干渉作用をピンジュラーと呼ぶ。それは、パイロットの黒い瞳に有害な効果を及ぼす。それをピンジュラーの鏡で遮ることにより、邪悪な光線からパイロットの眼球を防護する。”

“ルードリーと太陽光線を混合すると、マーリカーと呼ばれる邪悪な力が生成され、それを太陽電気で放射すると、敵機を破壊する。”(あらゆるものを溶かす光線を投射する“ルードリー・タルパナ”という鏡もしくはレンズについて

の記述。)

・ ヴィマナの動力源

ヴィマナには 7 種類の力が必要で、それは 7 つの発動機によって作り出される。7 種の力とは、マー、ルアー、ヤー、ラー、サー、ヴァー、ナーである。マーはウドガマーで上昇する力、ルアーはパンジャラーで下降する力、ヤーは太陽熱を吸収する力、ラーは太陽の 12 の力を合わせた力、サーは外の力を吸収する力、ヴァーはクンティニーの力、ナーは主要な根本の力である。これらの力を生み出す発動機は導線、バネ、回転輪を使ってヴィマナの機内に設置される。基本的な推進原理は、電磁気と化学反応の組み合わせと思われる。

“こうしてスーリヤ（太陽）・マニは中央電極の基部の容器内に収められることになる。この時、導線は中心からあらゆる方向に出ていなければならない。それから、三重輪が回転運動を始めると、ガラスケース内の 2 個のガラス球が、次第に速度を増しつつ互いに擦り合い、結果として生じる摩擦が 100℃の力を発生させる。その力が導線を通してサンジャニカ・マニへ運ばれる。そこに存在する力と混合すると、その力は流れ出て、再び導線を通してスーリヤ・マニへ伝達される。その力と接触した瞬間、その力は 5 つの流れに分裂する。”

“5 つの力の流れは、それぞれマニの 1 つと接続される。それぞれのマニ内の力と混合すると、それらの力は新たな 5 つの力を生成する。これらの力は導線を通して酸の容器へと導かれる。その結果生じた流れは、導線を通して大きく口を開けた球形のガラス容器へと導かれる。エーテル力を含んだ太陽の力は、その容器へと導かれなければならない。”

ヴィマナは単に飛行するだけではなく、急発進・急停止、ジグザグ飛行も可能であつたらしいが、このような飛行は慣性の法則に逆らうため、現代の技術でも完成していない。

「ヴィマニカ・シャストラ」の主要な本文は、大部分がこのような極めて写実的に書かれており、本書の末尾近くには、著者バラドヴァージャの言葉が記されている。

“(本書の内容は) 私が古代の著作物を参照しつつ、貧しい能力を振り絞って記述したものである。”

この本は、著者らにとっても既に太古に属していた時代の科学技術を、彼ら自身の時代と社会の制約の中で、精一杯正確に後世へ伝えようと努力した結果なのである。他にも、ヴィシュヌの“円盤”、ルドラの“三叉戟”、アグニの“火器”、インドラの“電火器”“空中網”、スーリヤの“飛行矛”など、インダスの神話には、現代兵器を思わせるものが数多く登場する。

(5) 解釈

A：類似性

前述のように、登場人物や地名を無視すると、二大叙事詩の物語の構造は類似している。口頭伝承により、物語が少しずつ変化したことを考えれば、多少の違いは問題ではない。つまり、成立年代から考えても、両者は同じ現象を描写していると考えられ、あとは場所の違いである。

ラーマヤナの舞台はインダス川からデカン高原と広いが、ラーマ王子の居城があったのはランカである。ランカとは“島”という意味で、現在ではセイロン島と見なされている。対して、マハーバーラタの舞台は、ガンジス川中流域である。

最も古いリグ・ヴェーダには、“インドラの10年戦争”という記述がある。この中で、インドラはヴァジュラを持ち、敵のヴィマナを次々に撃墜した。7つの防壁を破壊し、敵の居城を粉々にし、神酒ソーマを飲み干し、7つの川を開放した。（“イナンナの冥界下り”に似ている。）そして“7つの川”とは、古代インドではインダス川を示している。実際に、インダス川には7つの支流があり、インダス川の上流はガンジス川の上流とも重なっている。ランカとは島であるが、セイロン島と記述されているわけではない。島のような土地、であれば良いのである。そのような視点で見ると、インダス川流域で“島”と呼ばれ続けてきた地が存在する。それが、モヘンジョダロである！戦いの場所がモヘンジョダロであれば、マハーバーラタとラーマヤナは、同じ戦いを描写していると言える。

モヘンジョダロと言えば、ハラッパーと並ぶインダス文明発祥の地であり、現在でも謎に包まれている部分が多い。そして、＜神々の真相1＞でも述べたように、ここは現地の住人が“ガラスになった町”と恐れて近づかない場所であり、テクタイトが800メートル四方をびっしりと覆っている。テクタイトは黒曜石に似たガラスであり、高温（1500℃以上）で溶けた砂や石が急激に冷えてできた鉱物である。テクタイトは隕石衝突で生成したとする説が一般的であり、実際に、恐竜が絶滅した6500万年前に形成された地層（K-T境界層）には、顕微鏡サイズの茶褐色系テクタイトが多く含まれており、巨大隕石の衝突によって蒸発気化した地表の石や砂などが、上空で急冷して固まって降り注いだことを物語っている。

しかし、恐竜を絶滅させるほどの巨大隕石の衝突時でさえ、顕微鏡サイズのテクタイトしか確認できないが、モヘンジョダロのものは肉眼で確認できるほどの大きさであり、色も異なる。肉眼で確認できるほどの大きさならば、恐竜を絶滅させるほどの巨大隕石を上回る超巨大隕石でなければならない。

また、テクタイトは隕石だけではなく、火山活動によっても生成するが、モヘンジョダロ遺跡のあるインダス川流域に於いて、大規模な火山活動の痕跡は確認されていない。

テクタイトは、メソポタミアでも見られた。シナイ半島には、その大きさ故、宇宙からしか観測できない“傷跡”が残されている。その“傷跡”から北に向かって広大な平野が開けているが、地平線上にそそり立つ山々と平野の黒い土

壤が、くっきりとしたコントラストを成している。シナイ半島の表土は白い石灰岩と赤い砂岩で構成されているから、黒い土壌は形成されようがない。この“傷跡”に残る黒い小石がテクタイトである。このテクタイトも、モヘンジョダロのものと同様に、隕石や火山活動によってできたものではないのである。

そして、インダスの二大叙事詩は、シュメールの記述と類似しているものもある。他に、メソポタミア（イラク）のビルス・ニムロド（ボルシッパ）には、ネブガドネザル二世によって改修されたナブ神殿跡があるが、崩れ落ちた大量の煉瓦片が、高熱のために溶けてガラス化している。（ヨーロッパの探検家は、これこそが天の罰により焼け崩れたバベルの塔であると考えた。）

このような風景が見られる他の場所は、唯一、地表で核実験が行われた場所（砂漠）である！そして、トルコのアナトリア高原には、古代の核シェルターを思わせるカップドキア地下都市群がある。

ならば、“主エンキの御言葉”に記されていたように、第3の地域も傷ついたのだから、メソポタミアだけではなく、やはりインダス一帯でも核兵器が炸裂したのである。それが、二大叙事詩によって“記録”されているのである。

B：カッパーラ

では、カッパーラ的にはどうなるのか。登場人物や地名は異なるが、二大叙事詩の構成が同じなのは、1つのカッパーラである。また、ここまでの記述を見ると、かなり写実的であるが、“3”“5”“7”などの象徴的な数字が散りばめられている。例えば、ヴィマナの動力源は7種類で7つのチャクラに相当するから、ヴィマナとは「生命の樹」の奥義を知ることとも解釈できる。しかし、ヴィマナに関する記述があまりにも具体的すぎ、カッパーラを象徴しているだけではないことは明らかである。カッパーラに準じて実際のものを記述した、という印象が強い。

C：飛鳥氏の解釈

両叙事詩の構成的な類似性と、ラーマ王子が人間の形をしたヴィシュヌ、妃シータはラクシュミーであり、ラクシュミー信仰が盛んなのはインド北西部のカシミールであることから、シータをめぐるラーマと魔神との戦いは、カシミール（シータ）をめぐるインド（ヴィシュヌ）とパキスタン（魔神）の戦いを預言したものであると飛鳥氏は主張する。確かに、一般的に神話は必ずしも事実ではないから、時空を超えて、カッパーラによってそのように解釈することは可能である。

しかし、そこには大きな落とし穴がある。聖書の預言では、近い時期に起こることについては、“〇〇人によって滅ぼされる”など、かなり具体的であるのに対し、エゼキエル書に於ける遠い未来の預言、すなわち、神の戦車メルカバの描写などは極めて抽象的・神秘的であり、ヨハネ黙示録はその典型である。そうすると、このような極めて具体的な描写は、実際に起きたことを記述したと考えるのが妥当である。

飛鳥氏は創造論（＊）に立脚しているから、聖書を絶対的なものと見なして

いる。それ故、太古にシュメールの「神々」が人類を創成していたことを認めていないし、まして核戦争があったことなども認めていない。飛鳥氏は、核戦争があったとしたら、その残骸が残されていても良いはずだが、まったく存在しないのは、核戦争など無かった証拠である、と言っている。しかし、核爆発では跡形も無く、何も残らないのは当然だろう。

更に、核兵器を開発できるレベルの科学があったのなら、他にもその証拠があるはずだ、と主張している。インドに残っているそのような証拠としては、デリーの“錆びない鉄柱”がある。飛鳥氏は、所詮鉄の柱に過ぎず、核兵器を開発できる技術が存在した証拠にはならない、と一蹴している。しかし、それは完全な誤りである。

デリーの“錆びない鉄柱”とは、アショーカ王の柱の一種で、デリー市郊外の世界遺産クトゥブ・ミナール内にある、錆びていない鉄柱のことである。99.7%の極めて高純度の鉄で構成され、直径約 44 センチ、高さ約 7 メートル、地下に埋もれている部分は約 2 メートルである。AD415 年に建てられたと言われており、地上部分は 1500 年間以上、錆が内部に進行していない。（しかし、地下部分では腐食が進行しているようである。）

鉄は純度が高いほど錆びないが、99.7%程度の純度ならば、50 年ほどで錆びる。それが、1500 年もの間風雨に晒されながら錆びなかった理由は、ある元素の存在にあるという説が有力である。

インドで産出される鉄鉱石にはリンが比較的多く含まれている。また、インドでは、鉄を精製する際にカシヤ・アウリキュラータというリンを含む植物を加えていた記録があるという。リンを豊富に含んだ鉄を薄い円盤状にして加熱しながら叩くと、鉄の表面はリン酸化合物で覆われる。その円盤を積み重ねて更に叩いて一体化させれば、鉄柱の表面がリン酸化合物で覆われ、錆びにくい鉄柱が完成する。リンには鋼材の強度を低下させる性質もあり、多量に含むと脆くなり成型が困難になることが知られている。5 世紀頃のインドに、リン酸鉄が錆に強いという知識と、リンと鉄の含有量を調整する技術が存在したのであれば、驚くべき事実である。

（<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%81%AE%E9%89%84%E6%9F%B1> 参照。）

現在の鉄は、高炉法によって大量生産される。この鉄は、コークスを熱源として 2000℃以上の高温で作られるが、多くの炭素と不純物を含有する。通常は、二次精錬を行って不純物を除去するが、完全に除去することはできない。そのため、“核兵器を莫大に保有している現在”でも、このような方式で“錆びない鉄柱”を製造することは困難である。

高純度の鉄を作り出す技術は日本に存在する。日本古来の製鉄法“たたら製鉄”である。たたら製鉄は 1500℃以下の低温で行う製鉄法で、熱源には木炭が使用される。たたら製鉄で産出される鉄をケラと言ひ、不純物が極めて少なく、

現代の製鉄技術を駆使しても作り出すことができないレベルである。

たたら製鉄の技術は、弥生時代から日本で独自の発展を遂げた。作り上げた鋼鉄は鉄の純度 99%と極めて高く、ねばり強く強靱で、日本刀や神社仏閣の釘などに使われてきた。特に、日本刀はこの鉄でしか作れないのである。たたらは江戸時代に広く行われていたが、明治 20 年頃にヨーロッパの近代的な製鉄技術が日本に入ると、炉の前で三日三晩の連続操業となるたたら製鉄は非効率で競争に全く太刀打ちできず、大正 12 年（1923 年）にたたらの火は消えてしまった。ところが、戦後、日本刀が美術品として見直され、玉鋼が求められるようになり、昭和 52 年に日本刀を作るための玉鋼作りとして、この技術が復活することになった。何故なら、既に核兵器を莫大に保有できていた当時でさえ、玉鋼に必要とされる高純度の鉄を製造する技術が、世界のどこにも無かったからである。その事業主体は日本美術刀剣保存協会で、日立金属の子会社の安来製作所が事業を始めた。現在は、全国の製鉄所の技術者たちがこぞって取り組んでいる。（<http://www.hitachi-metals.co.jp/tatara/index.htm> 参照。）

製鉄技術はシュメールで大いに発展し、ヒッタイトに受け継がれた。そして、その真髄は、このように日本に受け継がれてきたのである。（残念ながら、インドでは途絶えてしまった。）

つまり、“たかが鉄、されど鉄”であり、核兵器を保有できるレベルの科学技術があっても、“錆びない鉄柱”を製造することはかなり難しいことなのである。飛鳥氏は、この点をまったく理解できていないのか、無視している。

飛鳥氏は、このように核戦争説を否定し、あくまでもカッパラーによる預言説を主張している。そして、古代文明の消滅や“核戦争を思わせるテクタイト”について、得意のヴェリコフスキー理論を持ち出している。BC2000 年頃に、金星が木星の大赤斑から飛び出した。そして、地球をかすめた際に、地球と金星の間で猛烈なプラズマ放電が生じ、古代文明のあった地域は壊滅した、と。そして、その産物がテクタイトである、と。

木星の大赤斑から金星が飛び出したとした場合、まず金星クラスの質量を持った惑星が木星の引力圏から脱出するには、約 10 の 39 乗ジュールのエネルギーが必要である。これは、太陽が 1 年間に放出するエネルギーに匹敵する。

仮に、木星の引力圏を突破できたとする。その時の脱出速度は毎秒 60 キロメートルであり、太陽系の脱出速度は毎秒 63 キロメートルである。つまり、太陽系に留まっていることは、まず不可能である。留まったとしても、太陽系の脱出速度にほぼ等しいから、彗星のように超楕円軌道の公転軌道となるはずである。それ故、金星が地球に接近して内惑星の軌道に落ち着く確率は、ほぼゼロとなる。

故コーネル大学のカール・セーガン氏（世界的惑星科学者）もこのような指摘をしているので、飛鳥氏はセーガン氏に対して罵倒に近いような非難を行っている。NASA の権力に組みする権威主義者で、真実を曲げている科学者である、と。しかし、セーガン氏は著書「コスモス」の中で、“科学は自由な研究によっ

て進歩してきたし、自由な研究のために存在する。どんな奇妙な仮説でも、その長所を考えて見ようというのが科学である”と述べているし、更に、ヴェリコフスキーの研究に圧力を掛けた当時の科学者に対して「ヴェリコフスキー事件の良くない点は、彼の仮説が間違っているとか、確立された事実と反しているというのではなく、科学者と自称する人たちがヴェリコフスキーの研究を抑圧しようとしたことである」とも「科学は自己修正的な仕事であり、仮説が広く受け入れられるためには、確実な証拠をもって真理の厳しい関門を突破しなければならない」とも述べている。つまり、セーガン氏はヴェリコフスキー理論に対して圧力を掛けたり無視したりしているのではないし、まして NASA の権力に組みし、真実を曲げているのでもない。現在の理論に基づけば、ヴェリコフスキーの理論はおかしい、と述べているに過ぎないのである。

(<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/7978/shoutotu.html> 参照。)

また、木星から飛び出した金星が地球をかすめた際に、地球と金星の間に猛烈なプラズマ放電が生じ、古代文明のあった地域が壊滅したのなら、全地球規模でその痕跡が発見されなければならないが、そのような痕跡＝テクタイトは古代文明が存在した特定の場所でしか見られない。

更に、預言説に立脚した飛鳥氏は、ナラ・アストラやナリカ・アストラをプラズマ兵器と見なしている。しかし、プラズマ兵器は核（分裂）兵器ほどの放射能を出さないから、叙事詩に記述されているような放射能汚染は無いはずである。

よって、叙事詩の内容が具体的であり、特に兵器やヴィマナの実際に目にしたと思えるほどの写實的・客觀的な描写から、（二大叙事詩が記述された時代から見て）遠い将来を預言したものではなく、実際に過去に起きたことを、象徴を散りばめてまとめたものであると判断すべきである。つまり、太古のメソポタミアとインダスで、シュメールの「神々」が核兵器を炸裂させたのである。

*創造論

聖書解釈として創造論という考えがある。これは、聖書の記述を絶対的なものと見なし、この宇宙も聖書に記述されているように創造されたという考えに基づく理論である。科学者の中にも、聖書に基づいて進化論などを否定し、聖書は正しい歴史書かつ科学書であると真剣に主張している人たちが存在する。特に多勢を占めるのが米国で、カンザス州のように、ダーウィンの進化論を教えるのであれば、同時に聖書の創造論も教えなければ特定思想の強要であり違法である、と教育委員会の保守派が主張して論争となっている州もある。

(<http://www.asyura2.com/0505/cult2/msg/425.html> 参照。) しかし、これまで見てきたように、聖書はシュメールなどの様々な事象が象徴によってまとめられたものであり、必ずしも真実を表しているわけではない。では、創造論とはどのようなものなのか、例を示す。

“聖書によると、地球は主の御意志によって約 6000 年前に造られた。最初、大

陸は1つにまとまっており、それを超大陸パンゲアと言う。(これは現代科学も同じである。) エノク～ノアの時代までは地球全体が厚い雲に覆われており、太陽と月以外は見えなかった。何故なら、聖書には“ノアの洪水後に初めて虹が地上に現れた”と記述されているからである。主に選ばれたエノクはピラミッドを築き、大洪水の起きる時期を通気孔に位置する星座で預言した。しかし、厚い雲に覆われて星々は見られなかったので、ウリムとトンミムを使い、見えるはずのない星の位置を見ることができたのである。

そして約4500年前(BC2500年頃)に、預言された通り、大洪水が発生した。その原因は、月がロシュの限界を超えて地球に異常接近したことである。それにより、月内部の超高压熱水が地球に降り注ぎ、地球内部からも超高压熱水が噴出し、大洪水となったのである。そして、それまで“人間と共生していた恐竜”も一気に滅びた。土石流のすさまじい圧力で、一気に化石化したのである。また、その衝撃で地球は膨張し、パンゲアは移動して現在の大陸地形となった。砂漠化しているところは洪水が押し寄せた証拠であり、スフィンクスの前面から背面に向かって、水流による巨大な浸食跡があるのも証拠である。

これにより厚い雲も消え去り、地上に太陽光が降り注ぐようになった。主の言われた通り箱舟を造って救われたノアの家族と動植物が、今日の地球の生態系を形成することとなった。”

大筋に於いてこのような感じであり、一部、飛鳥氏の理論も取り混ぜてある。何故なら、飛鳥氏はモルモン教徒であり、モルモン教こそ最も創造論を推し進める団体だからである。特に、“ウリム”と“トンミム”はモルモン教がよく利用する。ウリムとトンミムは、預言者が主から啓示を授かる際に身に付けたものである、と聖書に記載されている。飛鳥氏は、米国のマスコミ規制がかかりにくい日本に住んでいること、漫画家故に絵を使って多くの人に情報を公開できることから、米国の諜報機関NSAの元メンバーから政府極秘ファイルであるMファイルを買ったという。そのファイルには、月から超高压熱水が降り注いだこと、恐竜は約4500年前まで存在していたこと、金星は木星の大赤班から飛び出して形成されたこと、UFO問題の真実やプラズマ兵器等について記載されているという。そして、米国の科学を掌握し、すべてを知るNASAは真実を隠している、と。

しかし、創造論なども合わせて考えると、どうもMファイルというのは、基本的に創造論を主張する人たちの意見に合うように、科学的に見せかけた擬似科学ファイルのように思われる。Mとはおそらく“モルモン”のことだろう。以下、創造論の問題点を指摘する。

・ノアの大洪水までの地球は厚い雲で覆われていたこと

ならば、太古からの光合成を必須とする植物の繁殖は無いはずである。また、厚い雲で覆われるためには、強い太陽光による激しい水蒸気の蒸発や活発な火山活動による水蒸気噴出がなければならないが、そうすると、陸上生物が住む環境として相応しくない。

更に、現在の地球は“大洪水後に膨張したはず”であるから、それ以前は現

在よりも小さかったことになる。小さくて厚い雲で覆われていたのなら、地表に掛かる圧力も大きく、恐竜のような巨大生物は生息できないはずである。

・ピラミッド

ピラミッドは大洪水後、エノクではなく、ニンギシュジッタによって建造された。

・ウリムとトンミム

ゼカリア・シッチン風に解釈すれば、シュメールの「神々」の言葉を聞くための通信装置である。聖書的解釈では、ウリムとトンミムは、祭司のまとう裁きの胸当エポデの中に収められていた小物体であり、祭司が「神」の意志を知るために用いた一種のクジのようなものであったと推定されているが、詳細は不明である。

祭司とレビ人は、決断を必要とする重要な事柄、例えば、戦争することが適切かどうかなどを決定する際、「神」の御名において答えるという責任があった。そのために、彼らはウリムとトンミムと呼ばれる“聖なる石（と言われているもの）”を用いた。裁きの胸当からウリムを取り出したならば“不可”であり、トンミムであれば“可”であった。

ウリムとトンミムによる神託は“可か不可か”を決定する単純な問題の場合に多く用いられた。しかし、ダビデの時代以降はあまり用いられなくなり、預言者による直接的な主の言葉の伝達が盛んになってからは、その傾向は更に著しくなった。そして、バビロン捕囚後には、ウリムとトンミムを身につけた祭司は 1 人もいなくなったのである。だから、ウリムとトンミムは特殊な通信装置や透視装置などではなく、占いに使用するクジのような小道具である。

・ロシュの限界

星と星の間には万有引力が作用しているが、ある限界を超えて 2 つ（あるいはそれ以上）の星が近づくと、構造的に弱い方の星（の一部）が破壊される。これを“ロシュの限界”と言う。地球と月ならば、月の方が破壊されるはずである。しかし月は破壊されず、内部から超高压の熱水が地球に降り注いだという。クレーターはその跡らしい。ならば、月内部に通じるクレーターが多数観測されても良いが、そのようなクレーターは見られず、表面に衝突した痕跡ばかりである。クレーターの真相は<神々の真相 1>で述べたように、ニビルの接近に伴って降り注いだ隕石によるものである。

また、多量の超高压熱水が内部から噴出する前に、地球から引っ張られる潮汐力と内部から噴出する超高压熱水の圧力により、月自体がバラバラに破壊されるはずである。それに、月から放出された水は地表に達する前に完全に蒸発してしまうことは、隕石として地表に落下する岩石が極めて少ないことから、容易に理解できるだろう。

・人類と恐竜の共生

主張の根拠として、恐竜の足跡と人間の足跡が共存した化石、人類に踏みつ

けられた三葉虫の化石、恐竜土偶の発見、恐竜を飼い慣らす人類が描かれたイカ（ペルーの地名）の石などが挙げられる。しかし、これらの“証拠”はいずれもイカサマであることが判明している。また、創造論者は年代測定方法を都合の良いように解釈していると主張するが、放射性同位体による年代測定は、最近の質量分析精度の向上により、かなり信頼性が高いことが認められている。

シュメールの粘土板には、人類と恐竜との共生はまったく見られないし、そのような危険極まりない生物が存在していたら、“主エンキの御言葉”にも記載されているはずである。

・化石のでき方

大洪水による土砂流のすさまじい圧力で、一気に化石化したというが、確かにすさまじい圧力によって一気に化石化することは可能だろう。が、それがノアの大洪水によって恐竜が化石化したという証明にはならない。創造論では、遺骸は微生物によって腐敗し、化石化することなどあり得ない、などと主張する。だから、ノアの大洪水によって恐竜が化石化した、と。

化石化は、湿地帯や浅い川や海の近くで死んだ生物の上に土砂が堆積して酸素が遮断され、圧力によって泥や砂、水などに含まれる様々なミネラルが骨に浸透して骨の中の小さな隙間を埋め、経時により骨の形をした岩石となることにより形成される。酸素が遮断されなければ、腐敗して化石化しないから、化石となるものは圧倒的に少ない。さもなくば、地層中は化石だらけである。

また創造論では、異なる生物種の間種が発見されないから、すべての生物は現在のままの形態で主が創造した、と主張する。しかし、化石化するものは圧倒的に少ないから、始祖鳥のような例を除き、滅多に発見されないのが通例である。

・現在の砂漠

超大陸パンゲアに大洪水が発生し、洪水が舐めた跡が砂漠化しているという。しかし、現在の砂漠は“現在の大陸配置”で特定の緯度範囲にしか存在しない。年間を通して中緯度高圧帯に入る地域で、常に大陸性の乾燥した高気圧が居座り、雨が極端に少ない場所である。このような条件を満たす場所として、主に緯度 20～40 度付近に分布するが、山地の分布や風の向きも影響するし、大陸東岸ではモンスーンの影響を受けて多雨となるため、砂漠気候にはならない。

そして、分裂の前の大陸配置に於ける大洪水の跡が、現在の砂漠の分布に該当する証拠はどこにも無い。また、大洪水後に地層が堆積したのなら、大きな岩石ほど下の地層にあるはずだが、そんなこともない。

なお、太古の文明が栄えた地域は、その時代は緑が生い茂る地帯であったことが判明している。創造論が正しければ、古代文明が水の無い砂漠地帯に発生したことになるが、それはおかしい考え方である。そのため、ある時期に何らかの気候の激変、例えば地軸の移動などにより、砂漠化してしまったと考えられる。エジプトや中国などの古代文献には、突然太陽が西から昇るようになったとか、1 日中闇に包まれていたなどという具体的な変動が記載されていることから、地軸の移動のような現象は人類が文明を築いた後にも、実際に起きてい

たと思われる。

このように冷静に判断すると、創造論は間違いであると言える。やはり、正しいのは“主エンキの御言葉”であり、創造論は何らかの意図を持った意図的思想論である。何らかの意図とは、三百人委員会が来るべきハルマゲドンの後、聖書を引き合いに出して、自分たちが「神々」あるいはその代理人として振る舞うための正統性を主張することである。

D：まとめ

太古のメソポタミアとインダスで、シュメールの「神々」の闘争による核戦争が起きた。その根本的な原因は、女神イナンナの配偶者ドゥムジがマルドゥクの奸計により亡くなったことである。これにより、イナンナとマルドゥクの間で避けられない対立が発生した。特にマルドゥクは、“本来の王位正統継承者”であるはずのエンキの長男であるという自負があり、何かにつけてエンリル系と対立した。「神々」は各都市の守護神であったため、「神々」の闘争は人類にも反映された。それが最終的に、メソポタミア、インダスに於ける核戦争へと発展してしまったのである。

また、インダスの主神は、エンキから直接知恵を盗んだイナンナである。知恵の中で最も重要なのは、“兵器に関すること”である。イナンナは聡明な女神だったので、兵器の記述も極めて写実的で具体的である。そして、ドゥムジ亡き後、イナンナは性愛に溺れてしまった。それが、肉体を小宇宙と見なすインダス・カッパーラに於いて、左道カーマを生んでしまったのである。

7：全体のまとめ

1つの文明の記述としてはとても長くなったので、以下に全体をまとめる。

- ・インダス文明の主神はイナンナである。主神が女神であるため、インダス・カッパーラではアダム・カドモンが逆向き＝正面を向いている。
- ・イナンナは性愛に溺れたので、人体を「生命の樹」と見なすインダス・カッパーラでは、解釈を誤ると性愛＝カーマに墜ちる。
- ・インダスの創造神と「生命の樹」の対応は次のようになる。
慈悲：ヴィシュヌ、均衡：ブラフマー、峻厳：シヴァ。
- ・三柱の創造神の中では、ヴィシュヌは化身クリシュナに象徴されるイエスの予型であり、エンキに相当する。シヴァには暗黒面があり、リングで象徴される性器崇拝の根源であるから、イナンナに相当する。シヴァがブラフマーの首を切り落としたことはブラフマーに対する反逆であり、イナンナが全アヌンナキに君臨すると宣言したことを象徴する。しかし、ブラフマーとシヴァ（とヴィシュヌ）が一体であるダッタトレーヤは、アヌとイナンナが直接交わった象徴である。よって、シュメールと同様に、ほとんど登場しないブ

ラフマーは最高神アヌに相当する。

慈悲：エンキ、均衡：アヌ、峻厳：イナンナ。

- ・インダス文明の象徴と言えバヨーガ、リング、聖なるガンガーによる洗礼などであり、いずれもヴィシュヌではなくシヴァに関係する。そして、シヴァとヴィシュヌが合体したハリ・ハラでは、右側＝陽がヴィシュヌではなく、シヴァとなっている。これは、シヴァこそがインダスの本当の主神であり、謎を解く鍵であることを暗示している。つまり、インダス文明の主神はイナンナである。
- ・シヴァ信仰を基とするヨニ（女性器）に直立するリング（男性器）崇拝では、リングはシヴァ＝男性原理＝陽、ヨニはシャクティ（妃パールヴァティー）＝女性原理＝陰であり、陰陽の合一を表す。これを更に象徴化すると、蓮華に座す釈迦となる。更に、リングは柱である神を、ヨニは器である神殿を表し、神殿に「神」が降臨することも暗示する。シュメールの「神々」はジググラトに降臨し、リングはそそり立つジググラトであるから、リングの根源はシュメールのジググラトに降臨する「神々」の象徴である。そして、蓮の花は皇室の十六弁八重表菊紋に結びつくロゼッタ紋様が原型で、イナンナに関係が深く、“復活と再生”の象徴である。
- ・聖仙リシとはヒンズー教の仙人のことであり、不浄の地とされるガンジス川東岸に住んでおり、12人で1人の聖仙を構成する。つまり、日本に於ける八咫鳥に相当する。彼らは、インダス文明からの口頭伝承による本来の原始タントラを秘守してきた。
- ・タントラとは、宇宙の真理を人体の神秘から知ろうとする、インドに於ける密教思想のことである。タントラの原理は五大元素（地・水・火・風・空）に基づき、人間の11器官がそれに対応する。また、五大元素は五重塔の原型である。
- ・世界の創造はプラクリティ（物質原理）の動揺（振動）から始まる。プラクリティが振動して均衡を崩すと、その波紋は宇宙へ浸透し、能動的な現象世界が始まる。プラクリティの振動を音によって表現したものをマントラと言う。マントラは聖なる音声で、特に聖なる音“オウム＝AUM”は宇宙の根源的な音であり、音で表現された「生命の樹」であり、“AUM＝阿吽＝アルファでありオメガである”イエスをも象徴する。
A：ブラフマー、U：ヴィシュヌ、M：シヴァ。
- ・プラクリティの振動を視覚的に表現したものをヤントラと言う。その基本形は、上向きの三角形（プルシャ、精神原理）と下向きの三角形（プラクリティ）であり、重なり合っていることにより陰陽の合一を象徴する。それは六芒星－ダビデの星に他ならない。ヤントラは後に曼荼羅となった。

- ・プラクリティは 3 つの要素グナ＝“サットヴァ（純質）”“ラジャス（激質）”“タマス（鈍質）”によって構成されている。これらは 3 匹の大蛇として表され、「生命の樹」の象徴である。

慈悲：ラジャス、均衡：サットヴァ、峻厳：タマス。

- ・タントラでは、実際の身体に対して微細身体と呼ばれる存在を想定し、脊椎に沿って 7 つの霊的中枢チャクラがあると考え。チャクラはアダム・カドモンに対応し、背骨に沿うセフィロトだけでなく、左右のセフィロトを中心に合わせた 7 段階を示す。「生命の樹」に於ける慈悲の柱は陽、峻厳の柱は陰であり、均衡の柱は両者が一体となった太極を表す。それ故、慈悲の柱、峻厳の柱にある同じ高さのセフィロトは、均衡の柱に於いて 1 つに統一することができる。それがチャクラである。

- ・チャクラの覚醒とは、「生命の樹」の真理を知ることである。チャクラとは、人体のすべてが「生命の樹」で成り立っていることを象徴している。よって、真の解脱者は、肉体的修行を行わず、性愛に溺れず、薬物も使用しない賢者のことである。

- ・太古のメソポタミアとインダスで、シュメールの「神々」の闘争による核戦争が起きた。その根本的な原因は、女神イナンナの配偶者ドゥムジがマルドゥクの奸計により亡くなったことである。これにより、イナンナとマルドゥクの間で避けられない対立が発生した。特にマルドゥクは、“本来の王位正統継承者”であるはずのエンキの長男であるという自負があり、何かにつけてエンリル系と対立した。「神々」は各都市の守護神であったため、「神々」の闘争は人類にも反映された。それが最終的に、メソポタミア、インダスに於ける核戦争へと発展してしまった。

このように、シュメールとカッバーラという鍵によって、エジプト、インダス、そして日本が 1 本の糸で繋がりと、人類文明の真相と「神界」の核心に迫ることができた。（中国は、日本の陰陽道として完全に取り入れられている。）更に、非常に興味深い著書を発見した。

- ・文明のあけぼの（三笠宮崇仁著、集英社）
- ・古代メソポタミアの神々
（三笠宮崇仁監修、岡田明子・小林登志子共著、集英社）
- ・シュメールー人類最古の文明（小林登志子著、中公新書）

三笠宮崇仁殿下（“ひげ殿下”のお父様）は大正天皇の第 4 皇子であり、戦後に東京大学でヘブライ史を専攻し、中近東文化センター総裁をされている。著書を拝読すると、シュメールこそすべての文明の根源であり、あらゆる原型がそこにあることを主張されている。そして、聖書も大変詳しく勉強されている。本文中で聖書を引き合いに出し、それが古代文明の記述のどこに相当している

のか、という説明もされている。

殿下はこのように、聖書やシュメールに対して詳しい。ならば、殿下はすべてをご存じなのではなかろうか。ご子息の“ひげ殿下”が何かと皇室に対して意味深な発言をされている点も、注目に値する。

さて、これらの著書の中で興味深かった点を紹介し、カッパラーで解釈してみる。

- ・パラダイスの語源は古代ペルシャである。“pairidaeza”で、周りが囲われた土地、という意味である。よって、エデンの園が原型であることが解る。
- ・エンキは亀としても象徴される。魚、蛇、亀、いずれもエンキの象徴である。また羊もそうであり、“神の子羊”である。他に、マルドゥクは槍の剣先で武闘に関係し、イナンナは八芒（八角）星でヤハウエとアヌの象徴でもある。そして、太陽神ウツはサソリ、牛、馬にも関係する。サソリは日の出、日の入りの番人であり、後に翼が付いて鷲となった。牛は牛頭天王と関係する。馬は白馬に乗って再臨するイエスと関係する。人、サソリ（鷲）、牛、馬でメルカバーを形成する。
- ・太陽神ウツは、シュメールの楔形文字では“UD”である。これは“輝く”とか“白い”という意味である。また、ウツは肩から太陽光線を照射し、しばしばノコギリを手にして描かれている。太陽光線は太陽神の、ノコギリは大工の象徴であり、漢字破字法では“大工（工人）は白く輝く王＝天皇”である。天皇陛下はイエスから王権を授かり、ハンムラビはウツから法を授かった。そして、UD は“ユダ”とも読める。つまり、ユダ族の王イエスは太陽神ウツに関わりが深いことを暗示している。また“ウヅ”とも読める。＜日本の真相＞ではヘブライ語で“ウズ＝光”“マサ＝賜”と同時にイエスのことも指し、ヘブライ語のヨシュア・メシアッハがアラム語ではイシュ・マシャ、メソポタミア東部やインドではイズ・マシで、それが更に変化して“ウズ・マサ”となったと見なした。しかし、大元はこの“UD”だったのである。また、ウヅ＝ウズ＝ウジであるが、ウジというのは“ウジ・エル”というシュメール語があり、これは“神の力”という意味であるから、ウジ＝力である。そして、地上の生命に生きる力を与えているのは太陽であるから、ウツ＝ウジという解釈ができる。大洪水の後に太陽神ウツが現れ、ジウストラ（ノア）が舟の窓を開けるとウツはその光で舟を照らした、という伝承もあるが、これなども太陽神が人類の光であることの象徴である。
- ・太陽神ウツは、夜明けに東方の扉から現れ、日没後に西方の扉から天の部屋に入ると見なされていた。そのため、夜は冥界で過ごし、冥界を照らす冥界の神とも見なされた。冥界神の大元はエンキであり、エンキとウツは冥界でも繋がる。
- ・太陽神ウツは、アッシリアではアダド（イシュクル）と共に、占卜の神とさ

れた。占トの神の大元はエンキである。エンキから知恵を奪ったのはイナンナであり、イナンナ、ウツ、アダドはとても仲が良く、しばしば一緒に行動していたため、アダドと共にウツも占トの神とされたのであろう。

このように、もはや“確信”と言っても良いレベルであると思うが、「生命の樹」などは二次元的にしか考察していないから、三次元の立体として見ると、地球や宇宙の知られざる秘密など、まだまだ多くのことが隠されているだろう。恐るべし、カッパーラ、そして“知恵”の深遠さよ。

最近（2009年4月時点）入手した情報では、どうも異常気象の根本原因は、環境汚染による温暖化ではなく、太陽活動の異常化が原因のようである。2010年から2012年頃に太陽フレアの規模が過去最大となり、それに伴う磁気嵐によって電子機器が深刻な被害を受ける可能性がある、と2007年3月10日にNASAが公式に発表したことは、興味深い“観測事実”である。この2012年は、ニンギシュジッダが関係しているマヤの暦が2012年で一区切りとなっていることとリンクしている。そして、マヤの暦は太陽活動の変動周期と良く一致していることも解説されている。そうすると、天照大神＝イエス＝太陽神の再臨は、太陽のこのような危機を教えに来るため、とも解釈できる。

八咫鳥は、中国での逸話（太陽には足が3本の“金の鳥”が住む）に因むことは、＜日本神話＞で述べた。つまり、鳥は元々黒く、太陽の黒点を象徴したものであり、“金の鳥”で輝く太陽を表していると考えられる。それ故、八咫鳥は黒点の象徴でもあり、太陽の大変動に伴って奥義を公開する、という解釈も可能である。

以上、イナンナがあらゆる宗教の暗黒面の原型であることが、良く理解できただろう。＜神々の真相4＞では、マルドゥクとの関係も合わせ、偶像崇拜等、社会の暗黒面について考察する。イエスに対するサタン、ルシファーの意味を良く理解しないと、イエスの真相については解らないからである。

最後に、代表的なマントラである般若心経を解釈する。99%以上が誤った解釈であるため、サンスクリット原典とカッパーラに基づいた“正しい解釈”を紹介する。

参考著書：

- ・ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇 上・下」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
- ・飯島紀著、「楔形文字の初歩」、国際語学社。
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ「ヒンドゥー教の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ「チベット密教の本」

- ・三笠宮崇仁著、「文明のあけぼの」、集英社。
- ・三笠宮崇仁監修、岡田明子・小林登志子共著、「古代メソポタミアの神々」、集英社。
- ・小林登志子著、「シュメルー人類最古の文明」、中公新書。
- ・「神々」の図象は以下のページから引用。
<http://www.k5.dion.ne.jp/~dakini/tenjiku/zukan/index.html>
<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Desert/2995/linga.htm>

初版：2009 年 4 月

改定：2012 年 12 月

＊付録：般若心経（三蔵法師玄奘訳）

般若心経（しんぎょう）はマントラである。日本では、どのような宗派の仏教であろうと、大抵は般若心経が唱えられる。しかし、ほとんどの人は（坊主でさえも）、その意味するところを知らない。その正しい解釈を紹介する。ここでは、三蔵法師がサンスクリット語を漢訳したものを紹介する。漢字の下のカタカナは日本式読み、その下の（ ）は読み下し文、“”は意味である。（「真釈 般若心経」、宮坂宥洪著、角川文庫。）この著者は、教典を“有り難いもの”として捉えるのではなく、あくまでもサンスクリット語の学術的側面から解釈した“冷静な解釈”である。漢字表記と読みは真言宗智山派の伝に依る。

＜読みと意味＞

仏説摩訶般若波羅蜜多心経

ブッセツマーカーハンニャーハーラーミーターシーンギョウ

“仏（釈迦）が説いた偉大なる般若波羅蜜多の教え”

観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、

カンジーザイボーサー、ギョウジンハンニャーハーラーミータージー、

（観自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ぜし時、）

“観自在菩薩が、深遠な般若波羅蜜多の修行を実践している時、”

照見五蘊皆空、度一切苦厄。舍利子、

ショウケンゴウウンカイクウ、ドーイツサイクーヤク。シャーリーシー、

（五蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度せり。舍利子よ、）

“五蘊あり、しかも、それらは自性空であると見極めた。シャーリプトラよ、”

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、

シキフーイークウ、クウフーイーシキ、シキソクゼークウ、クウソクゼーシキ、

（色は空に異ならず、空は色に異ならず、色即ちこれ空、空即ちこれ色なり、）

“ここに於いて色は空性であり、空性は色である。色とは別に空性は無く、空性とは別に色は無い。色なるものこそが空性であり、空性なるものこそが色である。”

受想行識、亦復如是。舍利子、

ジューソウギョウシキ、ヤクブーニョーゼー。シャーリーシー、

（受想行識も、またかくのごとし。舍利子よ、）

“受、想、行、識についても、まったく同様である。シャーリプトラよ、”

是諸法空想、不生不滅、不垢不淨、不増不減。

ゼーショーホウクウソウ、フーショウフーメツ、フークーフージョウ、フーゾウフーゲン。

（この諸法は空相なり、不生にして不滅、不垢にして不淨、不増にして不減なり。）

“存在するものはすべて空性を特徴としていて、生じたというものでなく、滅したというものでなく、穢れたものでなく、穢れを離れたものでもなく、足りなくなることなく、満たされることも無い。”

是故空中、無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無限界乃至無意識界、

ゼーコークウヂュウ、ムーシキムージューソウギョウシキ、ムーゲンニービーゼツシンニー、ムーシキショウコウミーソクホウ、ムーゲンカイナイシームーイーシキカイ、

（この故に空性の中に、色は無く受想行識無く、眼耳鼻舌身意無く、色声香味触法無く、限界無く、ないし意識界無く、）

“これ故に、空性に於いては、色は無く、受・想・行・識無く、眼耳鼻舌身意無く、色声香味触法も無い。限界から意識界に至るまで、ことごとく無い。”

無無明亦無無明尽、乃至、無老死亦無老死尽、無苦集滅道、無知、亦無得。

ムームーミョウヤクムームーミョウジン、ナイシー、ムーロウシーヤクムーロウシージン、ムークージュウメツドウ、ムーチー、ヤクムートク。

（無明無く、また無明の尽くること無く、ないし、老死無く、また老死の尽くること無く、苦集滅道無く、知無く、また得も無し。）

“明知無く、無明無く、明知の滅無く、無明の滅も無い。老死無く、老死の滅も無い。苦・集・滅・道無く、知ることも無く、得ということも無い。”

以無所得故、菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、

イームーショートツコー、ボーダイサッター、エーハンニャーハーラーミーターコー、

（得る所無きをもつての故に、菩提薩埵は、般若波羅蜜多に依るが故に、）

“これ故に、ここには如何なるものも無いから、菩薩は般若波羅蜜多を拠り所として、”

心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃。

シンムーケーゲー、ムーケーゲーコー、ムーウークーフー、オンリーイッサイテンドウムーソウ、クーギョウネーハン。

（心に罣礙（けいげ）無し、罣礙無きが故に、恐怖あること無し、一切の顛倒夢想を遠離して、涅槃を究竟せり。）

“心の妨げなく安住している。心の妨げが無いので、恐れが無く、無いものをあると考えるような見方を超越して、まったく開放された境地でいる。”

三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提。

サンゼーショーブツ、エーハンニャーハーラーミーターコー、トクアーノクターラーサンミヤクサンボーダイ。

（三世の諸仏は、般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり。）

“過去・現在・未来の三世に出現するすべての仏は、般若波羅蜜多を拠り所として、無常の完全な悟りを成就している。”

故知、般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、は無上咒、は無等等咒、
コーチー、ハンニャーハーラーミーター、ゼーダイジンシュー、ゼーダイミョ
ウシュー、ゼームージョウシュー、ゼームートウドウシュー、

（故に知るべし、般若波羅蜜多は、これ大神咒（だいじんしゅ）なり、これ大
明（だいみょう）咒なり、これ無上咒なり、これ無等等（むとうどう）咒なり、）

“それ故に、知るべきである。般若波羅蜜多の大なるマントラ、大なる明
知のマントラ、この上ないマントラ、比類なきマントラは、”

能除一切苦、真実不虛故、説般若波羅蜜多咒。即説咒曰。

ノウジョーイッサイター、シンジツプーコーコー、セツハンニャーハーラーミ
ーターシュー。ソクセツシュウツ。

（よく一切の苦を除き、真実なり、虚しからざる故に、般若波羅蜜多の咒を説
く。即ち、咒を説いて曰わく。）

“すべての苦を鎮めるものであり、偽りが無いから、真実である。般若波羅蜜
多の修行で唱えるマントラは、次の通りである。”

掲諦、掲諦、波羅掲諦、波羅僧掲諦、菩提、娑婆賀。

ギャーテイ、ギャーテイ、ハーラーギャーテイ、ハラソウギャーテイ、ボーデ
ィ、ソワカー。

“ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハ
ー。”

般若心経。

ハンニャーシンギョウ。

“以上で、般若波羅蜜多のマントラ、提示し終わる。”

<解説>

(1) 漢訳から生じた誤解

般若心経に限らずお経というものは、中国の僧侶がサンスクリット原典を音
写したものであり、漢字は当て字であって、一部を除き、基本的に意味は無い。
当時の中国の習慣として、漢訳されたサンスクリット原典は破棄されていたの
で、奇跡的に残された敦煌文書などを除いて、中国にサンスクリット原典は残
されていない。そのため、漢訳から生じた誤解が、連綿と受け継がれている。

しかし、驚くべきことに、法隆寺に般若心経のサンスクリット写本が残され
ており、世界最古のものであることが判明した。（さすが、聖徳太子＝秦氏縁の
寺だけのことはある。）それ以外にも、様々な写本が日本には残されている。

よって、本来の意味を知るためには、原典に当たらなければならない。漢訳
だけに頼っている坊主や学者の解説は無意味である。

(2) タイトル

原点には、タイトルが無い。インドの書物では、最後に“以上、～で終わる”と締めくくるが、これを尾題と言う。漢訳では首題が無いと格好がつかないので、これを最初に持ってきている。原典の尾題は、次の通りである。

・般若波羅蜜多心（プラジュナー・パーラミター・フリダヤ）

仏説も摩訶も経も無い。漢訳としての体裁を整えるために、三蔵法師が付け加えたのである。

プラジュナーの意味は“智慧”である。この字は、一般的な知恵とは異なり、世間的な知恵を超越した仏の知恵という意味である。これは後で解説するが、「生命の樹」の奥義を知ることであり、今までは知恵と表現してきたので、知恵とする。

パーラミターの意味は“完成”である。そうすると、“知恵という完成”ということになるが、一般的な知恵自体は完成されたものであるから、完全なる知恵＝“「生命の樹」の真理”に至っている状態のことである。

フリダヤの本来の意味は“心臓”で、派生的に“心、中心となるもの、真髓”という意味がある。しかし、三蔵法師以前に鳩摩羅什（くまらじゅう）が“摩訶般若波羅蜜大明咒經”と訳しており、“心經”とは“大明咒經”である。大明咒などの“咒”とはマントラのことであり、“經”とはスートラ＝経典、教えである。

よって、般若波羅蜜多心とは、“完全なる知恵に到達するためのマントラ”ということである。

(3) 觀自在菩薩

原典名アヴァローキテーシュヴァラを鳩摩羅什が觀世音菩薩と訳し、それを三蔵法師が觀自在菩薩と訳した。菩提薩埵を略して菩薩であり、“在家の求道者”という意味である。

觀ることが自在、ということは、既成概念や現世のしがらみに縛られることなく、真理を見抜くことができる状態である。

つまり、觀自在菩薩とは、“真理を見抜くことができるようになった在家の求道者”ということである。

(4) 五蘊

蘊は蓄え、集まりを意味し、原典ではスカンダと言ひ、元は“樹の幹”という意味で、全体を構成する主要素ということである。

ここで言う五蘊とは、色、受、想、行、識である。色（ルーパ）は姿形あるもののことで、自己を構成する主要素だから、自分の体のこと。受（ヴェーダナ）は知らしめる作用のことで、感覚のこと。想（サンジュニャー）は全体的に知ること、表象のこと。行（サンスカーラ）は何らかのものをまとめて創り出すことで、イメージを総合して集めて意識を生み出す作用のこと。識（ヴィジュニャーナ）は分けて知ること、解ること。

つまり、五蘊とは、およそ“知を主体とした形成作用＝自己の総体”と言うべきものであり、これがあるからこそ、人間は人間たることができる。

照見とは、ある種の高みに到達し、そこから観ること。皆空とは自性空＝それ自体を欠いていることであり、無我のこと。

ならば、照見五蘊皆空で、“自己とは、五蘊が仮に集合したものにはすぎないということを見極め、無我を了解する”ことである。自己形成が無ければ、無我の境地に至ることはできないのである。

(5) 度一切苦厄

原典には無く、鳩摩羅什と三蔵法師の漢訳だけにある。經典の趣旨を汲み取った上で、考え抜かれて置いた字句。

(6) 舍利子

釈迦の二大弟子の1人、シャーリプトラのこと。シャーリという母親の息子、という意味。

(7) 空（くう）と無の違い

空は空っぽのことで、無は存在しないこと。例えば、水の入っていない空の容器があるとす。容器は存在するが“空”である。無いのは水である。インド人は、この状態を“容器には水の無（無い水）が存在する”と表現する。英語で“*There is no water in it.*”などと表現するのと同じこと。

(8) 諸法

法とはダルマのこと。原意は、保持されるもの、存在するもの、である。肉体は自分のダルマである。

諸々のダルマとは、自己形成のプロセスに於いて、経験内容を構成する総体の要素を分析し、分類すること。このように、自己をダルマに解体することによって、自己という一見自明な存在は単に“形成されたもの”であり、固定的な自我というものはどこにも無い、つまり無我であることを認識することが、照見五蘊皆空なのである。

(9) 得と非得

本来は無我であるのにも関わらず、自己という存在があるように見えるのは、ダルマを結合する作用があると考え。ダルマを結合させる働き＝ダルマの獲得作用のことを“得”、分離させる作用を“非得＝無所得”と言う。

(10) 罣礙

罣は引っ掛けるもの、礙は妨げるもののこと。心無罣礙で、心に妨げが無いこと。

(11) 遠離

原典ではアティクラーンタで、階段を昇りきっていること、超越すること。

(12) 涅槃

原典ではニルヴァーナであり、その元はニル・ヴリである。意味は、ヴリが“覆う”、ニルは否定の接頭辞で、覆いの無い状態のこと。

現在では、釈迦が入滅した日、死後の世界にあるもの、とされているが、誤解も甚だしい。

(13) 阿耨多羅三藐三菩提

原典ではアヌッタラ・サンミャク・サンボーディであり、この上ない、完全な悟りのこと。

(14) 掲諦

原典ではガテーで、“往く”を意味する動詞から派生した言葉。波羅掲諦、波羅僧掲諦、菩提もすべて、般若波羅蜜多を言い換えた言葉。すなわち、“知恵という完成”を讃えるマントラ。

(15) 娑婆賀

原典ではスヴァーハー。インドでは古くから様々な儀礼に於いて「神々」に祈願し、供物を捧げる際に唱える定型の終句として使われてきたもの。成就あれ、というような意味である。

(16) この著者の解釈

釈迦が初めて説法したとされているサルナートにある考古博物館に、仏伝レリーフが展示されている。それは、釈迦の生涯で起こった、4つの重要な場面を刻んだものである。誕生、修行、初説法、入滅の場面が、下から順に積み重なる4層の建物のように配置されており、建物の一番上には、瞑想中の釈迦の姿が刻まれている。

この著者は、これを精神上昇の4段階のプロセスであると認識し、次のように解釈している。

・1階：出発地点、2階：世間一般の自己形成、3階：無我を知る、4階：空を観る、屋上：人知を超えたレベル。

観自在とは4階のレベルであり、各階を順に昇って行って“完全に開放された境地”に至る、としている。だからこそ、シャーリプトラに説いているのが、他の菩薩ではなく“観自在菩薩”である。

サンスクリット原典に基づくこのような解釈は言語学的に正確であり、また、このような重要なレリーフに基づく著者独自の解釈も、言語学的見解に合致する優れたものである。だから、“新釈”ではなく“真釈”である。

かなり核心に迫るところまで解釈できているが、釈迦が悟りを開いたことは「生命の樹」の真理を悟ったことに他ならない、という観点にはまったく気付いていないので、次の項で説明する。

(17) カッパーラによる解釈

般若心経の真相を知るためには、釈迦の生涯を知らなければならないので、簡単に紹介する。

“釈迦は 16 歳で結婚して妃ヤショーダラーとの間にラーフラをもうけたが、人生に疑問を抱き、29 歳で一切を捨てて出家した。釈迦は断食などの苦行を行っていたが、苦行が無意味であることを悟り、村娘スジャータの捧げる乳粥で体力を回復した後、ブッダガヤにあるアシュヴァッタ樹（インド菩提樹）の下で瞑想した。そして夜明け近く、“明けの明星”が輝く頃、35 歳でついに悟りを開いた。

人生の最後は、クシナガラ郊外で迎えた。そこには、東西南北に 2 本ずつのシャーラ（沙羅樹）が生えていたので、この木を沙羅双樹と呼ぶようになった。シャーラとは、優れた木、堅固な木の意味であり、沙羅はそれを音写したものである。釈迦は 2 本のシャーラの間に横たわり、80 歳で入滅した。遺体は火葬され、遺骨（仏舎利）はストゥーパに納められると同時に、信者に分け与えられた。（名古屋の覚王山には、貴重な仏舎利の 1 つが納められている。）”

・ 苦行

苦行が無意味であると悟ったのは、原始タントラの本来の意味を知ったからに他ならない。

・ アシュヴァッタ樹（インド菩提樹）

3：(6)で述べたインドに於ける「生命の樹」アシュヴァッタである。ここで悟りを開いたということは、「生命の樹」の真理を悟ったということである。

悟りを開いた時には“明けの明星”が輝いたが、“明けの明星”＝イエスである。

・ 沙羅双樹

東西南北の四方向でメルカバーである。それぞれ 2 本で計 8 本で、ヤハウエ＝イエスの象徴である。

シャーラとは優れた木、堅固な木の意味で、これも「生命の樹」であり、釈迦は 2 本のシャーラの間に横たわって入滅したから、「生命の樹」と「知恵の樹」の「合わせ鏡」でもある。

つまり、釈迦が開いた悟りとは、「生命の樹」の真理を悟ったことに他ならない。釈迦に関して十二因縁（無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死）など、12 に関係することは当然、十二支族、そして 12 人使徒を象徴していることは言うまでもない。

この著者は仏伝レリーフを、精神上昇の 4 段階のプロセスであると認識した点は鋭い洞察力であると言える。人間は誕生した時点がマルクトであり、そこから「生命の樹」を上昇する。それは、マルクト→下層世界→中高世界→至高世界という 4 段階であるから、仏伝レリーフは「生命の樹」を 4 段階で上昇す

る過程を描いている。

また、屋上の釈迦を含めると 5 段と見なせるが、これはタントラ原理の五大元素に対応しており、それを立体で象徴したものが五重塔で、その原型はストゥーパであるから、悟りを開いた釈迦の入滅に結び付けられる。

つまり、般若心経とは「生命の樹」の真理を悟るためにはどうしたら良いのかということ、ある種の高みに到達し、そこから観ることができる観自在菩薩が弟子のシャーリプトラに説いている情景描写なのである。その方法とは、次の通りである。

“従来の固定観念に縛られることなく、無我を認識することにより（照見五蘊皆空）心に妨げが無い状態（心無罣礙）となり、「生命の樹」を上昇していく（遠離）ことができる。そして知恵を得て超越したものの見方ができるようになり（究竟涅槃）、「神界」の真理（阿耨多羅三藐三菩提）に至る。

瞑想の際に唱えるマントラは、「ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハー」である。これは“知恵という完成”を讃えるマントラである。“知恵という完成”とは、一般的な知恵を超越して、「生命の樹」に隠された真理を知ることには他ならない。”

知恵を知るのであれば、深遠なる智慧で遍く宇宙を照らす勢至菩薩でも良いように思われる。しかし、知恵を得て超越したものの見方ができるようになるということは、「生命の樹」の至高世界に到達することである。至高世界からは絶対神の目＝“すべてを見通す目”が覗いているが、これは<神々の真相 1>で述べたように、“エンキ＝ニニギク（目の清い神）の目”であった。つまり、至高世界からは「知恵の神」エンキが覗いている。よって、観ることが自在で、“知恵を得て超越したものの見方ができるようになった＝真理を見抜くことができるようになった”在家の求道者である観自在菩薩こそ、“すべてを見通す目”の象徴に他ならない。そして、涅槃とは「生命の樹」に於ける至高世界のことであり、その上にはそれ以上の世界は無いから、まさしく“覆いの無い状態”である。

このように、本文のどこにも、死んだ者の魂が到達すると言われている彼岸や涅槃などについて述べた部分はない。お経は死者にはまったく関係の無い内容であるから、お経を唱えたところで、死んだ者の魂が浮かべられたり、悪霊払いで悪霊が退散したりするということとはあり得ないのである。まして、観自在菩薩は現世の在家求道者であり、天国で救ってくれるような存在ではない。それは、釈迦も同じである。

すべての弟子が釈迦の教えを理解できたわけではなく、教えは即座に歪んでいった。そして、中国では原典を廃棄してしまう習慣があったから、現在の仏教は本質からまったくかけ離れてしまった。まるで、イエスの教えを理解できなかったペトロからパウロを経て、現在のキリスト教が成立したように。